明治三十二年七月五日發兌

女鑑

第百八拾四號

東京國光社

女鑑第百八拾四號

目録

野田こせ子



女の心

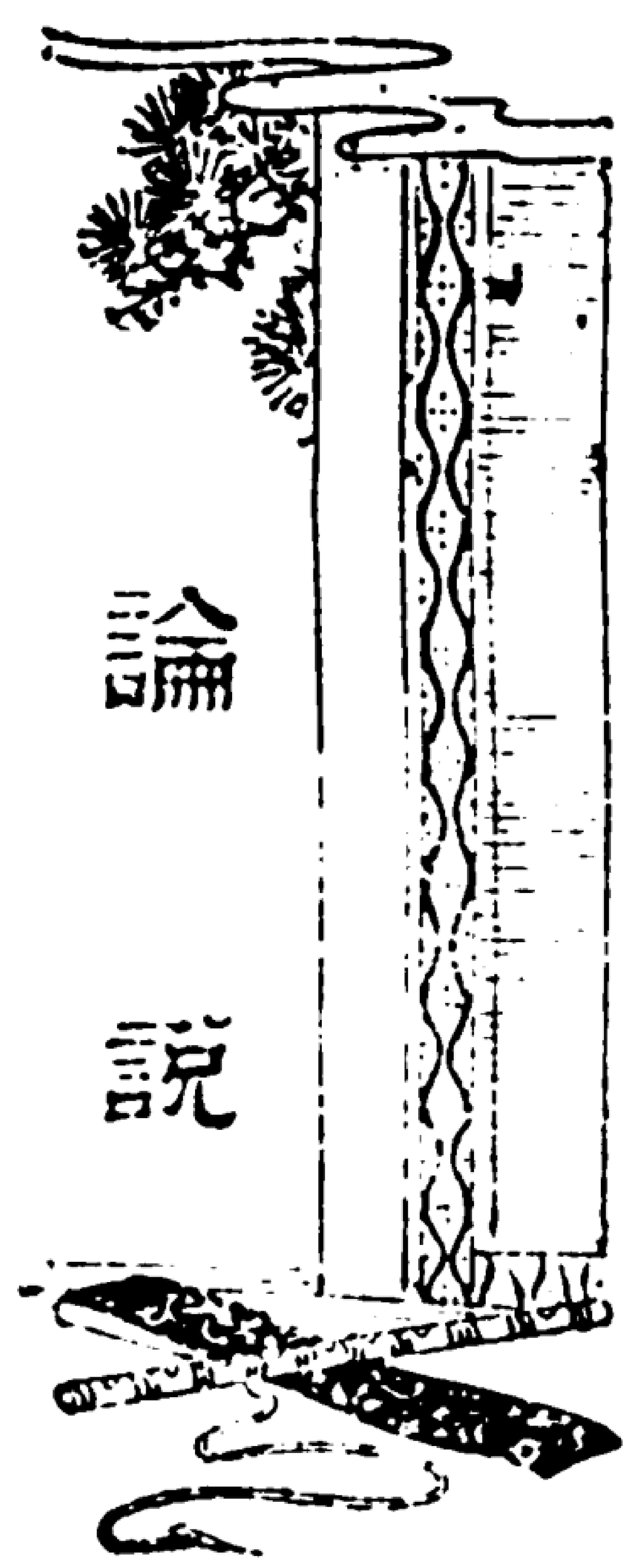
あはれ、女の心、女の心は、とかく、意地わるき者とせられ、嫉妬深きものとせられ、陰険のものとせらる。美人を見ては、外面如菩薩、内心如夜叉などそしらる。醜婦、また、心かたましく、嫉妬深しなど、よきにもあしきにもそしられ。孔子も、女子と小人は養ひ難しと云はれたり。あはれ、口惜しき事ならずや。女の心、誠にしかならんか、しかならんか、もししかならんには、誠になげかはしき限りなり。

むかし魏王、楚國より、容顔すぐれし美人を得て寵愛深かりけるを、其の后、又、之と和して其の美人を妹の如くいつくしめるに、王は、深く、その后の心をよみし玉へり。しかるに、其の后、ひそかに、其の美人に聞ゆるやう、御身が容は、世に類なし。王、たゞれん身が鼻をのみ醜しとればす。後、王に見え奉らんときは、かま

へて、鼻を掩へと教へけり。美人、之を眞にして、王にまみゆる毎に、鼻を掩ひて向へければ、王、いぶかしく思ぼし、皇后にとはせ玉へるに、后答へけるやう、王の香を嗅ぐをにくむにや侍らんと申せしに、王、大に怒り、鼻をそぎて、捨てにけりとぞ。これ、后が嫉妬より起せし工みなり。これ、その嫉妬陰険の甚しきものにて、楊貴妃も、また、嫉妬ふかく、數十の美人をして、敢て、王に近かしめざりき。又、かけまくもかしこけれど、神代のむかし、岩長姫容あしくて、天津日高子番能邇邇藝能命に見かしこまれ玉へるとき、姫いからせ玉ひて、御子の御命をちゞめんとの玉へるも、又、嫉妬の一にして、すさまじき事どもなり。さては、女は嫉妬の心の深きにや、此の頃聞き及びしに、ある女學校の生徒の、あまたある中に、名高き美人三人あり、校中のもの、此の人を見る事、みな毒虫の如くにして、心よく交るものまれなりとぞ。其の他、學問、藝術、富貴等にてそねまるゝもの、又、少なからずと聞く、さては、女の心は、そうじて嫉妬深きか、嫉妬は、皆の女の疾なるか、否々、業平の妻はしからず。大内義隆の夫人、またしからず。下野にも、さやうならぬ婦あ

れば、大和にも、嫉妬なき女ありたり。嫉妬の心、皆あるにもあるまじ、なれど、女は、れもてはやさしきげに、言葉をかざり、色をつくるも、往々、内心夜叉にて、人をそねみ、人を憎くみ、人をうらみ、人をきづつくるもの少なからず。殊に婦人は、意地わろきもの、甚多し、人を憎むは、やがて己をにくむにて、心まがれるは、己曲れるなり。近き頃のはなしなるが、或家のもの、萬事に意地わるく、わづかに、人の、己れがろぢを通ふをさへさへぎりて、人のために、病母を失はれたるものさへあり。嫉妬は、とがまを、腹中にたくが如くにして、人をきづつくれば、必ず、己が腹破れ、心まがれるは、やがて、よもぎを、腹中に植ゑたくにて、ともすれば、人よりからまはしうおもはる。あはれ、ひめたち。やさしき、庭の姫松たらんと欲する姫たち、あはれ、夫人。めでたき國の貞竹たらんと欲する夫人は、かの嫉妬のとがまに更ふるに、たゞ、うつくしきまどかなる玉を以てせよ。人、たとへ、くだくとも、やくとも、うつくしき、もとの心をくだかず、まがりくねりたる蓬を、自からかりつくして、すぐなる麻を、心にうゑ、如何に、まがりたるよもぎも、そまも、之

にあへば、をのづから、すぐにならんやう、みづからの心を正し、をのづからに、人の心を正さんやう、誰もく心がけて、いつかは女子の心は玉の如し。花の如しと信じらるゝやうつとめよや孃たち、つゝしめや姫たち。



忠本論略（續）

霈軒

我國の道徳に於ては、忠孝一致といふことは、誰も言ふ所であるか、何故に忠孝一致するかといふことは、最も精確に知らねばならぬ。唯々、儒敎の格言位で、説き得らるゝものでない。本來漢土と我皇國とは、國体が異なるゆゑ、漢土にては、忠孝一致の實が行はれぬ。それで忠孝の關係についても、孝徳之本也、敎之所繇生也、といふ様に、孝を中心として、忠に移し及ぼすことになつてをる。我國では、忠孝一致を説くに、必、事の實際、即建國の歴史上から、説かねばならぬ。我國は、畏れ多くも、上は、天皇陛

下を始め奉り、下は、我々微賤の者に至るまで、盡く、其の祖先を一にすることで、即ち神別も、皇別も、皆天神の胤裔である。（蕃別あれども、永年、皇化に浴し、事實、神胤と差異あることなし、）而して、天神の御正統御本系か、即ち　皇室にましまして、太宗家とも、申上ぐべく、我々臣民は、畢竟、その支流分派とも、申すべきものである。故に忠は、孝の全体にして、孝の終極ともいふべく、孝は、忠の部分にして、忠の親近なるものともいふべきものである。然るが故に、先祖代々、親たるものゝ、本意は、已が忠を志すが如く、子に望むに忠を以てし、子たるものも、大孝を立てんには、忠を立つべきである。萬が一にも、親が子に向ひて、忠君は兎も角も、己に孝行さへすればよいといふ様な、了簡があつたならば、この親は、不忠といふものである。親を不忠に陥らしめては、子たるものは、大不孝となる。かゝる場合に於ては、飽くまでも誠實に、親の不了簡を諫め、不忠に陥らざらしむることにせねばならぬ。小松内府の、世に四恩あり。皇恩を最とすといひて、父を諫めて、不忠に陥らざらしめし如きは、誠に、忠孝一致の實を得たものである、漢土の、君には、三諫して聽かれざるときは、則ち、之を逃る。親には、三諫して聽かれざるときは、則ち號泣して、之に隨ふなどの教は、我國には、取られぬ言である。そこで我國にて、忠孝の一致する所以は、二個の要點がある。第一は、忠孝の一道なること、即ち君臣同祖なること、

第二は、忠が全体にして、孝が部分なること、若し忠孝が、道の方向を異にするときは必ず両者の乖離する場合を生じ、若し忠孝が、徳の大小を同ふするときは、必ず両者の抵觸する場合が起る。然るに我國の成立上、決してかゝる憂なく、忠孝の實、善く一致して、かの忠孝両全せずなどいふ言の無用なるは、實に神國の神國たる所以でありませふ。

○大君のみことかしこみ磯にふり海原渡る父母おきて　丈部造人麿

○大君のみことにされむ父母を齋瓶とおきてまゐてきにしを　雀部廣島

○子を思ふ道には祈るすめらぎに仕ふるわとを違へさらなむ　藤原雅頼

○もゝのふのおみのをとこは大君の命のまに〱きくとふものそ　讀人しらず

かくの如く、忠孝の關係からして、藤樹先生の說は直ちに取りて、國家教育の上に、行ひ難ひ、若し五倫では、親が最も重い、五常では、孝が最も重いといふ樣な觀念を、國民

に與ふるときは、我國體に、適合せぬ。そこで前にも述ぶる通に、忠本論といふを立てました。先、第一に、忠の字から說きません。藤樹先生は、孝の字を分拆して、孝は老子なりと申されましたが、拙者は、圖らずも、忠は中心なりといふことが浮びました。我國では、忠を中心とすべきに、忠の字その物が、直に中心といふことを示してあるは、誠は妙なことゝ思ひ、喜んで友人にも話したところが、それは古人が、言ふた事がある樣に覺ゆると、申したものもありましたが、後に、程子が、忠者中心也と說いてをり、又忠經に忠者中也、或は、忠者一其心之謂矣、などの言を觀て、大に、右の考を確實にしました。それからいつも、此事につきて、考を凝して居りましたが、或とき、偶然に、中は一貫なりといふことを、思ひ得ました、一貫とは、口を、｜が貫いておるからであります。孔子が、我道一以貫之と、曾子に語られたところが、曾子が會得して、唯と申したに、そこに居合した、他の弟子には分らぬところから、曾子に問ふたら、曾子は、夫子の道忠恕而已矣、と答へました、恕は如心で、つまり忠と大差はありますまい、但、此のところの忠は、君に對することに限らず、誠といふ樣な、廣き意の語でありません。兎に角、一貫といふは、忠心歸着の意味で、其の一たるものは、忠恕とすれど、これも亦、忠本論の適証となります。此の事を思ひ得ましたは、先年在京中のことでありました故、副島

老伯に參りまして、敎正を請ひました、即ち、忠者中心也、中者一貫也、といふことを思ひますが、如何でありませんと、問ひましたから、老伯の敎には、そうじや、中の一貫といふ故に、人体に神明が通じてござるところじやとて、指先にて、疊に畫して、示されましたには、〇は、即ち肉体じや。それを、丨、神が通じてとて、自身の頭上を、指されました。そこで、拙者、はつと敬服しました、最早何の疑ひもありませぬ。忠者中心也。中者一貫也。動かぬことゝ信じました、

右は、忠といふ漢文字からの研究でありますが、これより忠の字に當る國語に就ての考を述べませう。忠の字には、「マメ」、「マコト」、「タヾシ」、「キヨシ」などいふ訓があります。中の字には、「ナカ」、「ウチ」、「アタル」などの訓があり、古くは、中の字に、「マゴヽロ」、と訓じたるもあり。又、心の字には、「ココロ」、「ココロト」、「ムネ」などの訓があり、古くに、心の字に、「ナカ」と訓じたるもあり。又中心を訓讀すれば、「ナカゴコロ」となりますが、忠を直に、「ナカゴ」と、訓じたるもあります。さて、右の語意に因て、說くときは、「マメ」、は眞見にて、眞見は、天見、即ち神見といふと、同じ義になります、故に「マメ」は、神靈の覺照するところで、夫の儒敎の明德、或は、良知などいふ、即ち、人の睹ざる所に於て、獨知するところのもの、屋漏に愧ぢざる所のものなどは、皆この「マメ」の謂ひでありませぬ。

又「マコト」は、眞心で、眞心は、天心で、即ち神心であります、即ち本心に享有する所の、神靈のことで、夫の誠といひ、眞實无妄といひ、至誠如神といふものは、皆この「マコト」のことでありませふ。「マコト」といふことに就ては、尙申すべきことがありますが。眞心の心を、言の字、事の字に、當てゝも、同じく「マコト」の訓であります。我國にては心、言、事、共に一語で通じ、漢土の如く、一々分折してない。こゝが、尤も肝要なることで、本來、心と言と事と別義でない。若し別ならば、僞りことである。漢土にては、言行一致とか、知行合一とか申しますが、實は、文字に區別がある樣、兎に角、實際が、一致せぬから、むづかしき理屈も出で來る。我國惟神の大道に於ては、言行一致も、知行合一も、固よりのことで「コト」の一語で、一貫してあります。我國を、言靈の幸ふ國といふは即ちこれらのところでありませふ。故に、我國の道を學ぶには、必ず、國史の事實上に於て講究し、尙ほ、言靈の上に覺悟せねば、眞意は分らぬことかと思はれます。さて又、「ナカ」、「ウチ」、は申すまでもなく、偏倚に對し、外邊に對したる意で、皇宮を禁裡、又は、內裏など丶申し上げますが、これは、皇室は、國家の中、天皇は王民の中、皇居は、國土の中なるの意でありませふ。上代には、豐葦原の中國といふ語もありますが、即ち我國は、世界萬國の中たる、意でありませふ。又「アタル」は、即ち的に箭のあたるので、

中星を、すつかり通つたところで、亦、一貫の象があります。又、中を「ココロ」と訓じたるは、中は「ウチ」で、「ウチ」は、表の對「ウラ」で、古語には、心を、「ウラ」と言ひしと同じく、普通の語でも、物の中を、「シン」といふが、「シン」は、心の意である。中を「ココロ」と訓するは、畢意、此等の意であらうと、思はれます。はた又、心を、「ココロ」と訓するは、凝の義で、心の心たる、凝結して、始めて、見はれます。もし漫散するときは、所謂心不レ在焉、視而不レ視、聽而不レ聞、食而不レ知二其味一、又操則存、舍則亡、出入無レ時、莫レ知二其郷一唯心之謂歟、といふか如く、無きと同じことであります。又「ココロト」の「ト」ハ利きの「ト」で、即心機の鋭利なる上から、いふたものでありませふ。又「ムネ」は、胸で、身体の中央で、あるゆゑでありせふ。又心を「ナカ」と訓せるは、中を、「ココロ」と訓せると同じことで、尙忠を「ナカコ」と訓せる、「コ」は、心の「コ」、即凝で、眞心を、「マコト」といふ、「コト」は、この「コ」と利の「ト」でありませふ。

○皇后陛下

ひとりのみ思ふ心の善し悪しをてらしわくらん天地の神。

○　讀人しらず

思はぬをおもふといふはゝ眞鳥住卯名手の杜の神し知らさむ。

○

なき名ぞと　人には言ひて　有りぬべし　心の問は丶　いかにこたへむ。

讀人しらず

これにて、忠、又は、中心の語の意義を述べましたが、要するに、忠は、人の天神より、賦與せられたる、本性にして、諸徳諸善の、中心歸着である。而して、この本性の忠が、發見する所の、最も重大なるものが、君に對するの道、即ち忠である。又、本性の忠が、親に對しては、孝となり。兄弟夫婦朋友に、對しては、友和信となり、乃至一切の處事接物の上に、發見して、諸徳諸善となります。もし、本性の忠より出ぬものならむ、皆惡徳僞善であります。今、試に、教育に關する御勅語に就きまして、圖を以て述べませふ。即ち本性の忠が、中心で、發見の尤も重大なるものが、第二圈の忠良で、括孤の顯彰祖先之遺風は、孝といふべく、即忠孝の一道なる所以が分ります。第三圈の扶翼天壤無究之皇運は、畢竟、忠君の事で、即ち第四圈の孝弟以下の、諸徳を包括するもので、亦、忠孝の範圍の大小關係も分ります。又第四圈の諸徳は、忠の發見で、廣公益より以下、國家に關しまするところの徳は、無論、家族人倫の徳より、自己一身上の修養に至るまで、一として、忠君の要徳に屬せざるはなきことか分ります、即ち、忠者中心也、中者一貫也で、中心教育の主旨であります。

教育勅語忠本圖



女子の體育法に就て

三輪田眞佐子

さいつころ、三浦はる子の君、女子の体育法につきて、いとめでたき、文をものして、女鑑部に寄せられけり。その由來は、本年、京都に於て催しつる、武德祭の折、婦女子の長刀術、及び、柔術を行ひけるを見て、最良き體育法なりと賞賛しける人の言の葉を聞き、君には、これを否定する意見をものし給ひて、その當非を女鑑記者に正さんとなん。

おのれ、大体につきては、君の高論に異議なけれども、今や、諸の、婦人問題盛なる風潮に際しぬれば、從ひて、女子の體育につきても、種々の法案を提出するものあり。故に愚考をものして、廣く讀者と共に研究せん。

そもそも女子體育の必要なるは、その國民の母たる、資格の點より考ふるもその一家の主婦たる、任務の上より考ふるも、將た、廣く、人生の幸福につきて考ふるも、明了なることなれば、今更、説明するを爲さじ。現に、おのれも、日本體育會女子部の委員を囑托せられけるを以て、單に、女子體育の必要を感ずるのみならず、亦、その體育法につきても、兎や角と思ふなり。

蓋し、女子体育の必要につきては、世論、をさをさ異説あらじ。されどその目的、及び、法

方に至りては、未だ、定論なきが如し。おのれ思ふに、女子体育の目的は、女子天賦の發達を助成し、并に、女子自然の姿勢を完成し、以て、天壽を全うし、天職を盡すにあり。凡そ。天地には、自然の法則行はるゝを以て、何物も何人も、これに背反すること、能はざるべし。されど、女子の體育を行はんとするにも、決して、女子躰制の天賦、及び、自然を離るべからず。且つ、生物は、なべて、生を樂むものなれど、わきて萬物の靈長たる人類は、誰か疾病を恐れ、天壽を全うするを願はざらん。若し、生涯强壯ならざらんか。春秋のながめもなどか心の憂を解かん。況んや、日時の勤勞に堪へずして、遂に、人生を苦界と觀するに至らん。なほ人の、この世に生るゝは、偶然にあらず。故に女子は、その天職を果すに足る躰力を養ふ義務あり。要するに、女子の躰育は、女子の天賦自然を顧み、體質と幸福の關係を知り、及び、女子本來の義務、如何を極め、以て、その目的を、定むべし。然るに、これを覺らざるにや、往々人爲に由り、人の體制を作らんと、自個の妄想を以て、姿勢の標準とするものあるは、採るに足らざるなり。はる子の君の（天然の形體をして、益發達せしむると、且つ、其の美を失はざるが如く保全するにあり。云々）は可といふべし。

女子體育の法方は、千種萬別あるべし。決して、一遊戯、一運動のみを以て、盡きぬと、な

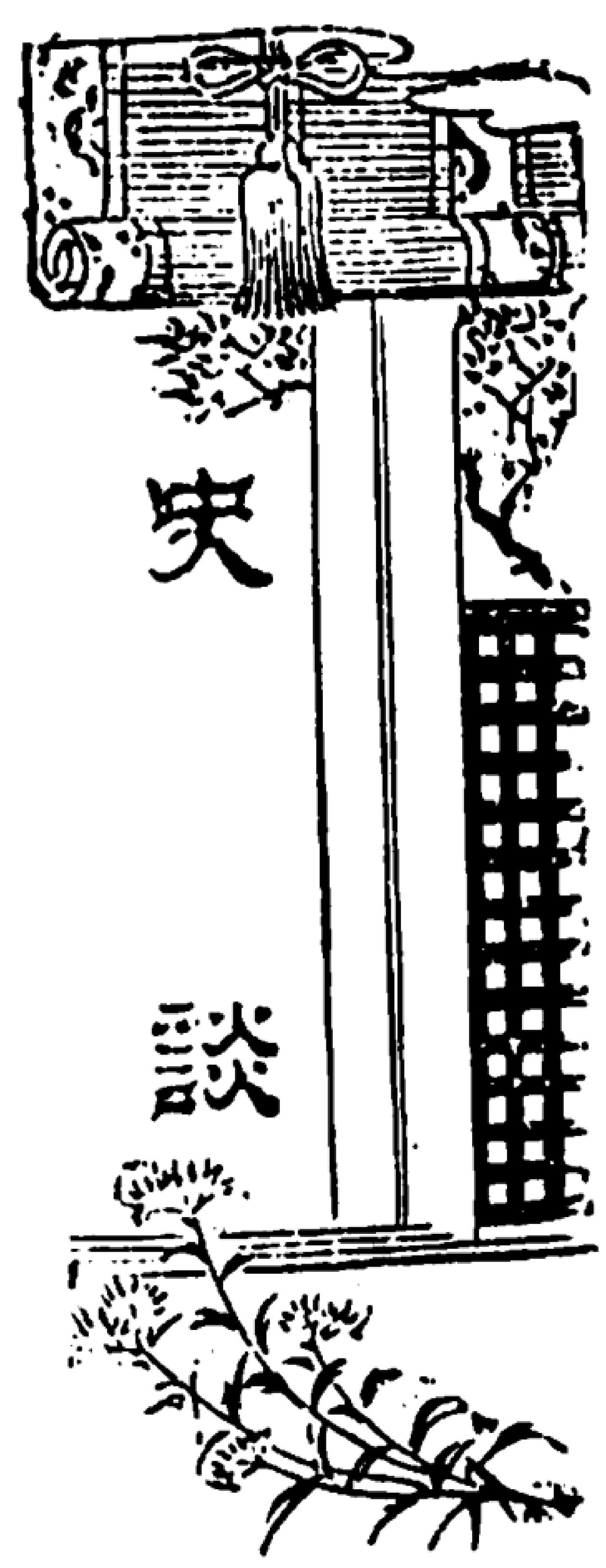
思ひそ。今、その主なるものを擧ぐれど、人體の構造につきては、消化運動、呼吸、神經、及び、脈管等の諸系統を研究し、その健全を謀り、人體の攝生上につきては衣服、飲食、住家等の利害を研究し、更に土地氣候の關係、及び、燕居の注意等を講究せざるべからず。若し以上の事項を、平均に注意せずして、單に、その一部分のみに、重きを置かんか、反りて、身體發育の均勢を欠き、不具、あるは、疾病ともならんも知るべからず。惜かな、女子の體育につき、一を知りて、十を知らざるものは、滋養分だに食すれば、壯健の法なりと信ずるめり。されども滋養を、いかばかり、多く食せんも、これを、適當に消化するに足る運動なからんか、反りて腸胃病の基とならんのみ。さりとて、運動だにすれど、無病の道なりと信じて、一時に過度の遠足を試み、あるは、一時に、過激なる劍道に志し、腦病、若しくは、心臟病となりける例も少なからず。況して婀娜たる長袖の女子にして、突然劍道などを試むるは適當にあらざるべし。但し、武門時代などにありては、女子も長刀術を學びけり。されど、柔道などを練るものは、多くはなかりけん。おのれは、德川時代の末葉に生れけれど、幼時、長刀術を學びしも、柔術などは學ばざりけり。

元來、武術は、壯觀ありて、男子は、須く試むべきものなれども、唯一の兵術として、今

日には適せざるべし。そは、短兵、相接し、白刃、相迫る時代に發達せし結果ならん。わきて、今日、女子の、武術を學ぶものは、勿論、兵法として學ぶにあらざるべし。唯、體育の方便とするものならん。果して然らば、劍術、及び、柔道は、特別の體質ある女子には知らざれども、一般の女子には、激烈に失するのみならず、姿勢を乱すものといふべし。獨り、長刀術は、かかる弊害なからんかし。

女子、個人の體育は、生理、衛生學の知識を假り、各家庭に於て實行するを可とする外ぞなき。されど、學校の如き、團體に於て、體育を施すは、第一體育上適當なる習慣を作るべし。すなはち、女子は、長座の惡習を改め、柳腰を願ふ愚念を去り、胸を縮め、體を屈する姿勢を正す等の、傍ら生理攝生の智識を與へ、自から、その身を反省せしむるにあり。第二適當なる遊戯術を案出し、亦、女子の自然に相應する體操法を採用し、以て、體育の目的を助くべし。決して、所謂武術のみを以て、體育の道となすべからず。

我が國の婦女子につきて見るに、體育は德育よりも、智識よりも、大に遲れけり。それは世評百出を恐れて、以て、體育に注意せざるに至りしならん。されど天眞爛熳たる動作こそ、誠の優美なれど、女子の自然に適當なることを標準となして、體育を加ふべし。



野田とせ女

鹽井ふく子

花ぞめの人の心と云ひけん世の中に、ふきすさぶ風にも、嵐にもくだけず。うつろはず。歳々年々、赤き心を、いよ〳〵深めたるとせ女の如き、實に、世にありがたき女子とや云はまし。とせ女は、岐阜縣美濃の國羽栗郡、北宿村、野田善左衛門の二女にて、その家、元來貧しかりしかば、安政二年、十二歳なる時、はやく、たらちねが膝下をはなれて、愛知縣、尾張の國、中島郡、奥町なる渡邊庄三郎に雇はれ、その長男、正雄の傅婢となりたり。人となり、貞實にて、主人に事へて、誠に忠直、幼兒をいたはる事、實にあつかりしが、安政五年、主母とよ、病にかゝり、正雄、及び、次男正右衛門を殘して、もろくも、桐の一葉と散りゆきぬ。あはれ、此の時、正雄年わづかに五歳、弟正右衛門、歳はじめて二歳、東西を分かぬ幼子を、二もとまで、殘しおきて、あかず消えゆくは、そばの心の中や如何なりけん。とせ女が悲しみは、また云はんかたなし。やうやう二歳の幼兒、正右衛門は、早くも母のそへ乳を失ひ、晝夜泣き悲しむを、とせ女は、之を負ひ、之を抱き、乳を他人に請ひ、すり粉してすはせ、すかしなだむるさま、慈母も及ばぬばかりなり。而して、とせ女、折りしもやう〳〵十五歳なり。見るもの之を感賞せざるはなかりきとぞ。やう〳〵、正右衛門も乳を乞はずなり、手足ものぶるよと思ふほどに、文久三年、主人庄三郎、亦も、病にかゝり、春のあはゆきなし消え行きぬ。不幸に、不幸を重ぬる中にもなほ、相當の資産わるを幸とし、後妻、とき、祖母等と共にもとの家業なる藍玉を製造して、貧しからず、世を送りけるに、

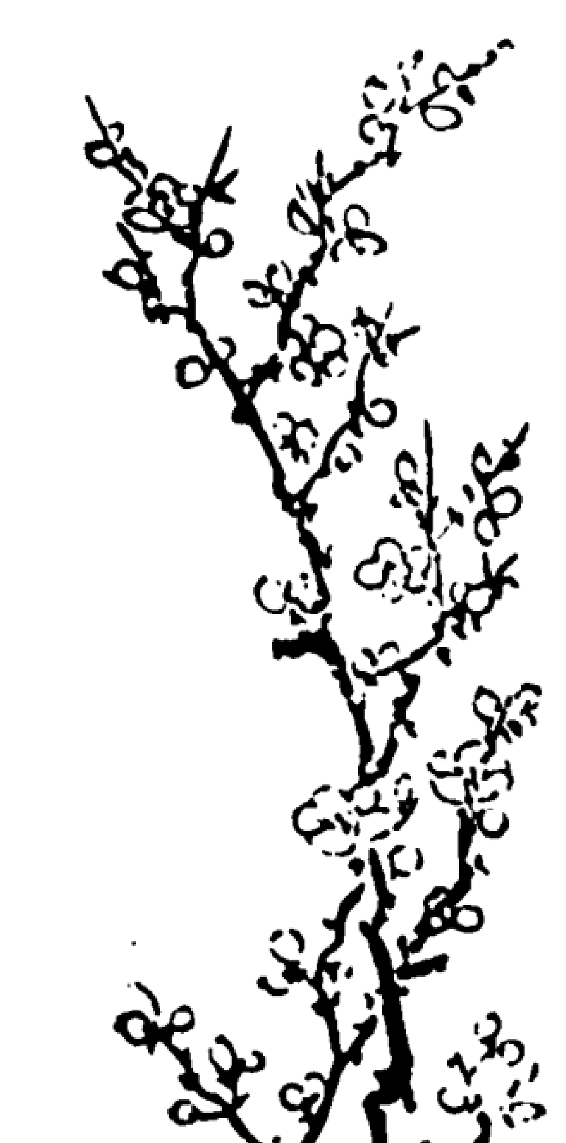
繼婦、ときは、不貞にも、夫みまかりて、たくつきも乾かぬ程に、はやくも操の色をかへて、分家の兄輪三郎と云ふものとかたらひ、私生の女兒をさへ設け、之がため家政紊亂し、且、藍藥買ひ入れはもとより、藍玉賣捌等皆、その密夫のつかさどる所となり、精算もせざれど、收支償はず、損害甚だしきより、遂に、業を廢し、僅に、幼きもの丶成長をまつほどに、慶應三年、とき女、亦、病にかゝりてみまかりぬ。流石、淫婦なれど、主婦なるもの丶、世にかくれては、又、一入の、みだれ、かるかやのおもひ亂れとくべくも見えぬを、輪三郎等來りて、とにかくに、財産を管理せんとせしかど、とせ女、かねてより、輪三郎の行爲、よく知る所なれば、かゝるものを後見となすは、虎を飼ふに等しく、やがては、主家をも食まんやはと、敏とくも、さとりたれば、他の親族等に忠告して、程よく口述を以て、一日逡りに、その干渉を避くること數年、遂に正雄の年、やゝ長じたるを以て、斷然、之を謝絕し、正雄をして、家をつがしめぬ。時しも、主家、しばしばの不幸、殊に、後妻の不身持より財を費したる、甚だ少からず。家も、やう／＼傾きかけしを、とせ女、時に齡、やう／＼二十歲、あはれ、野末の草花も、紅緑を粧ふ頃なれど、とせ女は、偏に主家の安全を思ふのみにてあだし心はなく、荊釵、錢あるも、美をもとめず、自ら鋤犂をとりて、耕地に肥料を施し、或は、荷車を引きて、物品を運搬し、みどりの髮は、日にやけて赤くなり、皮膚は、さながら、土にそまりてくろまるも惜しまず、朝には、他の雇人に先ちて、田に下り、夕べには、人におくれて事をとり、薪をくだき、食を調へ、幼兒を養ふ等、百方に心をくだきぬれど、如何せん、主、なほいとけなくして、家政、また、ふるはず、日に困難に赴きぬるに、とせ女、大に思ひ、如何にもして、之を挽回せんものと、晝夜、心をくだき、思ひけらく、耕耘は、男子のとるべき業なり。織りつむぎこそ、女子のとるべき業なれ。今、婦女の身にて、財

産を増加せんには、織物等に如かずとて、乃、主人の親戚なる、島津彦八といふもの、織物業を營み居れど、之に從事して、結城織物の製造方を傳習し、僅に、金十四圓餘を資本として、織屋を開き、勉强を第一とし、朝は、鷄鳴に先だちて、まづ、機殿に座し、草も木もねむる夜半、ひとり、機織虫の泣く音ときそひ、寢食、寒暑もうち忘れて、織りくらし、織りあかし。且織り方に、縞柄に意匠を凝らし、心骨をくだきしかど、はじめは、些々たる製造なりしも、年々歳々増加し、さては、また染方をも改良したれど、正縞と稱して、大に需用者の喝采を得、販路大に、擴張して、やうやく、傾かんとせし、家政をもひきかへし、はては、主人をして一萬余圓の資産家となし、居家、及び、倉庫をも、新に築かしむるに至れり。

さて、とせ女、己は元より、貧家に生れ、養ひの道さへなく、幼きより、人に事へし程の者なれど、教育の何たるを知るによしなき身をもて、おのづからに學問の必要を知り、正雄、正右衛門の二兒は、云ふまでもなく、私生の女兒をも、みな學に就かしめ、善をすゝめ、惡を諫むるなど、偏に、忠誠をつくしければ、三兒、みな、成長するまゝに、學を好み、あしき行ひをつゆ習はず、正雄の如きは、遂に、村中の教育家となるに至れるを、さりては、中々に、家政のためあしかるべしとて、とせ女また諫めて、家業を精勵せしめしかど、正雄も六尺の孤より、とせ女が、いつくしみの手一つにかゝり、その忠誠なるを深く感じければ、家政は、擧げて、之に委ね、毫も顧慮ずして、外をつとめて、いよ／＼盛大ならんとするを、天、又、みたしめず、明治廿年、あはれにも正雄、病にかゝりて冥土の人となりたり。

とせ女が悲しみは例ふるにものなく、八千八聲血を吐きて、やがては、之も、冥土のともとも見ゆべかりしを、なほ、正右衛門の殘れるに、僅に、心をなぐさめられ、その家を相續なせし後も、兄、正雄に事ふる如

く、忠誠忘らざりき。實に正右衛門は、そへ乳こそはせざれ、全く、とせ女が手、一つに養はれ、今日まてながらへしものとて、とせ女を見る事慈母の如く、願ば、誠の母として養育の恩に報ひんものとて、公にさへ願ひ出しかど、法規のゆるさゞる所とて、やむを得ず、そのまゝに過したれど、心は、なほ、生の母を見る如くするを、とせ女は、中々に主従の禮を失はず。たゞ敬し、たゞ愼みて、之に事へ、主家の財產、さばかり增加せしかば、村民等、とせを呼びて福虫と稱するばかりなりしかど、とせ女は、つゆ、己が功とせず。殘佛事、又は、他へ行くにわたり、遣錢を受くるも、殘餘あれど、必、之を還し、盤中、かつて、一厘の私錢なく、一意に主家を起す事を、熱心盡力すること四十餘年、唯一日の如く、主家、しきりに、不幸に遭遇し、しばしば傾かんとするを、一身に支持して、遂に、家屋を新築し、巨有の財產を得せしめたる、實に、たぐひ、まれなる忠婢と云ふべし。されど、近隣は云ふまでもなく、村中、みな、之を、福虫と賞してやまず。事、縣廳に聞えて、知事より、金圓を賜はり、大に、之を賞譽せられけるが、後、又、公に達し、遂に、褒章を賜はりて、其が善行を表彰せらるゝに至れり。あはれ、ふきすさぶ風は、ますます、ちり立てゝ、いよいよ、すまぬ世の中に、ひとり、赤き心を以て、一意に、主につくし、その身は、一生、人の婢となりて終れる世の人は、馬鹿正直と笑はんやも知らねど、かゝるもの、又、姑に孝ならんと思ふにも、世にとるべきは、忠實の婦人にこそ。





家政

茶の湯

茶禮初學（前承）

孤峰庵祿仙齊不羨

關葦雄

以下、渾て、正午の秩序に差違なければ省略すべし。啻、夜會の事故、淡薄に務むべし。餘り深更にならざる樣、注意すべし。夜間は手燭の扱を要すべし。點茶の時、及、道具拜見の時、御手燭も借用したしと言述ぶべし。此の手燭は、道具返却の時、同時に、添て返すべし。併、夜話は、濃茶濟たらむ、亭主の勞を謝し、箱書付の拜見を望むことも、夜更たらんには、略してよし。婦人の、餘り深更に歸途抔は、感心せざるもの也。匆々に歸るべし。本夜は、種々御心配の夜會御茶戴き有難存舛。御箱書付類も拜見願度候得共、自然夜も更可申に付、他日に讓り御暇仕舛。御跡仕舞も、嘸々抔と云て別るべし。亭主は、庭口、或は、玄關迄送り出づべし。此時、庭內、雪洞を可レ用。別袖の時、御途上を御大事に抔言ひ述べし。客は御主婦樣には、定て御勞に可レ有と挨拶すべし。底で、客歸りたらば、四五分間過て、跡を片付べし。夜間の事故、特更に、火鎭の事を、念頭に掛くべし。

但、跡片付も夜間の事故、緊要の器品斗、殘餘は翌朝に至り、日光を得て、靜に跡の仕舞をなすべし。

一飯後の茶の湯の事（また菓子の茶の湯とも云ふ）

不羨曰、飯後の茶の湯は、正午の茶に變る事なし。

懐石の料理なき而已なり。初座に吸物、酒、肴(但八寸)菓子、又は酒肴、菓子斗の事も有。右三通、初炭の仕様、其外、午時の茶に變る事なし。押及ぼして知べきなり。

但、飯後の茶の性質を分拆する時は、正午に比較すれども、數等、輕く淡泊なるもの也。時間は、食半後と云なれども午後二時也。去故に、客も、さらさらとして、餘り重々敷すべからず。酒肴斗出すも一品丈は、心頭を用ゐる客の請方、宜敷、多少の感動あるものを見立考ふべし。吸物も、正午の時の如く、一口ものにしては如何に哉、微少、椀盛に近く仕立べし。一獻呑めると言物にすべし。是、口傳の問題也。此の茶の湯に限り、菓子は、最注意して大振りに製造して進むべし。

又云、道具類も、此會は寂寞たるか取合よしと會得すべし。

一不時の茶の湯は、右の法を以て、其の時々の作略有べし。料理は、不ニ取敢、何にてもざつとしたるが善なり。事足ぬが風雅なるべし。

不美曰、此の茶の湯は、名義の如く不時、臨時に、數奇者の方へ、茶の湯を申籠むべし。今日は、洵に、乍ニ突然、不時に正午、或は、飯後、御茶申入度御承諾に預り度と照會すべし。亭主、婦人の方にては能社、不時之茶御申籠、誠に不行屆なれども、幸在宿に付、正午不時の御茶可ニ差上と廻答すべし。次に、客方は、諾を得たれども迚直に、押掛徃候ては、亭主方の都合もあるべけれども、其の場合次第近傍某誰の方にて待合可ㇾ申抔申遣すべし。左なければ、亭主方、手廣の住居ならども、別間に通して、煙草盆抔出して、準備竣功の報をなすべし。

(未完)

結物百種

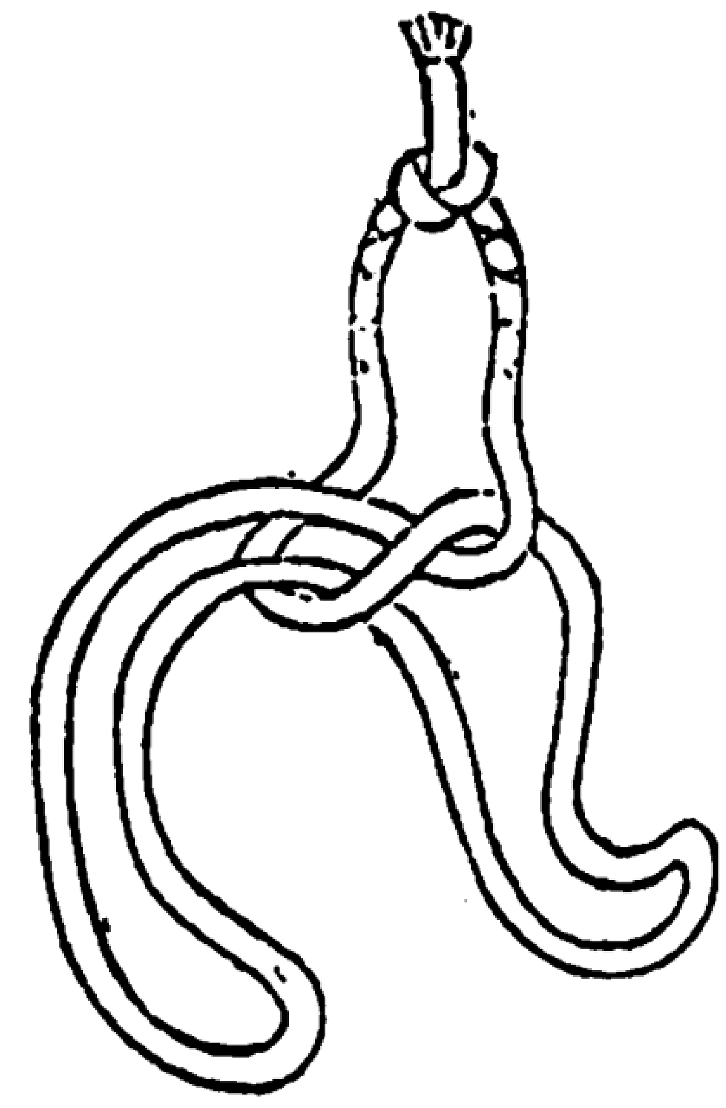
百草庵一無

袋の長緒結

(何結にするも如此下緒をして置き後ちつくるなり)

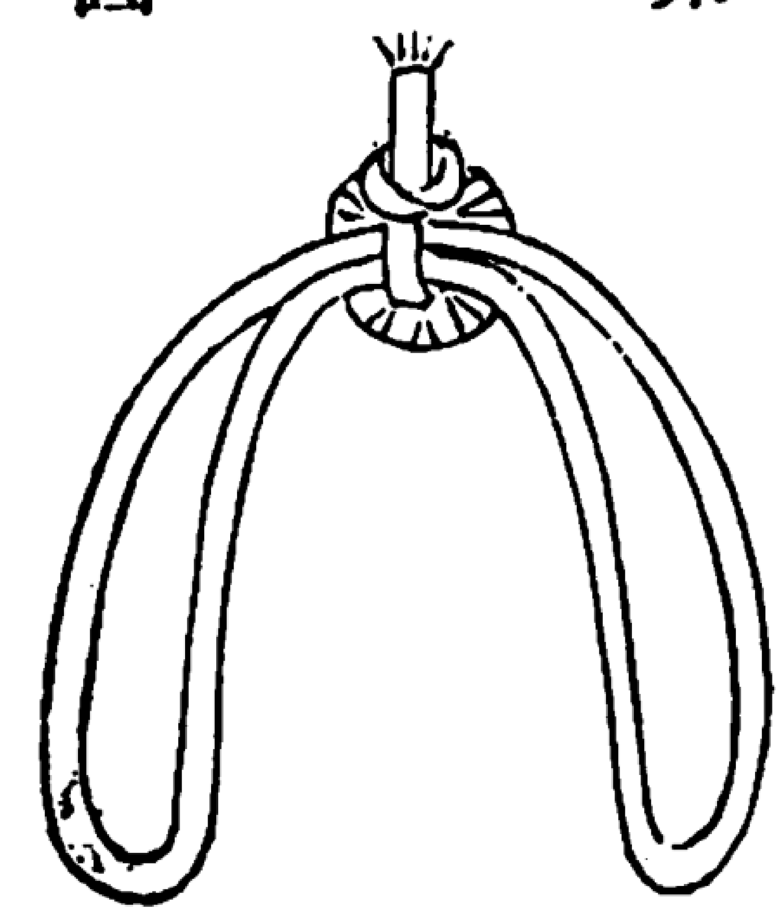
(甲)

第一圖



(乙)

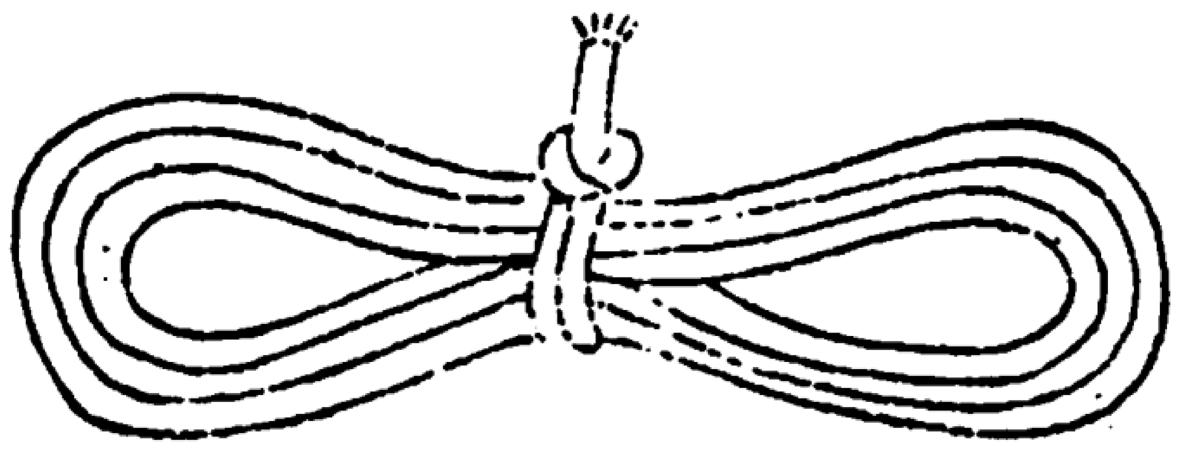
第一圖



常の長緒むすび

(前の如く下結し兩わなにむすべて一方のわな三ツづゝになるなり)

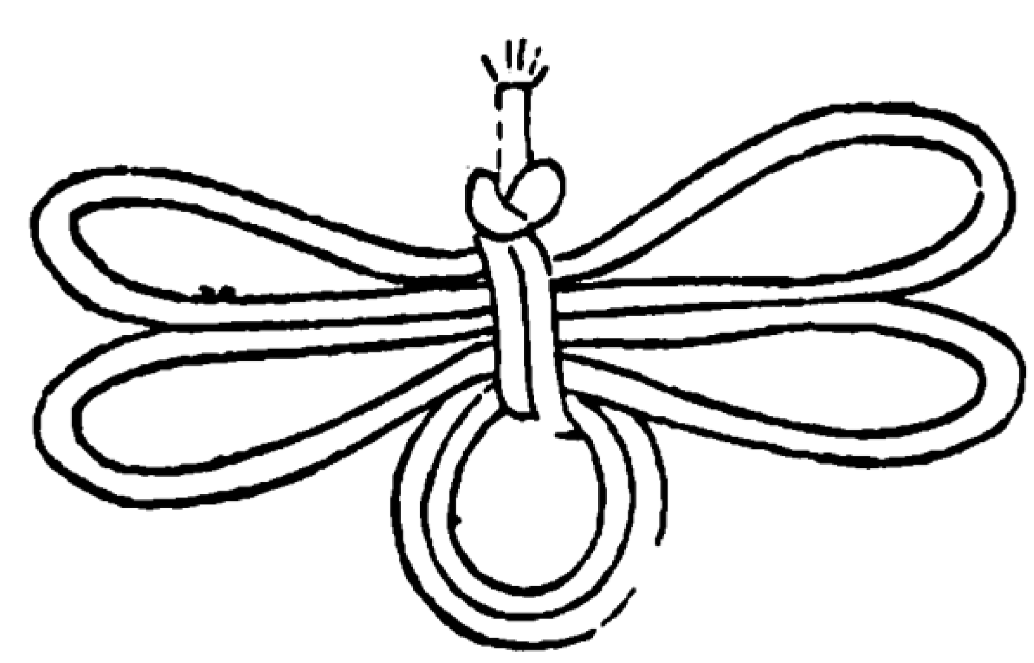
第二圖



とんぼう結

(下緒結樣前に同じ)

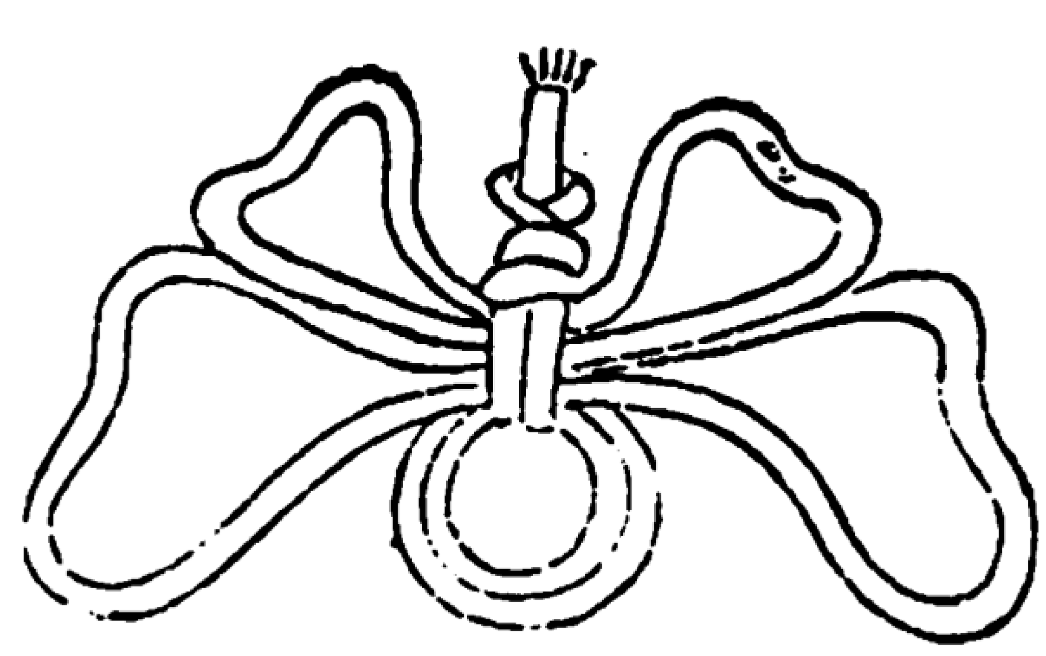
第三圖



蝶結

(下緒は前に同じ)

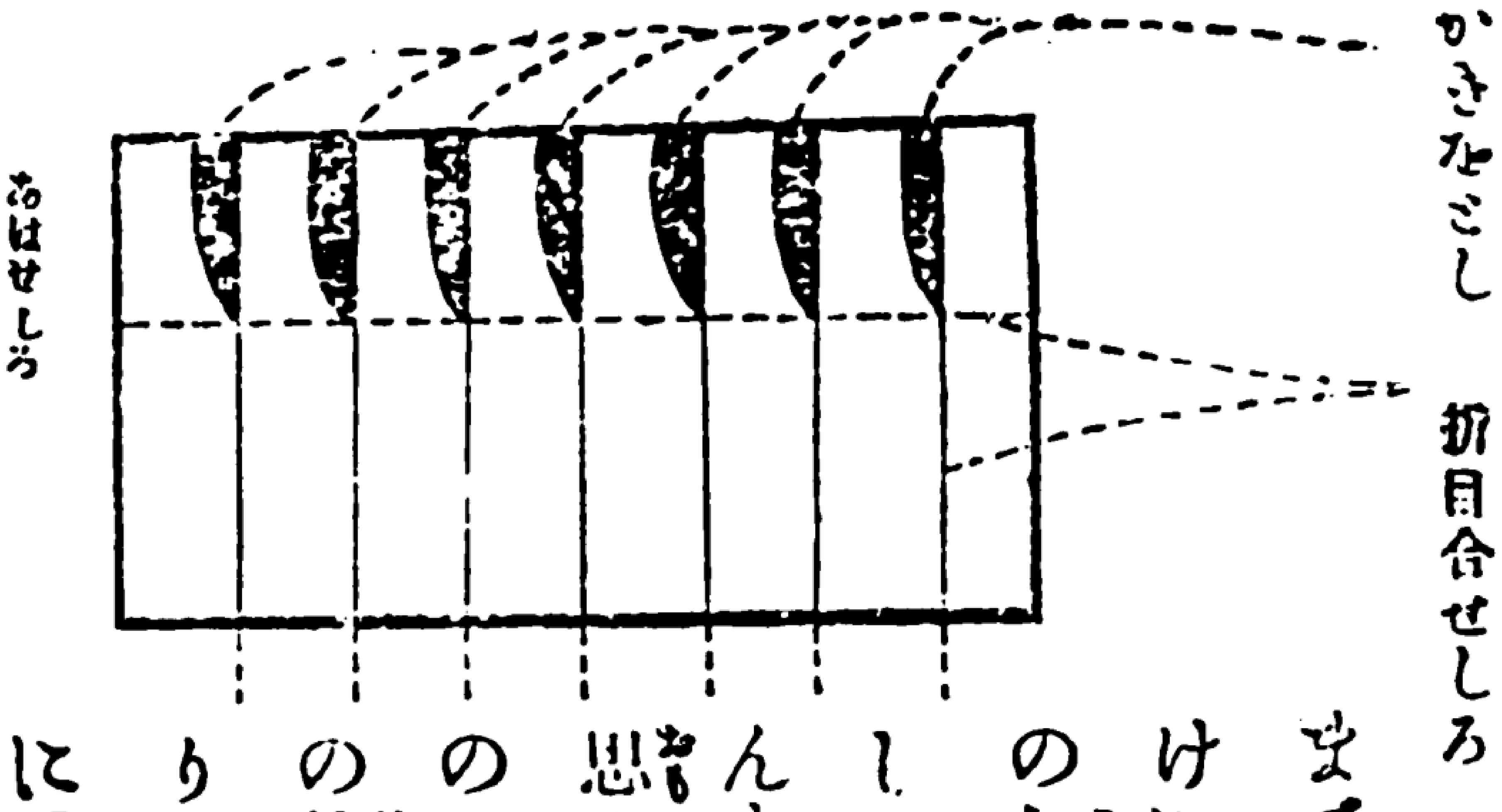
第四圖



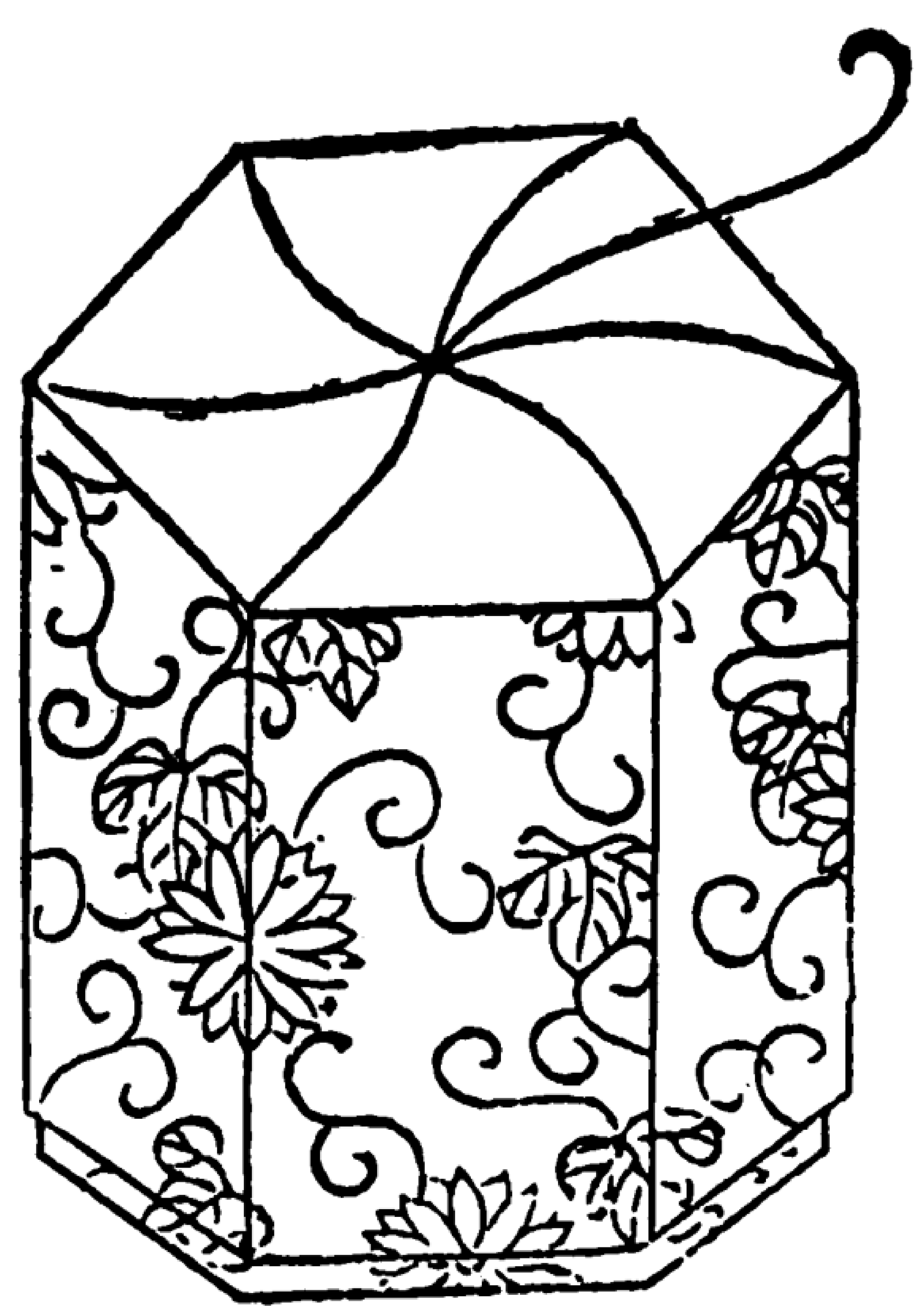
たちぬひ

西山たい子

（百十三）緒箱



まづ、厚紙を、圖の如くになりつけにて、裏より條をつけ、上を圖の如くかきおとし、そのかきおとしたる所に、ちりめんにても、どんすにても、唐ちりめんにても、思ふまゝの切を、六片とも、各々、のりにてはりつけ、千代紙を、その箱のまはりに、表より裏まではりつけ、合せしろとしるしある所に、のりをつけ、輪になして、上の切をはりたる所を  の如く、花形にくみ合すべし。また、その切をはりつくる時、錦、少しむかりを入るゝもよし。その切れをはりたる方を蓋になし、身の方はふたより、一片毎に五厘むかりづゝ、小形に形をつけ、同じ形に折り目をつけ、千代紙にて、底もまはりもはりつけ、同じ形に折り疊み、緒を入れ、花形にたゝみし眞中より、緒の端緒を出しおくべし。

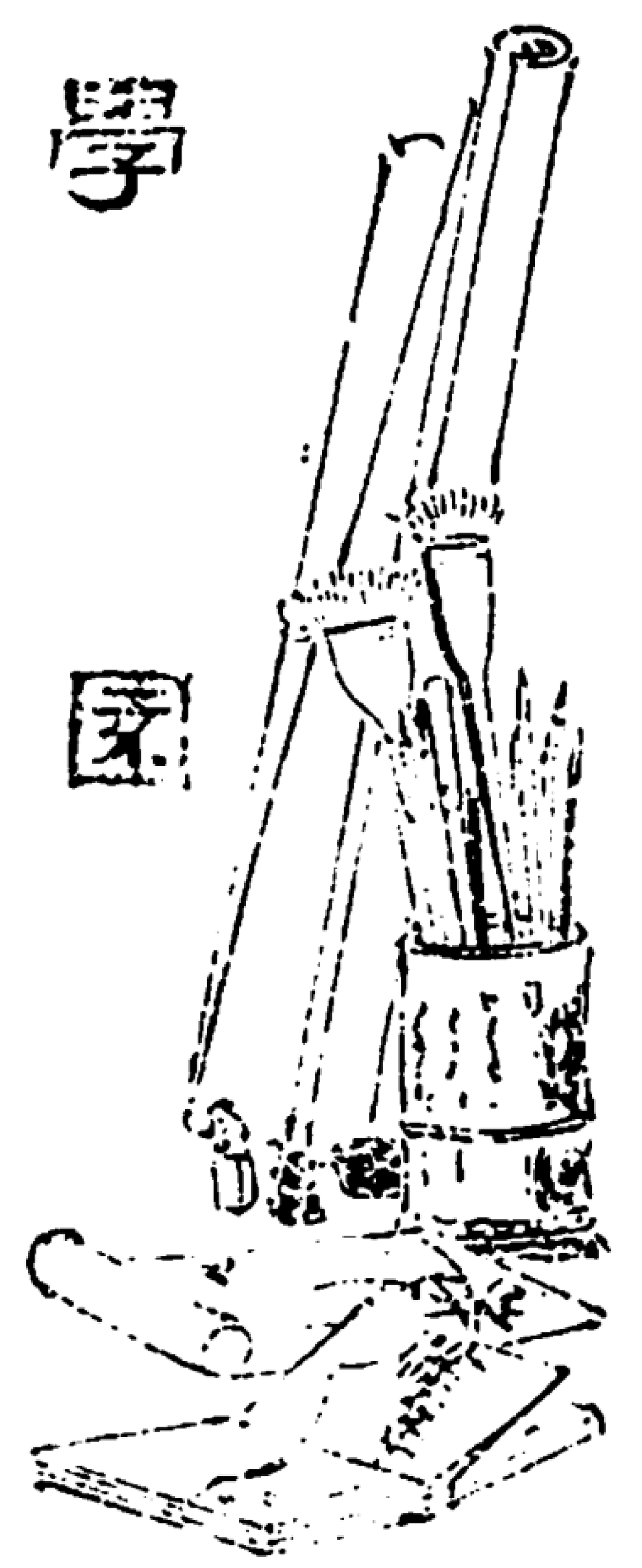


緒箱完圖

背負守

背負守は、よく老母などの、守を入れて、帶の下に負ふもの故に、此の名あり。まづ、細き切れのはしを、三角に疊み、……の所を、まづぬひ、次に、又、

また上圖の如く折りて、…の所をぬひ、次第次第に廻し折りにして、ぬひまはし、はしに至らば、糸をとめて、引きかふべし。そのはしを裏の方に、ふせてぬふべし。



學園

漢文學講義（十八）

大林弘一郎

石川凹

十五、富士山

凹、初の名は重之、字は子牧、小字を嘉右衛門といへり。丈山、六々山人、四明山人、凹凸窠、大拙、爲鱗、山木、山村、藪里、東溪、三足などは、皆、その號なり。三河の人なり。寛文十二年、九十歳にて歿しぬ。丈山は、もと武人なれども、後に文學に志し、最詩才ありて、一時に名あり。その遺稿を、覆醤全集といふ。二十四卷ありて、詩文を集録せり。

この外、著書も、六七部ありて、世に行はれたり。今、こゝに揭げんとする詩は、最、世によく知られたるものなり。されど、徳川氏初世の頃は、我が國の文學、未、其の盛大の運に向はず、足利以來、僧徒の手にありし文學の、僅に、一變したるまでなり。故に、藤原惺窩、林羅山など、當時、大家の出づるあるも、その詩文は、後世の名家の如く巧妙なるを得ず。また、文辭に心を用ゐるの志もうすきなり。丈山は惺窩に學びて、勤苦したれども、詩の風は、尙、高尙なりとはいひ難しといふ評もあり。これ、第一その時世の然らしめし所なり。那波師曾の學問源流といへる書にも、「惺窩の詩文は、和氣和習を免れず。其の比、詩に名高

き人は石川丈山、其の詩を好み、詩を學ぶ、信に苦み勤めたり。亦、時運に由るにや、格高からず。句融ならず。云々、丈山此の如くなるにて、其の頃の詩の風も、亦、推して知るべし。」といひて、その時代を評したり。それより「二三百年の間に、非常の變化と進歩とをなして、今日の時代に至りしは、如何にも、驚くべきことならずや。

仙客來遊雲外巓。

詩には、古詩も、律詩も排律も絶句もあり。また、五言と七言との區別もあり。この詩は、即、七言の絶句なり。絶句とは、律詩の半分の如きものにて、四句を以て、一首をなすなり。この四句の順序を、起承轉結ともいふ。又起承轉合ともいふ。第一は、起句なり。第二は承句なり。第三は轉句なり。第四は、結句なり。この四の順序よく調ひて、詩始て成るなり。こゝに掲げたるは、即起句にて、初なり。古よりこの山は、仙人の來り遊ぶ所なりなどいひ傳へ來れる故に、かく、仙人の遊ぶなる雲の外にそびえたる峯といひ起したるなり。

神龍栖老洞中淵。

この句は、承句なり。先の句をうけて、詞をなすなり。また、この句の如く先の句と句調の同じきやうに、詞を對するを對句といふ。而して、この對句には、前の兩句のみ對にするを前對後散といひ、後の兩句のみを對するを後對前散といひ。四句を前後に分ち、兩者ともに對にするを前對後對といふなり。この詩は、前對後散なり。
この第二の句は、先の詞と、調を同じくして、神龍を先の仙客に對し、栖老を來遊に對し、洞中を雲外に對したるなり。而して、述ぶる所の事は、別の事にして、また、古より、神龍ありて、山上の洞屈の淵に住み年久しくして老せりといへりとうけたるなり。古は、山上の穴に、神池ありといひ傳へたれば、之をいへるなるべし。

雲ハ如ニ紈素ノ煙ハ如レ柄ノ。

この句は轉句なり。轉句は、起句、承句の意を一轉して、更に、又、詞を排へ意を述べて、結句に連屬せしむるものなり。この詩は、則、前の二句にて、神山の靈妙なる所以をいひあらはし、更に、轉句にいたりて、實景をのべたり。

雪は紈素の如くとは、峯の白雪は、恰、白地の絹の如くといふなり。煙は柄の如しとは上に立ちのぼる烟は柄の如しといふなり。富士を扇と見立てん爲にあやなしたる語ゆゑ、雪をば、扇に張りたる白絹と見做し、烟を柄と見なしたるなり。

白扇倒ニ懸ル東海ノ天ニ。

この句は結句なり。則、上の三句を總べて結べる句なり。然れど、轉句の意をうけて、關係、最重し。轉句に於いて、この山の白扇に似たる實景をのべ置きて、この句に於いて、全く喩を取りて、白扇の倒に懸りて東海の天にあるが如くなりと決定したるなり。

この詩に用ゐたる韻は、一先の韻なり。一先は、下平の第一なり。平韻に、上平下平の別あり。各十五韻あり。合して、平韻は、三十韻となるなり。この事、くはしくは、つぎ〳〵に述ぶべし。

さて、この詩の全躰の意味は、この山は、まことに、靈山にて、仙人も來りて、雲外に聳ゆる峯に遊び、神龍も、山上の洞の淵に棲むといふことなるが、いかにも、さもあるべし。そは、その外形より見るも、峯の白雪は、白き絹の如く、烟の立ちのぼるは、柄の如く、恰、白扇を倒に東海の天上にかけたるが如く、景色もすがたも、まことに、美しき山にてありけり。と稱贊したるなり。

次に、この作者の傳記を掲ぐべし。

＊　＊　＊　＊　＊

十六、石川丈山　　鹽谷世弘

世弘、字は毅侯、通稱を甲藏といふ。宕陰、悔山

懐石の料理なき而已なり。初座に吸物、酒、肴(但八寸)菓子、又は酒肴、菓子斗の事も有。右三通、初炭の仕様、其外、午時の茶に變る事なし。押及ぼして知べきなり。

但、飯後の茶の性質を分拆する時は、正午に比較すれど、數等、輕く淡泊なるもの也。時間は、食半後と云なれど午後二時也。去故に、客も、さらざらとして、餘り重々敷すべからず。酒肴斗出すも一品丈は、心頭を用ゐ客の請方、宜敷、多少の感動あるものを見立考ふべし。吸物も、正午の時の如く、一口ものにしては如何に哉、微少、椀盛に近く仕立べし。一獻呑めると言物にすべし。是、口傳の問題也。此の茶の湯に限り、菓子は、最注意して大振りに製造して進むべし。又云、道具類も、此會は寂寞たるか取合よしと會得すべし。

一不時の茶の湯は、右の法を以て、其の時々の作略有べし。料理は、不二取敢、何にてもざつとしたるが善なり。事足ぬが風雅なるべし。

不美曰、此の茶の湯は、名義の如く不時、臨時に、數奇者の方へ、茶の湯を申籠むべし。今日は、洵に、乍二突然一不時に正午、或は、飯後、御茶申入度御承諾に預り度と照會すべし。亭主、婦人の方にては能社、不時之茶御申籠、誠に不行届なれども、幸在宿に付、正午不時の御茶可二差上一と𢌞答すべし。次に、客方は、諾を得たれど速直に、押掛徃候ては、亭主方の都合もあるべけれど、其の場合次第近傍某誰の方にて待合可レ申杯申遣すべし。左なければ、亭主方、手廣の住居ならば、別間に通して、煙草盆抔出して、準備竣功の報をなすべし。

(未完)

結物百種

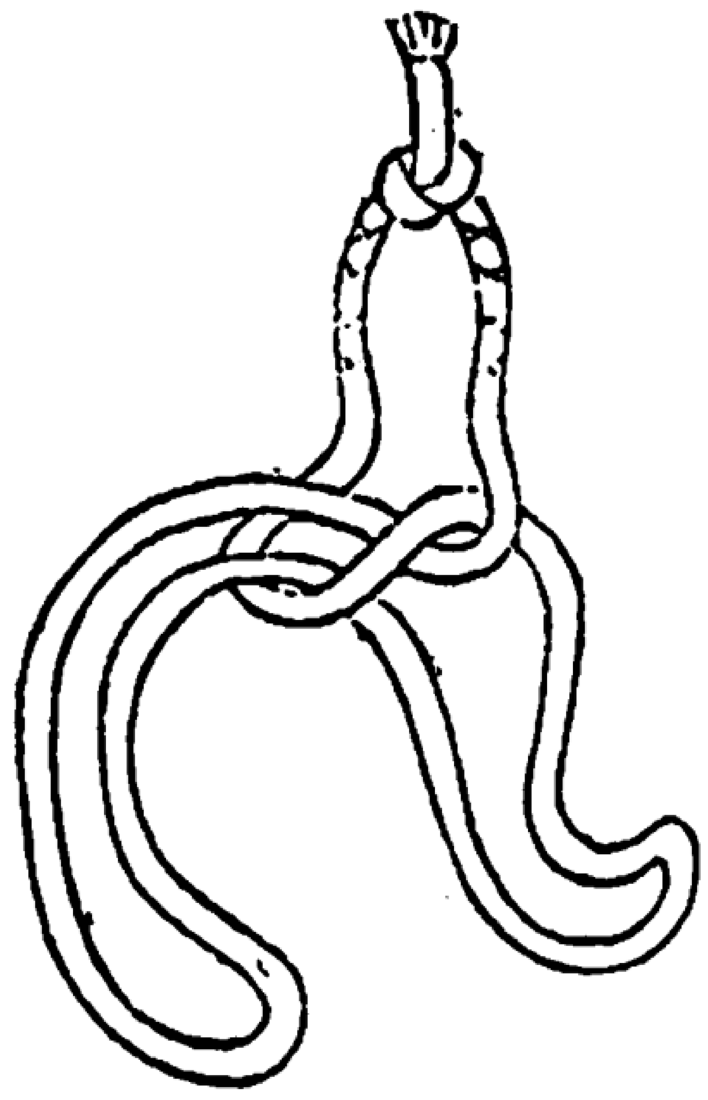
百草庵一無

袋の長緒結

（何結にするも如此下緒をして置き後ちつくるなり）

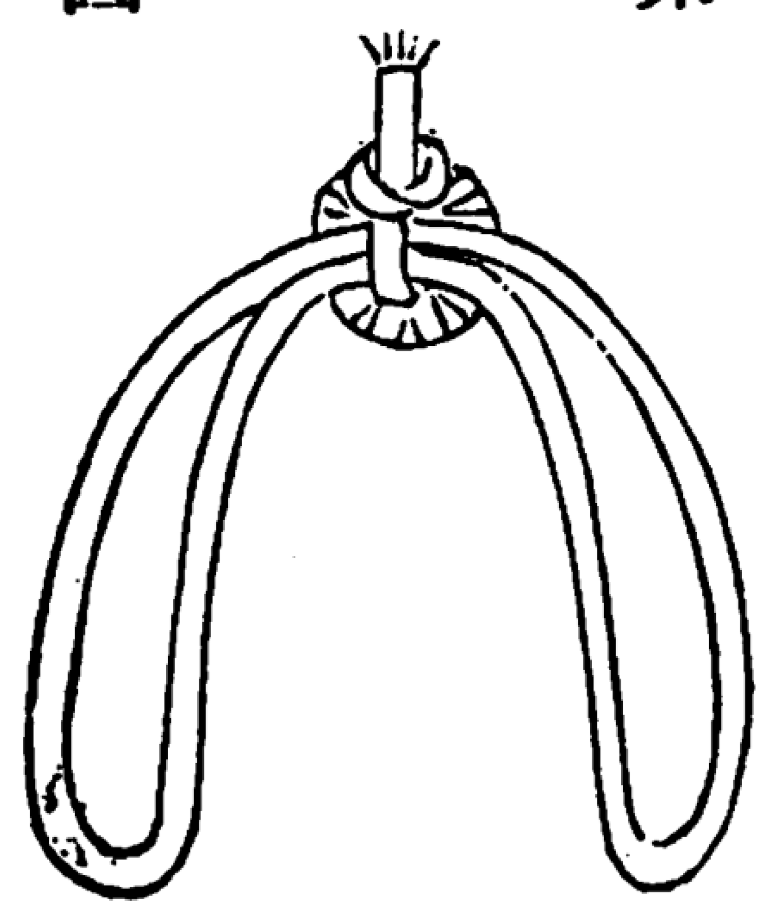
（甲）

第一圖



（乙）

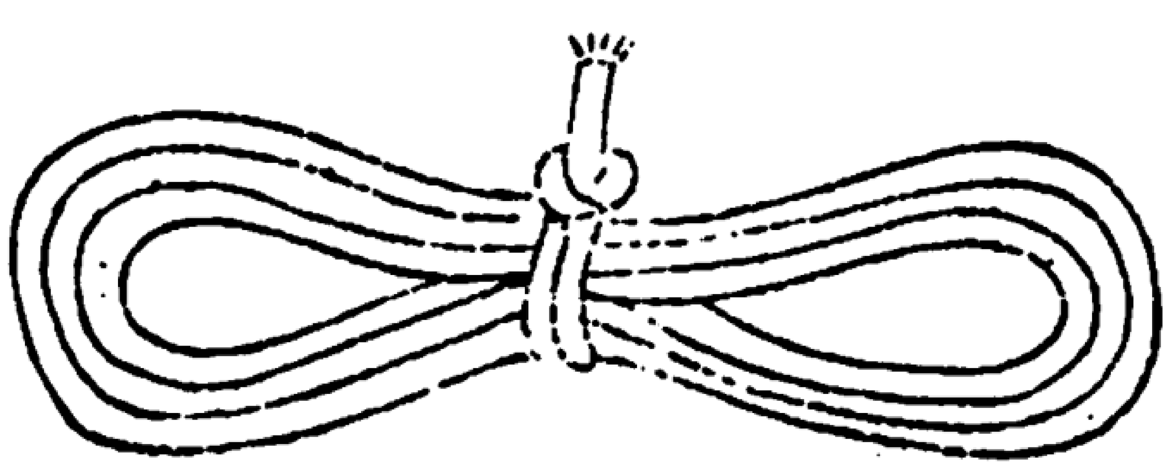
第一圖



常の長緒むすび

（前の如く下結し兩わなにむすべし一方のわな三ツづゝになるなり）

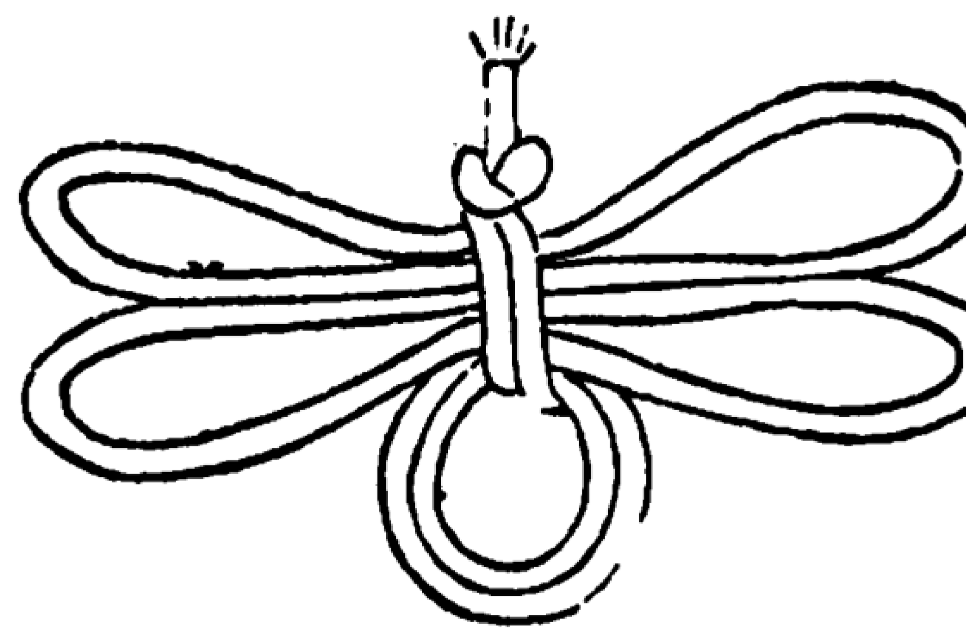
第二圖



とんぼう結

（下緒結樣前に同じ）

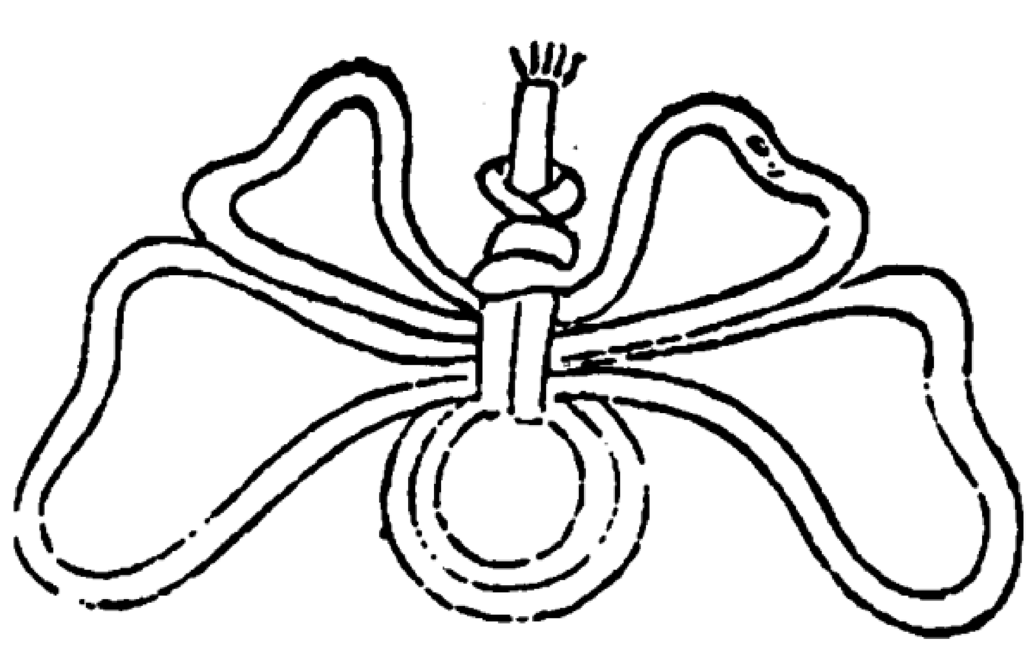
第三圖



蝶結

（下緒は前に同じ）

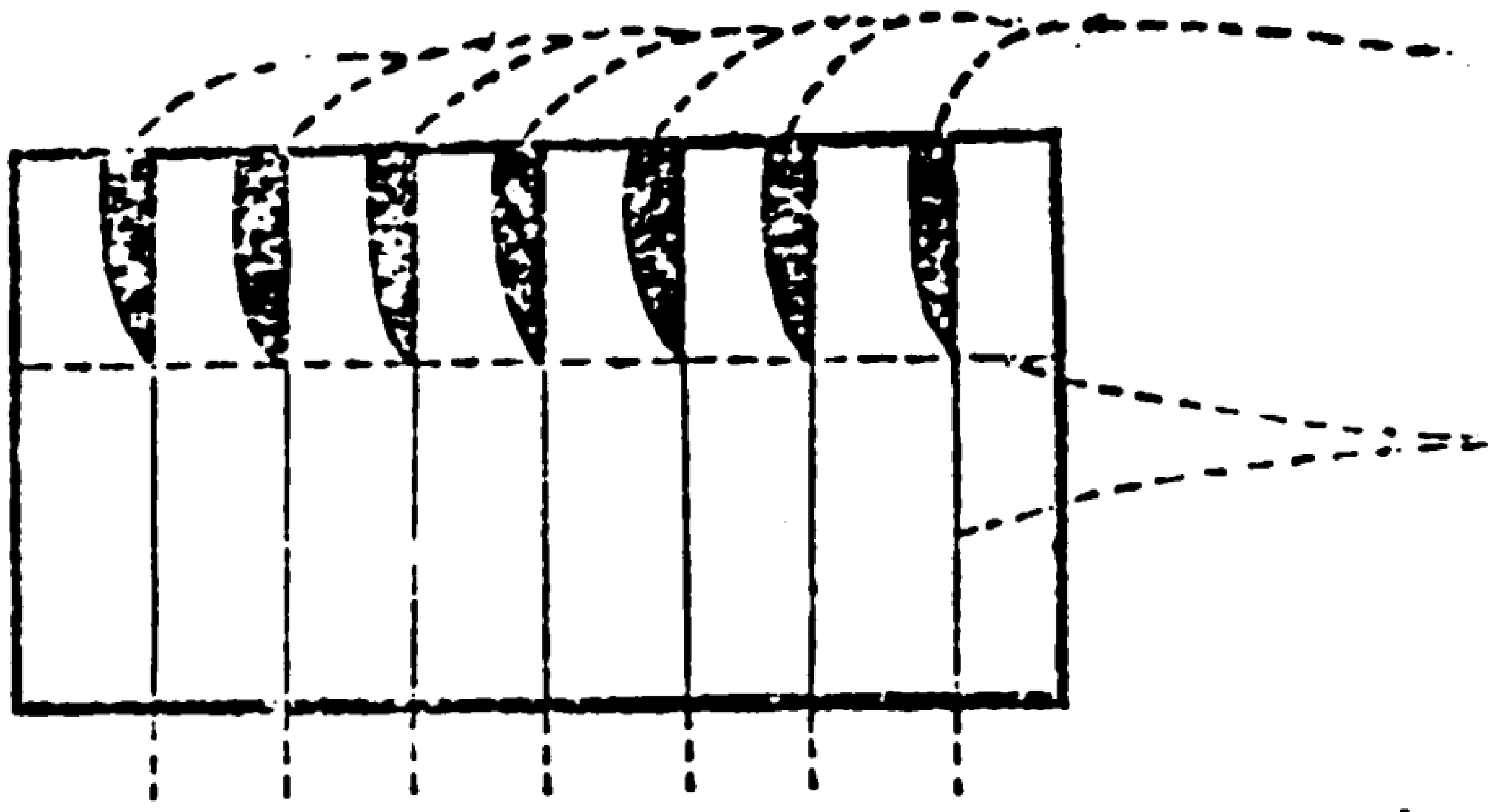
第四圖



たちぬひ

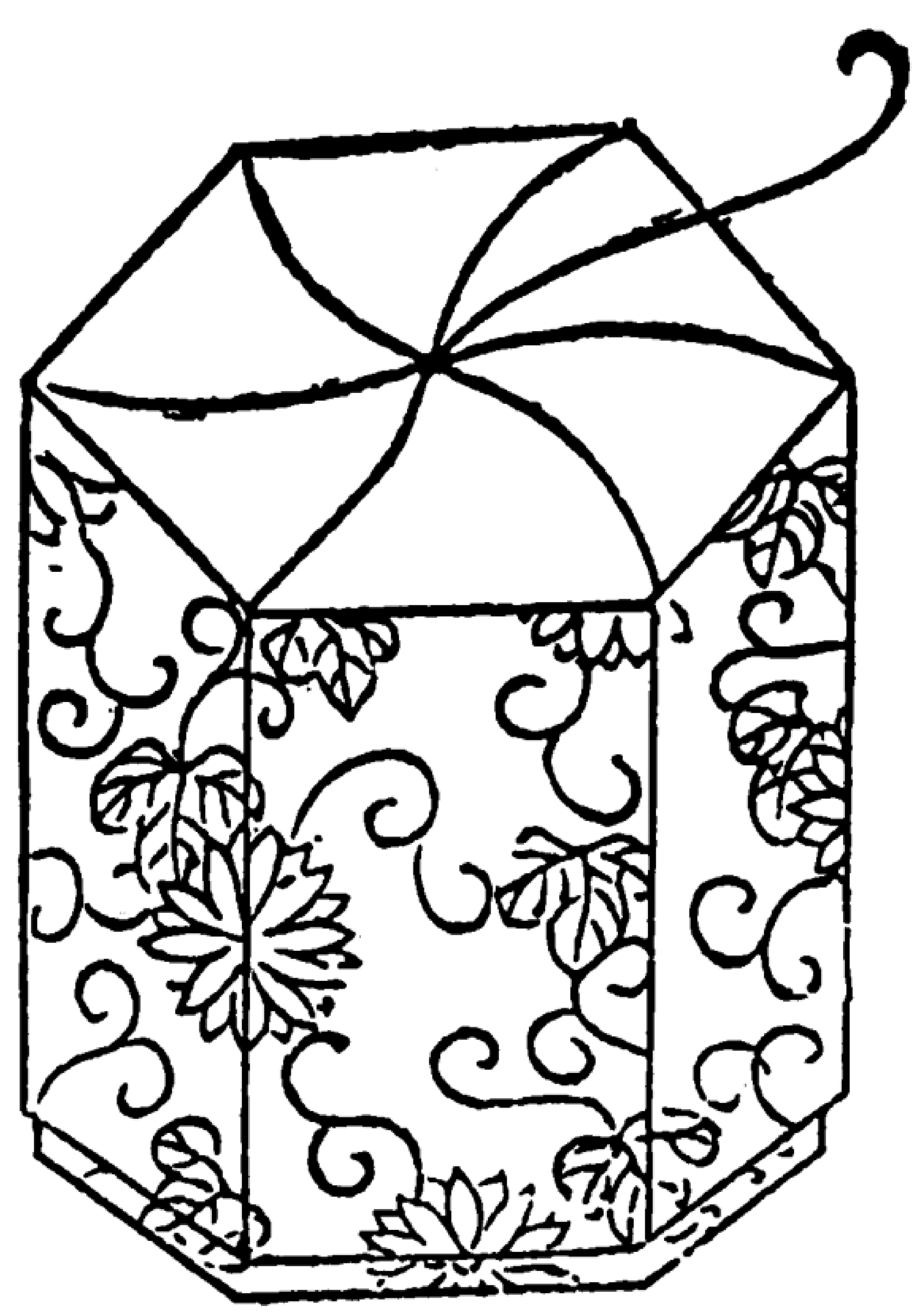
西山たい子

（百十三）緒箱



まづ、厚紙を、圖の如くになりつけにて、裏より條をつけ、上を圖の如くかきおとし、そのかきおとしたる所に、ちりめんにても、どんすにても、唐ちりめんにても、思ふまゝの切を、六片とも、各、のりにてはりつけ、千代紙を、その箱のまはりに、表より裏まではりつけ、合せしろとしるしある所に、のりをつけ、輪になして、上の切をはりたる所を  の如く、花形にくみ合すべし。また、その切をはりつくる時、錦、少しばかりを入るゝもよし。その切れをはりたる方を蓋になし、身の方はふたより、一片毎に五厘ばかりづゝ、小形に形をつけ、同じ形に折り目をつけ、千代紙にて、底もまはりもはりつけ、同じ形に折り疊み、緒を入れ、花形にたゝみし眞中より、緒の端緒を出しおくべし。

緒箱完圖

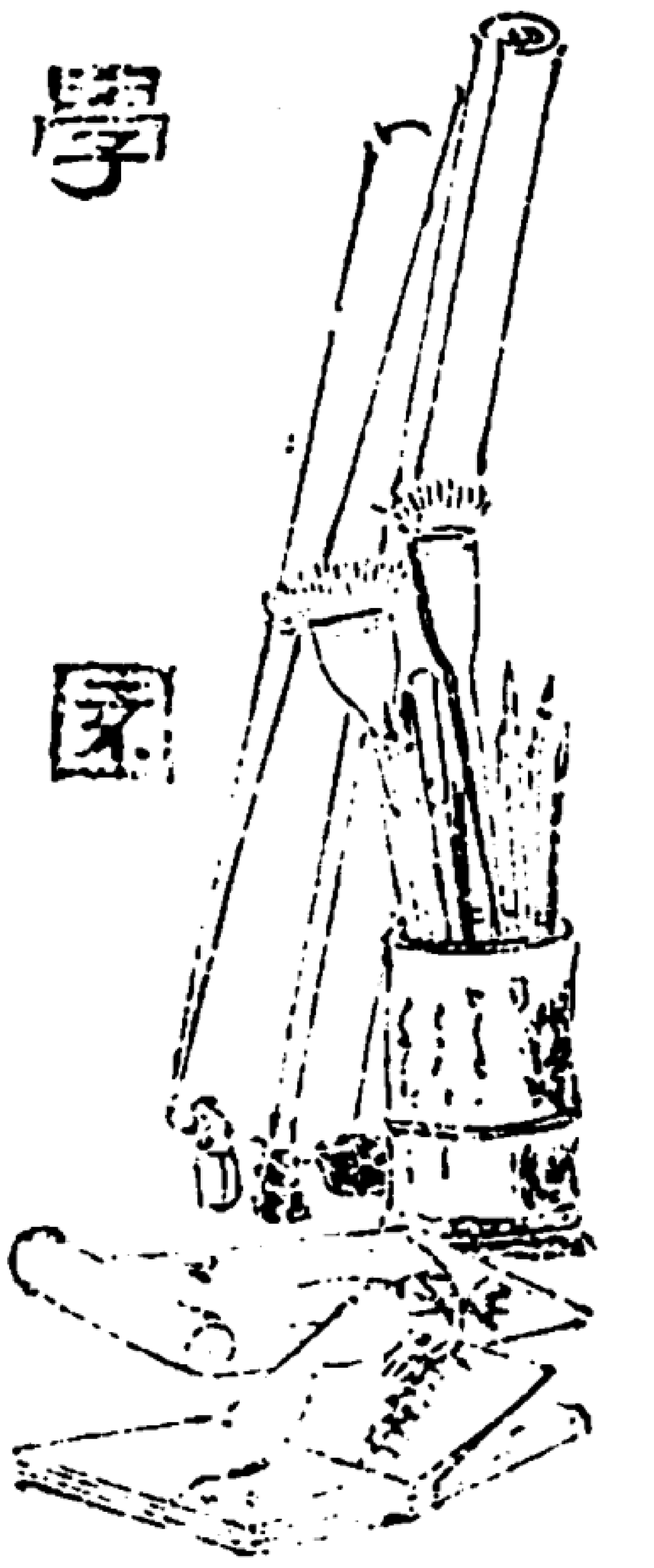


背負守

背負守は、よく老母などの、守を入れて、帶の下に負ふもの故に、此の名あり。まづ、細き切れのはしを、三角に疊み、……の所を、まづぬひ、次に、又、

また  上圖の如く折りて、…の所をぬひ、次第次第に廻し折りにして、ぬひまはし、はしに至らば、糸をとめて、引きかふべし。そのはしを裏の方に、ふせてぬふべし。

學園



漢文學講義（十八）

大林弘一郎

十五、富士山　石川凹

凹、初の名は重之、字は子牧、小字を嘉右衛門といへり。丈山、六々山人、四明山人、凹凸窠、大拙、爲鱗、山木、山材、藪里、東溪、三足などは、皆、その號なり。三河の人なり。寛文十二年、九十歳にて歿しぬ。丈山は、もと武人なれども、後に文學に志し、最詩才ありて、一時に名あり。その遺稿を、覆醬全集といふ。二十四卷ありて、詩文を集錄せり。

この外、著書も、六七部ありて、世に行はれたり。

今、こゝに揭げんとする詩は、最、世によく知られたるものなり。されど、德川氏初世の頃は、我が國の文學、未、其の盛大の運に向はず、足利以來、僧徒の手にありし文學の、僅に、一變したるまでなり。故に、藤原惺窩、林羅山など、當時、大家の出づるあるも、その詩文は、後世の名家の如く巧妙なるを得ず。また、文辭に心を用ゐるの志もうすきなり。丈山は惺窩に學びて、勤苦したれども、詩の風は、尙、高尙なりとはいひ難しといふ評もあり。これ、第一その時世の然らしめし所なり。那波師曾の學問源流といへる書にも、「惺窩の詩文は、和氣和習を免れず。其の比、詩に名高

き人は石川丈山、其の詩を好み、詩を學ぶ、信に苦み勤めたり。亦、時運に由るにや、格高からず。句融ならず。云々、丈山此の如くなるにて、其の頃の詩の風も、亦、推して知るべし。」といひて、その時代を評したり。それより「二三百年の間に、非常の變化と進歩とをなして、今日の時代に至りしは、如何にも、驚くべきことならずや。

仙客來遊雲外巓。

詩には、古詩も、律詩も排律も絶句もあり。また、五言と七言との區別もあり。この詩は、即、七言の絶句なり。絶句とは、律詩の半分の如きものにて、四句を以て、一首をなすなり。この四句の順序を、起承轉結ともいふ。又起承轉合ともいふ。第一は、起句なり。第二は承句なり。第三は轉句なり。第四は、結句なり。この四の順序よく調ひて、詩始て成るなり。こゝに掲げたるは、即起句にて、初なり。

古よりこの山は、仙人の來り遊ぶ所なりなどいひ傳へ來れる故に、かく、仙人の遊ぶなる雲の外にそびえたる峯といひ起したるなり。

神龍棲老洞中淵。

この句は、承句なり。先の句をうけて、詞をなすなり。また、この句の如く先の句と句調の同じきやうに、詞を對するを對句といふ。而して、この對句には、前の兩句のみ對にするを前對後散といひ、後の兩句のみを對するを後對前散といひ。四句を前後に分ち、兩者ともに對にするを前對後對といふなり。この詩は、前對後散なり。

この第二の句は、先の詞と、調を同じくして、神龍を先の仙客に對し、棲老を來遊に對し、洞中を雲外に對したるなり。而して、述ぶる所の事は、別の事にして、また、古より、神龍ありて、山上の洞府の淵に住み年久しくして老せりといへりとうけたるなり。古は、山上の穴に、神池ありといひ傳へたれば、之をいへるなるべし。

雪ハ如ク二紈素ノ一煙ハ如シ二柄ノ一。

この句は轉句なり。轉句は、起句、承句の意を一轉して、更に、又、詞を排へ意を述べて、結句に連屬せしむるものなり。この詩は、則、前の二句にて、神山の靈妙なる所以をいひあらはし、更に、轉句にいたりて、實景をのべたり。

雪は紈素の如くとは、峯の白雪は、恰、白地の絹の如くといふなり。烟は柄の如しとは上に立ちのぼる烟は柄の如しといふなり。富士を扇と見立てん爲にあやなしたる語ゆゑ、雪をば、扇に張りたる白絹と見做し、烟を柄と見なしたるなり。

白扇倒ニ懸ル東海ノ天ニ。

この句は結句なり。即、上の三句を總べて結べる句なり。然れど、轉句の意をうけて、關係、最重し。轉句に於いて、この山の白扇に似たる實景をのべ置きて、この句に於いて、全く喩を取りて、白扇の倒に懸りて東海の天にあるが如くなりと決定したるなり。

この詩に用ゐたる韻は、一先の韻なり。一先は、下平の第一なり。平韻に、上平下平の別あり。各十五韻あり。合して、平韻は、三十韻となるなり。この事、くはしくは、つぎ〳〵に述ふべし。

さて、この詩の全躰の意味は、この山は、まことに、靈山にて、仙人も來りて、雲外に聳ゆる峯に遊び、神龍も、山上の洞の淵に棲むといふことなるが、いかにも、さもあるべし。そは、その外形より見るも、峯の白雪は、白き絹の如く、烟の立ちのぼるは、柄の如く、恰、白扇を倒に東海の天上にかけたるが如く、景色もすがたも、まことに、美しき山にてありけり。と稱賛したるなり。

次に、この作者の傳記を掲ぐべし。

* * * * *

十六、石川丈山　　鹽谷世弘

世弘、字は毅侯、通稱を甲藏といふ。宕陰、悔山

く、忠誠怠らざりき。實に正右衛門は、そへ乳こそはせざれ、全く、とせ女が手、一つに養はれ、今日までながらへしものとて、とせ女を見る事慈母の如く、願ひ、誠の母として養育の恩に報ひんものとて、公にさへ願ひ出しかど、法規のゆるさゞる所とて、やむを得ず、そのまゝに過したれど、心は、なほ、生の母を見る如くするを、とせ女は、中々に主從の禮を失はず。たゞ敬し、たゞ愼みて、之に事へ、主家の財産、さばかり增加せしかば、村民等、とせを呼びて福虫と稱するばかりなりしかど、とせ女は、つゆ、己が功とせず。佛事、又は、他へ行くにわたり、遣錢を受くるも、殘餘あれど、必、之を還し、嚢中、かつて、一厘の私錢なく、一意に主家を起す事を、熱心盡力すること四十餘年、唯一日の如く、主家、しきりに、不幸に遭遇し、しば／＼傾かんとするを、一身に支持して、遂に、家屋を新築し、巨有の財産を得せしめたる、實に、たぐひ、まれなる忠婢と云ふべし。されど、近隣は云ふまでもなく、村中、みな、之を、福虫と賞してやまず。事、縣廳に聞えて、知事より、金圓を賜はり、大に、之を賞譽せられけるが、後、又、公に達し、遂に、褒章を賜はりて、其が善行を表彰せらるゝに至れり。あはれ、ふきすさぶ風は、ます／＼、ちり立てゝ、いよいよ、すまぬ世の中に、ひとり、赤き心を以て、一意に、主につくし、その身は、一生、人の婢となりて終れる世の人は、馬鹿正直と笑はんやも知らねど、かゝるもの、又、姑に孝ならんと思ふにも、世にとるべきは、忠實の婦人にこそ。



家政



茶の湯

茶禮初學（前承）

孤峰庵碌仙齋不羨

關　葦雄

以下、渾て、正午の秩序に差違なければ省略すべし。但、夜會の事故、淡薄に務むべし。餘り深更にならざる樣、注意すべし。夜間は手燭の扱を要すべし。點茶の時、及、道具拜見の時、御手燭も借用したしと言述ぶべし。此の手燭は、道具返却の時、同時に、添て返すべし。偖、夜話は、濃茶濟たらむ、亭主の勞を謝し、箱書付の拜見を望むことも、夜更たらんには、略してよし。婦人の、餘り深更に歸途抔は、感心せざるもの也。匆々に歸るべし。本夜は、種々御心配の夜會御茶戴き有難存舛。御箱書付類も拜見願度候得共、自然夜も更可申に付、他日に讓り御暇仕舛。御跡仕舞も、玄嘸々抔と云て別るべし。亭主は、庭口、或は、玄關迄送り出づべし。此時、庭内、雪洞を可レ用。別袖の時、御途上を御大事に抔言ひ述べし。客は御主婦樣には、定て御勞に可レ有と挨拶すべし。底で、客歸りたらば、四五分間過て、跡を片付べし。夜間の事故、特更に、火鎭の事を、念頭に掛くべし。

但、跡片付も夜間の事故、緊要の器品斗、殘餘は翌朝に至り、日光を得て、靜に跡の仕舞をなすべし。

一飯後の茶の湯の事（また菓子の茶の湯とも云ふ）

不羨曰、飯後の茶の湯は、正午の茶に變る事なし。

懐石の料理なき而已なり。初座に吸物、酒、肴(但八寸)菓子、又は酒肴、菓子斗の事も有。右三通、初炭の仕様、其外、午時の茶に變る事なし。押及ぼして知べきなり。

但、飯後の茶の性質を分析する時は、正午に比較すれど、數等、輕く淡泊なるもの也。時間は、食半後と云なれど午後二時也。去故に、客も、さらさらとして、餘り重々敷すべからず。酒 肴斗出すも一品丈は、心頭を用ゐ客の請方、宜敷、多少の感動あるものを見立考ふべし。吸物も、正午の時の如く、一口ものにしては如何に哉、微少、椀盛に近く仕立べし。一獻呑めると言物にすべし。是、口傳の問題也。此の茶の湯に限り、菓子は、最注意して大振りに製造して進むべし。又云、道具類も、此會は寂寞たるか取合よしと會得すべし。

一不時の茶の湯は、右の法を以て、其の時々の作略有べし。料理は、不二取敢、何にてもざつとしたるが善なり。事足ぬが風雅なるべし。

不美曰、此の茶の湯は、名義の如く不時、臨時に、數奇者の方へ、茶の湯を申籠むべし。今日は、洵に、乍二突然、不時に正午、或は、飯後、御茶申入度御承諾に預り度と照會すべし。亭主、婦人の方にては能耐、不時之茶御申籠、誠に不行屆なれども、幸在宿に付、正午不時の御茶可二差上と迴答すべし。次に、客方は、諾を得たれど迚直に、押掛徃候ては、亭主方の都合もあるべけれど、其の場合次第近傍某誰の方にて待合可レ申杯申遣すべし。左なければ、亭主方、手廣の住居ならど、別間に通して、煙草盆抔出して、準備竣功の報をなすべし。

(未完)

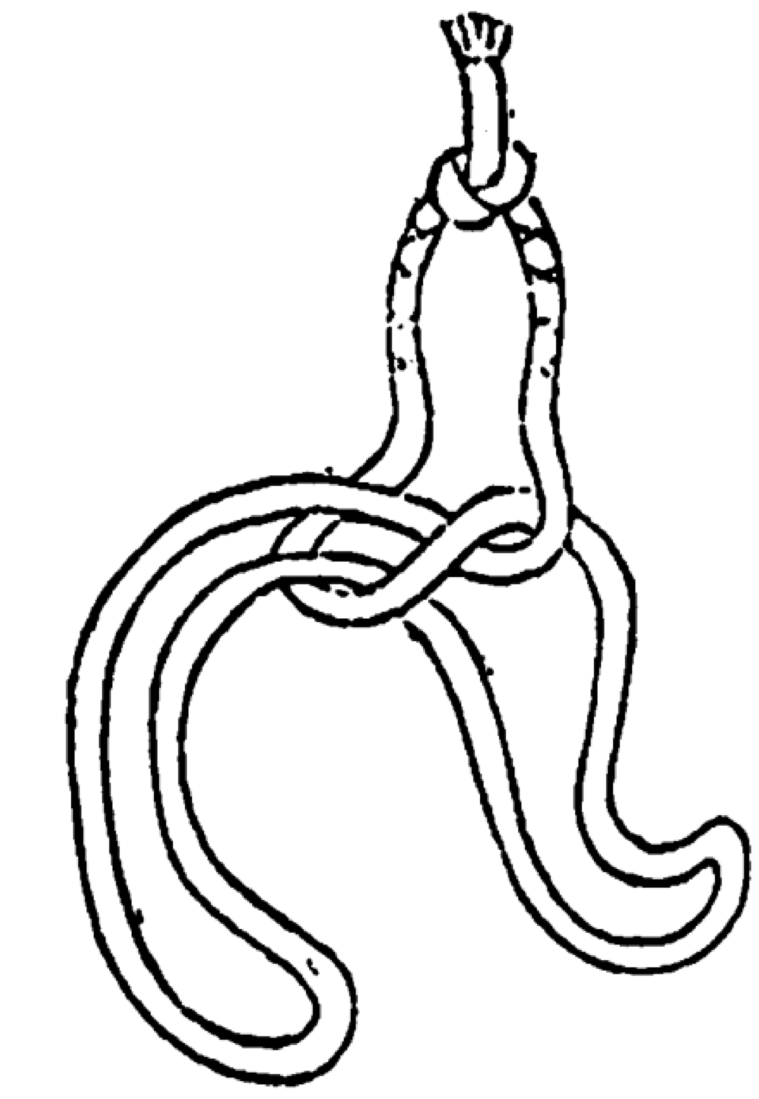
結物百種

百草庵一無

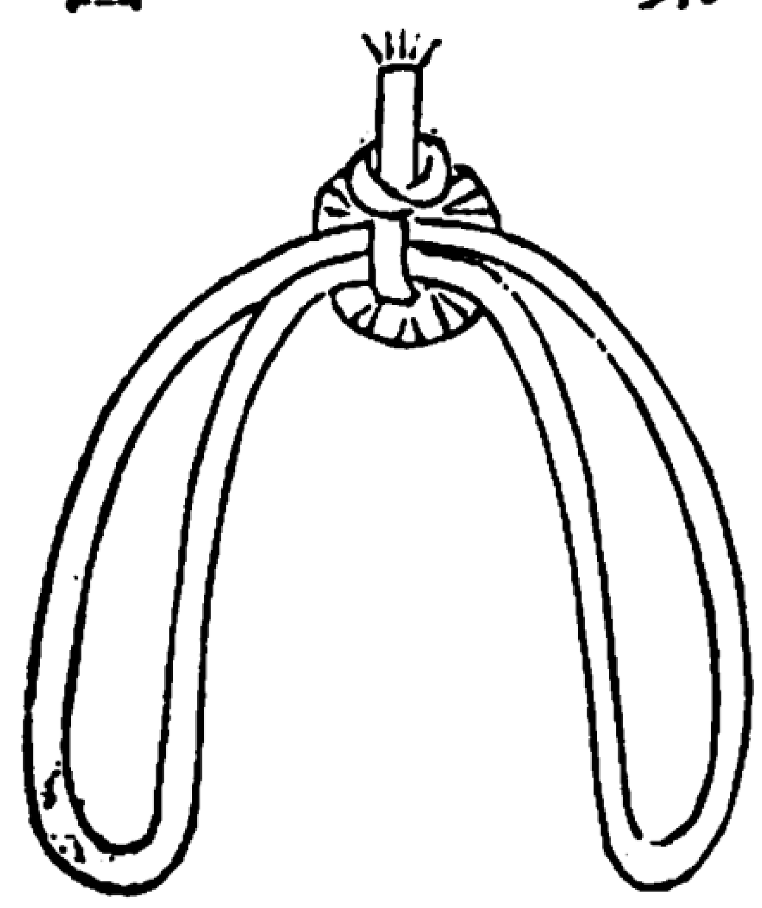
袋の長緒結（甲）

（何結にするも如此下緒をして置き後ちつくるなり）（乙）

第一圖



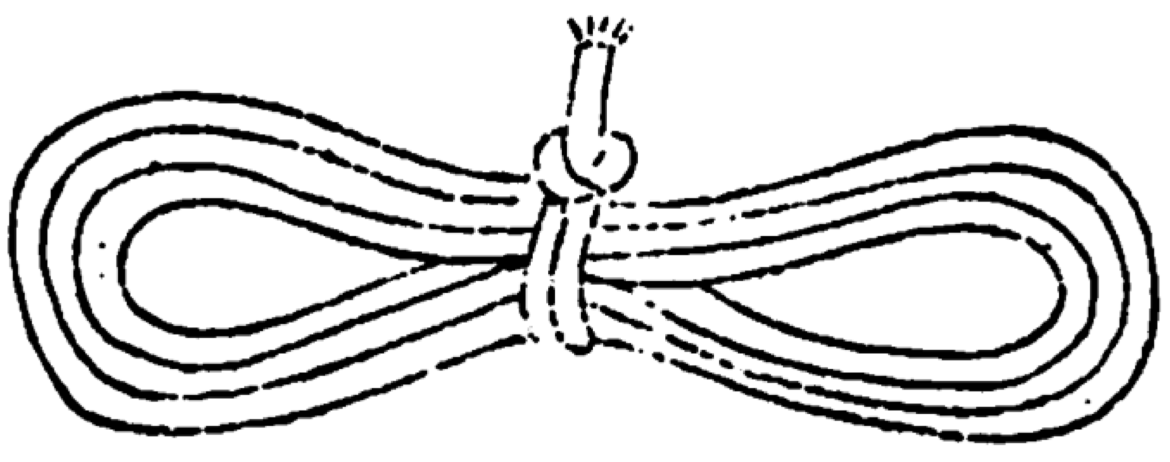
第一圖



常の長緒むすび

（前の如く下結し兩わなにむすべる一方のわな三ッづゝになるなり）

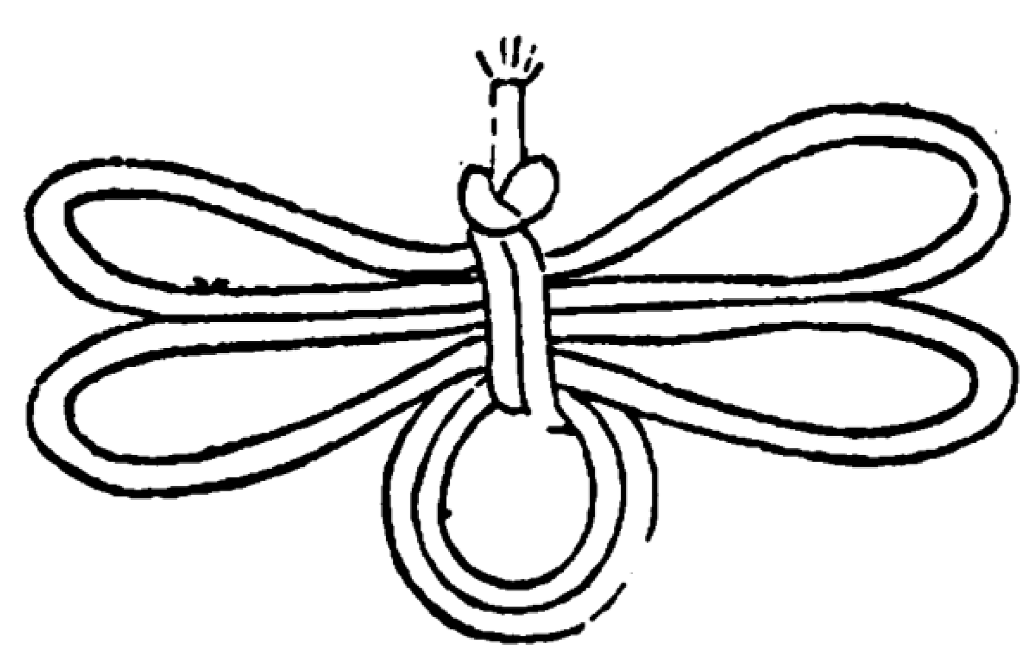
第二圖



とんぼう結

（下緒結様前に同じ）

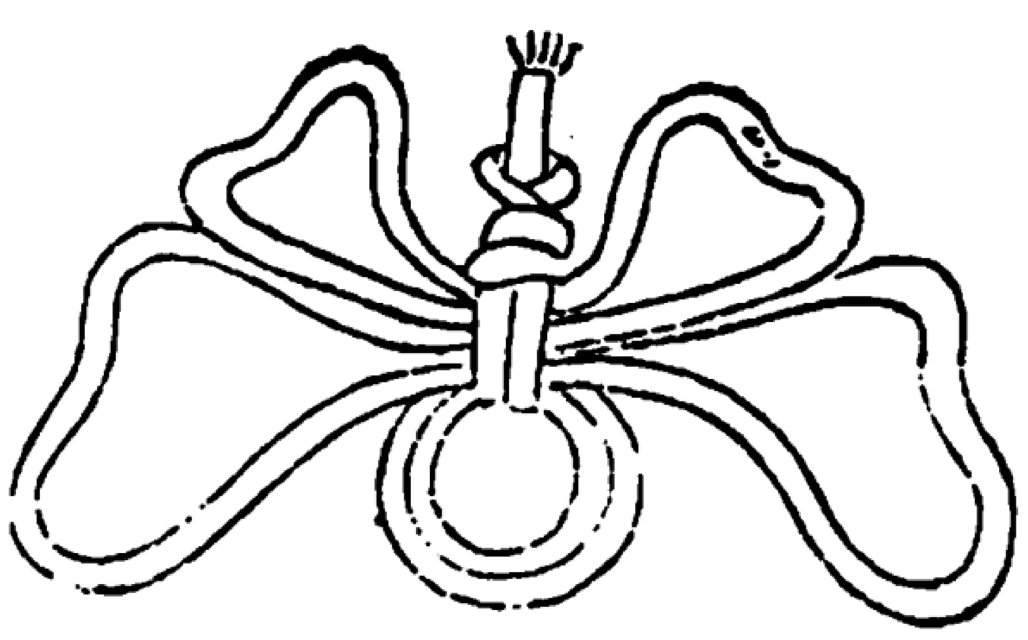
第三圖



蝶結

（下緒は前に同じ）

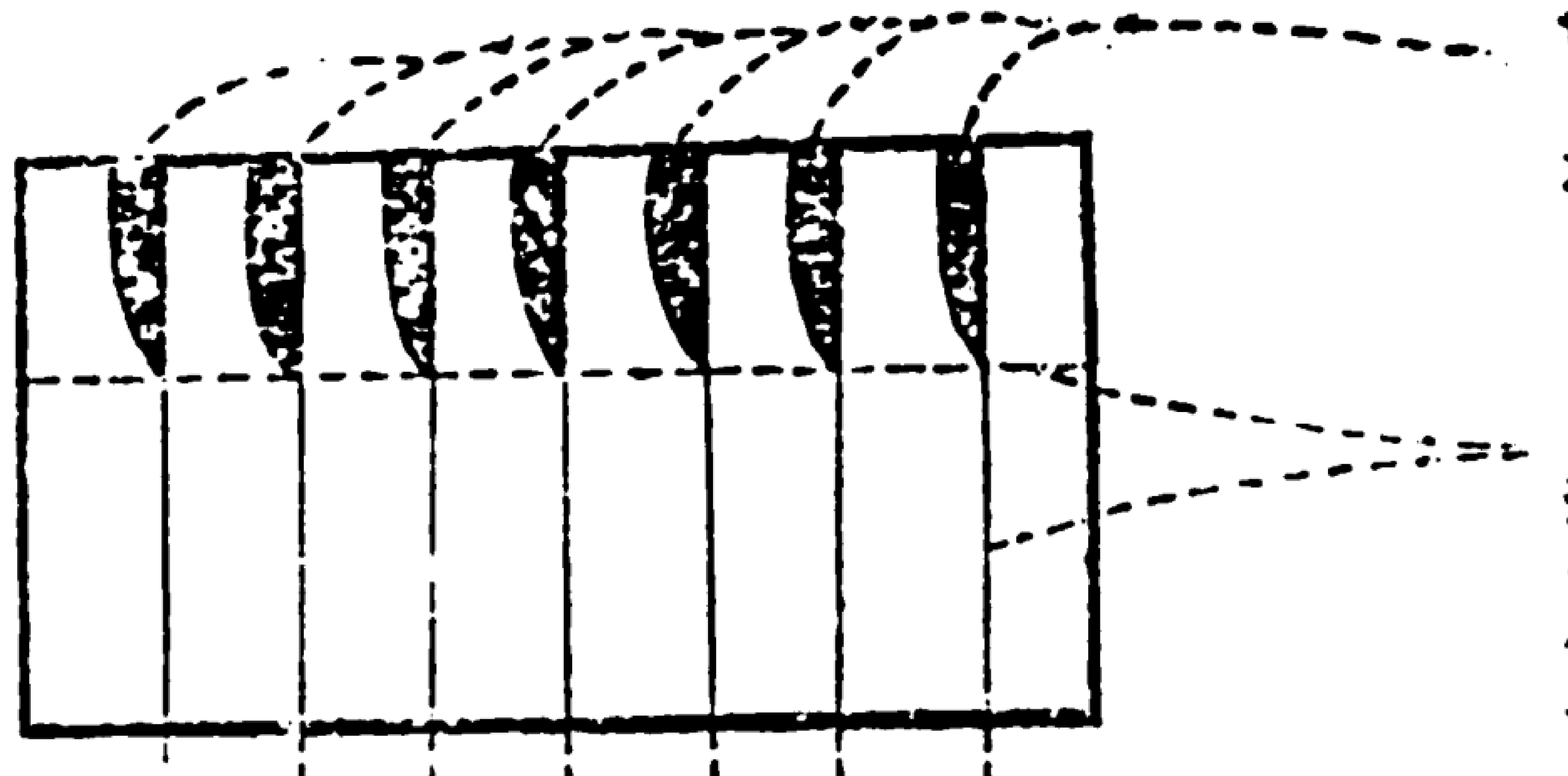
第四圖



たちぬひ

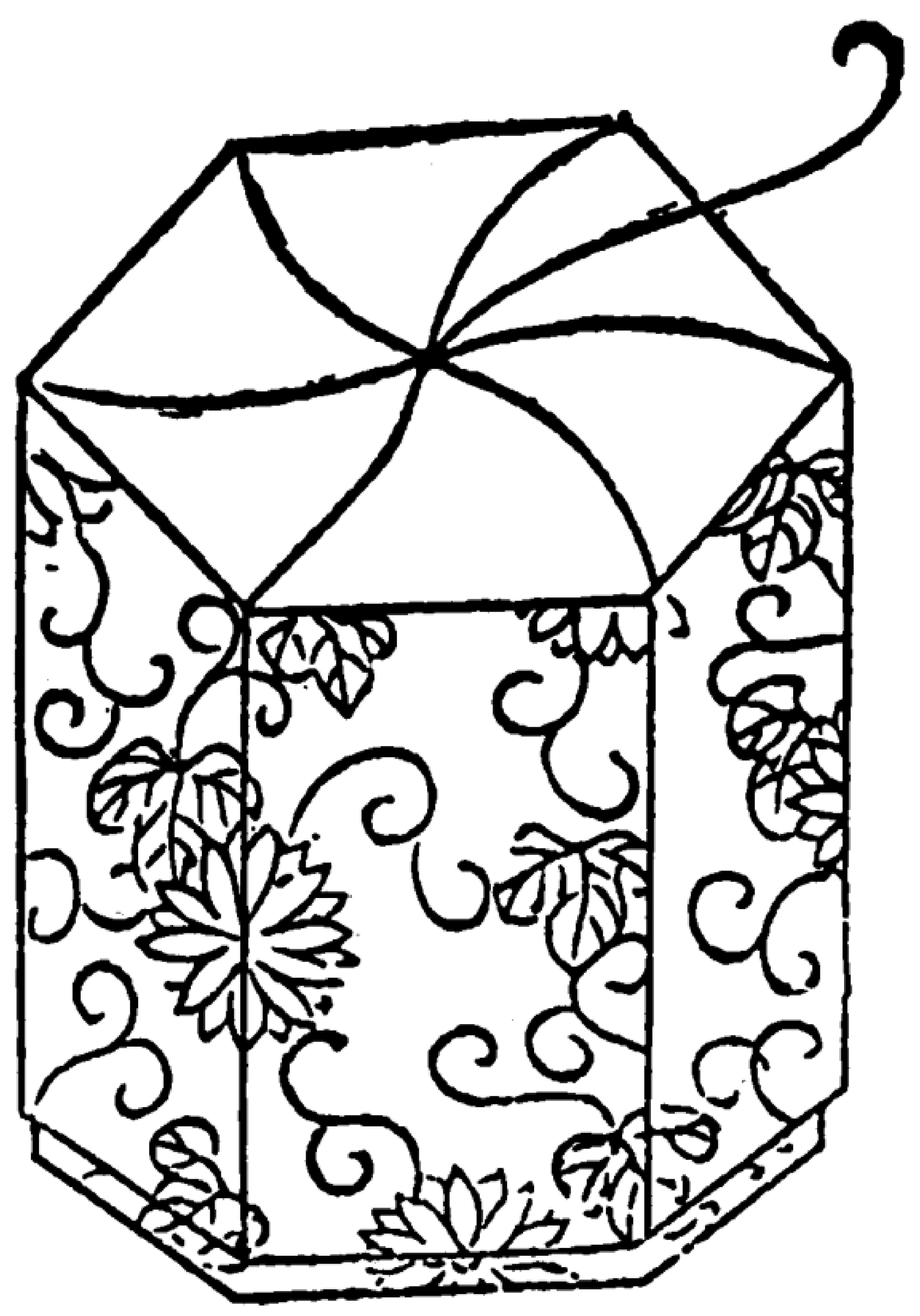
西山たい子

(百十三) 緒箱



まづ、厚紙を、圖の如くになりつけにて、裏より條をつけ、上を圖の如くかきおとし、そのかきおとしたる所に、ちりめんにても、どんすにても、唐ちりめんにても、思ふまゝの切を、六片とも、各、のりにてはりつけ、千代紙を、その箱のまはりに、表より裏まではりつけ、合せしろとしるしある所に、のりをつけ、輪になして、上の切をはりたる所を  の如く、花形にくみ合すべし。また、その切をはりつくる時、錦、少しばかりを入るゝもよし。その切れをはりたる方を蓋になし、身の方はふたより、一片毎に五厘ばかりづゝ、小形に形をつけ、同じ形に折り目をつけ、千代紙にて、底もまはりもはりつけ、同じ形に折り疊み、緒を入れ、花形にたゝみし眞中より、緒の端緒を出しおくべし。

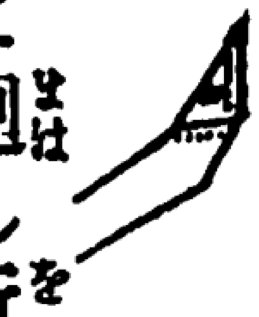
緒箱完圖



背負守

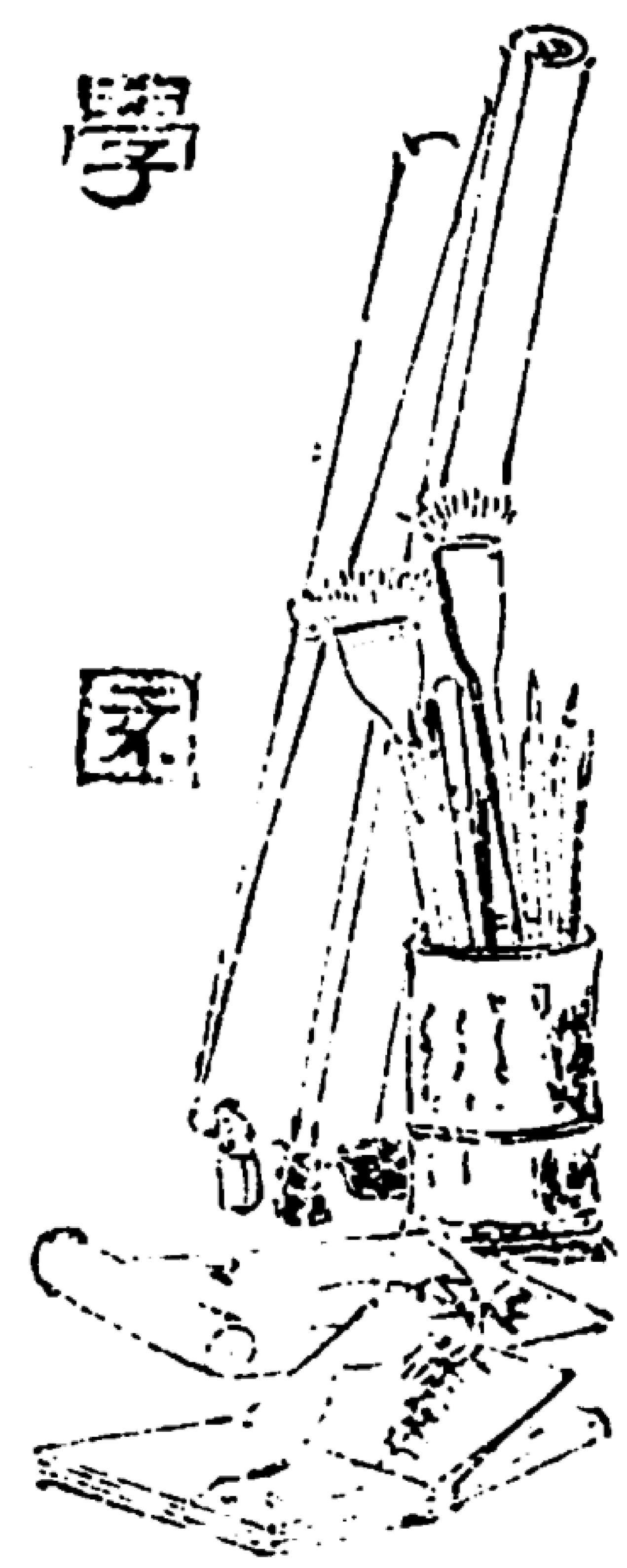
背負守は、よく老母などの、守を入れて、帶の下に負ふもの故に、此の名あり。まづ、細き切れのはしを、三角に疊み、……の所を、まづぬひ、次に、又、

また



上圖の如く折りて、…の所をぬひ、次第次第に廻し折りにして、ぬひまはし、はしに至らせ、糸をとめて、引きかふべし。そのはしを裏の方に、ふせてぬふべし。

學園



漢文學講義（十八）

大林弘一郎

十五、富士山

石川凹

凹、初の名は重之、字は子牧、小字を嘉右衛門といへり。丈山、六々山人、四明山人、凹凸窠、大拙、烏鱗、山木、山材、藪里、東溪、三足などは、皆、その號なり。三河の人なり。寛文十二年、九十歳にて歿しぬ。丈山は、もと武人なれども、後に文學に志し、最詩才ありて、一時に名あり。その遺稿を、覆醤全集といふ。二十四卷ありて、詩文を集錄せり。

この外、著書も、六七部ありて、世に行はれたり。今、こゝに揭げんとする詩は、最、世によく知られたるものなり。されど、徳川氏初世の頃は、我が國の文學、未、其の盛大の運に向はず、足利以來、僧徒の手にありし文學の、僅に、一變したるまでなり。故に、藤原惺窩、林羅山など、當時、大家の出づるあるも、その詩文は、後世の名家の如く巧妙なるを得ず。また、文辭に心を用ゐるの志もうすきなり。丈山は惺窩に學びて、勸苦したれども、詩の風は、尙、高尙なりとはいひ難しといふ評もあり。これ、第一その時世の然らしめし所なり。那波師曾の學問源流といへる書にも、「惺窩の詩文は、和氣和習を免れず。其の比、詩に名高

き人は石川丈山、其の詩を好み、詩を學ぶ、信に苦み勤めたり。亦、時運に由るにや、格高からず。句融ならず。云々、丈山此の如くなるにて、其の頃の詩の風も、亦、推して知るべし。」といひて、その時代を評したり。それより「二三百年の間に、非常の變化と進歩とをなして、今日の時代に至りしは、如何にも、驚くべきことならずや。

仙客來遊雲外巓。

詩には、古詩も、律詩も排律も絶句もあり。また、五言と七言との區別もあり。この詩は、即、七言の絶句なり。絶句とは、律詩の半分の如きものにて、四句を以て、一首をなすなり。この四句の順序を、起承轉結ともいふ。又起承轉合ともいふ。第一は、起句なり。第二は承句なり。第三は轉句なり。第四は、結句なり。この四の順序よく調ひて、詩始て成るなり。こゝに掲げたるは、即起句にて、初なり。古よりこの山は、仙人の來り遊ぶ所なりなどいひ傳へ來れる故に、かく、仙人の遊ぶなる雲の外にそびえたる峯といひ起したるなり。

神龍棲老洞中淵。

この句は、承句なり。先の句をうけて、詞をなすなり。また、この句の如く先の句と句調の同じきやうに、詞を對するを對句といふ。而して、この對句には、前の兩句のみ對にするを前對後散といひ、後の兩句のみを對するを後對前散といひ。四句を前後に分ち、兩者ともに對にするを前對後對といふなり。この詩は、前對後散なり。

この第二の句は、先の詞と、調を同じくして、神龍を先の仙客に對し、棲老を來遊に對し、洞中を雲外に對したるなり。而して、述ぶる所の事は、別の事にして、また、古より、神龍ありて、山上の洞屈の淵に住み年久しくして老せりといへりとうけたるなり。古は、山上の穴に、神池ありといひ傳へたれば、之をいへるなるべし。

雲ハ如ク紈素ノ煙ハ如シ柄ノ。

この句は轉句なり。轉句は、起句、承句の意を一轉して、更に、又、詞を排へ意を述べて、結句に連屬せしむるものなり。この詩は、則、前の二句にて、神山の靈妙なる所以をいひあらはし、更に、轉句にいたりて、實景をのべたり。

雪は紈素の如くとは、峯の白雪は、恰、白地の絹の如くといふなり。煙は柄の如しとは上に立ちのぼる烟は柄の如しといふなり。富士を扇と見立てん爲におやなしたる語ゆゑ、雪をば、扇に張りたる白絹と見做し、烟を柄と見なしたるなり。

白扇倒ニ懸ル東海ノ天ニ。

この句は結句なり。即、上の三句を總べて結べる句なり。然れども、轉句の意をうけて、關係、最重し。轉句に於いて、この山の白扇に似たる實景をのべ置きて、この句に於いて、全く喩を取りて、白扇の倒に懸りて東海の天にあるが如くなりと決定したるなり。

この詩に用ゐたる韻は、一先の韻なり。一先は、下平の第一なり。平韻に、上平下平の別あり。各十五韻あり。合して、平韻は、三十韻となるなり。この事、くはしくは、つぎつぎに述ぶべし。

さて、この詩の全躰の意味は、この山は、まことに、靈山にて、仙人も來りて、雲外に聳ゆる峯に遊び、神龍も、山上の洞の淵に棲むといふこととなるが、いたにも、さもあるべし。そは、その外形より見るも、峯の白雪は、白き絹の如く、烟の立ちのぼるは、柄の如く、恰、白扇を倒に東海の天上にかけたるが如く、景色もすがたも、まことに、美しき山にてありけり。と稱賛したるなり。

次に、この作者の傳記を掲ぐべし。

＊　＊　＊　＊　＊

十六、石川丈山　　鹽谷世弘

世弘、字は毅侯、通稱を甲藏といふ。宕陰、悔山

等の號あり。江戸の人なり。初、賴襄に學び、後、松崎復に從へり。慶應三年年五十九にして歿しぬ。岩陰、文章を以て、名を一世に著し、又、嘗、幕府時代の史を編纂せんとする志あり。昭代記を著す。その他の著書も、亦、多く世に行はれたり。その遺稿を、岩陰存稿といふ。

こゝに揭げたるは、昭代記中より拔き出でたるものなり。

丈山の傳記は、大日本人名辭書、並に飯田默叟の日本野史の隱逸列傳にあるを初とし、原念齋が先哲叢談、角田大華が近世叢語にも見え、その他、逸事等は、常山紀談などの諸書に見えたり。又、擬將全集には、丈山の年譜ありて、事蹟を詳記せり。この年譜と、行狀と、墓誌とは、人見節の撰にて、長野豐山が撰べる傳と四篇ともに、五弓文久が事實文編にも收め入れたり。

石川重之。三河ノ人。幼而岐嶷。其ノ父信定曰。之ノ兒不レ揚ニ芳於千載一必魁ニ惡乎四海一。及レ長精悍。武技絕倫。烈祖召爲ニ近侍一。大阪之役從レ入レ京病レ熱甚。其母以レ書勗レ之云汝巳從軍ニ非レ立レ功無ニ復見一レ我。重之感泣力レ疾起。

この一節、重之が幼時より述べて、長じて勇武なると、母の義氣ありしことゝを併せ記したるなり。

石川重之の家は、人々德川氏の先代に仕へて、參河の碧海郡に住せり。淸和源氏の後胤にして、龜山侯石川の家と、その世系を同じうせり。祖父正信は長久手の戰に戰死を遂げ、父信定も武勇の聞ありき。重之、幼より、才氣あり。岐嶷として、山のさかしく秀でたるが如くなりき。父信定曰はく「この兒は、芳しき名を千載の後に揚ぐるか。もし、さらずは、必、惡事をもて、四海の內に魁たらん。」と。その後年、益長じて、心武く勇しく、武藝に達して、比なき程に至れり。烈祖は、東照公(家康)なり。公、乃、重之を召し出し、近侍と

爲しき。たま／＼、元和元年、夏大阪の役起りし時、重之は、公に從うて、京都に入りしが、傷寒、今の腸窒扶斯を病みて、いと重かりき。その時、母本多氏は、江戸より、書をおくりて、之を勵まし勉めしめて、いふやう「汝もはや從軍してあらん上は、功名を立てずむ、復、我と對面することなかれ。」との意を示したりき。かゝる病中なれど、世のつねの親ならんには、いかで、疾を大切にすべきことを諭さゞらん。さるを、さはいはで、「武功を立てずば、我を見るなかれ。」などいひて、その子の氣力をはげましたるを見れば、母本多氏の、いかにをゝしき心もてる人なりしかを知るを得べし。あゝかゝる母なればこそ、かゝる偉人をも生みけるなれ。重之、既に、かゝるありがたき母の敎をうけて、いかで、心に感ずることなくして止むべき。まことに、ふかく感ずる所ありて、涕にむせびつゝ、病を忍び、つとめて、出で立つこととなしぬ。

この事、湯淺常山が、常山紀談に詳かなれど、參考の爲にこゝにのせつ。

常山紀談卷之二十二、（石川重之功名幷隱遁の事の條）

石川嘉右衛門重之、字丈山は、淸和源氏にて、八幡太郎の第五男、石川義時の末なり。世々德川家の臣として、十六の時、東照宮の御旗本に召出され奉仕したり。幼少より、豪雄の人にて、非常なりしかど、七歲の時、父、此の男は、必日本第一と世にいはるべきにや、若、しからずは、日本第一悍惡の人となるべし。」と語られしとぞ。大坂夏の陣に、丈山腸寒を煩ひ重かりしに、其の母、本多氏、江戸より、文して、汝世々御旗本に仕へ奉り、此の軍に、武功、なくむ、又對面せじとぞはげまされける。丈山人によませて是を聞き涙くみてものもいはず。

とあり。又、次に、五月五日云々とあるは、もと、こゝにつゞける文なりと知るべし。

大猷過東寺。見重之乘竹輿。曰。彼病重。奈何至此。重之避路旁。待猷過。騎馬。渇甚。飲水三勺。覺胸間頗爽。烈祖聞之驚曰。得無有神助。明日加賀先鋒本多政重既交鋒。重之潜離伍。稱使者。入政重隊。刺敵殪之。有人奪其首。棄不顧。突入城門。復獲甲首。政重曰。卿盍見吾主叙功。重之曰。吾非會名。欲不忝祖先耳。」

この一節は、病をつとめて戰に赴き、先登の功を立てたることを記したるなり。

大猷は、東照公の猷をいふなり。公は、二條城より出立つ、東寺を過ぎられし時、重之が竹輿に乘れるを見て、彼は病氣重かりしと聞しに、何故に、ここに至れるか。」といはれたり。重之は、公の猷の來れるに逢うて、路傍に避け、公の過ぎ去るを待ちて、馬にうち乘りしに、渇する甚しかりしかば、水を三勺ばかりすくひてのみ、胸の中とみに爽かに快きを覺えたりき。公この事を聞いて、「神の助ありしにはあらざるか。」と驚かれたりとぞ。かくて、その翌日、加賀の前田利常の軍の先鋒なる本多政重、既に、大坂方と兵を交へたりしが、重之は、此の時失ふべからずと思ひ、ひそかに、隊伍をはなれて、御使なりと稱し、政重の陣に至り、大軍の中を通りぬけて、敵を刺して仆したりしが、味方の一人、その首を奪はんとせり。重之これをすてゝ、かへりみず、城門に突き入り、また、甲を着たる敵の首をうち取りて、引きかへしたり。この時、政重いへるやう、「君は何故に、わが主（利常に）見え、功名を立てし證據にせざるか。」と。重之これに答へて、いひけるは、「われ功名を求むるが爲にするに非ず、先祖を辱しめざるを思ふのみなり。」と。其の志、高しと謂ふべし。常山紀談

の文(つゞき)

五月五日、東照宮、既に、二條の城を打出させ給ひしを聞、其日は、病、殊に重く、前後を忘れて有しが、強ひて、たすけおこされ、かごに、舁乘られて、東寺を打過ける時に御覽あり、あやしませ給ひ、田上右京に仰有て、問せ給へど、見て歸り、石川嘉右衛門にて候と申を聞し召、彼は病重くて死すべきと聞しにと仰あり。丈山、八幡に到て水を三酌すくひのみて、胸の中の苦を、頓に、わすれたり。其の夜は東照宮河内の星田に御陣あり。丈山を召て、いと懇の御詞をかけさせ給ふ。六日に大坂に押よせ給ひ、、拔か、、、、、けを禁じ給ふ處に、七日の曉、丈山眞先にぬけかけして、加賀利常の先陣に至り、御使なりと稱して、大軍の中を押拔け、岡山にて、敵を討取たれども、味方、其の首を奪んとせしかど、打捨て、黑門に打入、佐々十右衛門と名乘たる敵をうち取、又敵一人打取て、従者に首を取せ門を出れど、馬に乘たる武者に行逢、遠藤但馬守が士、池田勝兵衛といふ者にて有しが、丈山の功名を感じければ、我は石川嘉右衛門なりと名乘て、池田も、首一つ得たりといへど、丈山其の姓名を刀の鞘に刻み付たり。加賀の大軍おしつゝき來れど、又、御使なりと呼はり、おし分て、利常に行逢討取たる首を見せ申て打過たり。其の夜本多安房守、丈山とゆかり有ければ、筑前守利常を證にせよとすゝむれども、我が利名の爲にするに非ず、先祖をはづかしめざる志のみなりといへり。





漫録

敎梯抄（十）

家集

雜歌の中に　西行法師

世のうさにひかるゝ人はあやめぐさ　こゝろの根なき心地こそすれ

夫木集雜

文治六年五社百首歌の中に蓬　皇太后宮大夫俊成

なほしとて麻のよもぎはなにならず　みだれてもあれ野邊のかる萱

新勅撰集雜二

題しらず　平泰時

世の中にあさはあと無くなりにけり　こゝろの儘のよもぎのみして

古今集雜下

題しらず　讀人しらず

よのなかは何かつねなるあすかゞは　きのふの淵ぞ今日は瀬となる

後撰集雜二

いたく事このむよしをときの人いふときゝて　高津内親王

なほき木にまがれる枝もあるものを　毛をふき疵をいふがわりなさ

拾遺集雜下

内より人の家に侍りける紅梅をほらせ給ひけるにうぐひすの巣くひて侍りければ家あるじの女まづかくそうせさせ侍りける

勅なればいともかしこしうぐひすの
やどはと問はゞいかゞ答へむ

金葉集雜上

たがひにつゝむことありけるをとこのたはやすく逢ずとうらみければよめる　和泉式部

おのが身の己がこゝろにかなはぬを
おもはゞものは思ひしりなむ

新古今集雜中

住吉社歌合に山を　後鳥羽院

おくやまのおどろが下もふみわけて
道ある世ぞとひとに知らせむ

新勅撰集雜二

題しらず　後京極攝政太政大臣

さてもさはすまむすむべき世の中に
人のこゝろのにごりはてぬる

同

同　山家松といふことを　皇太后宮太夫俊成

今はとてつま木こるべきやどのまつ
ちよをぞ君となほいのるかな

同

同　高倉院御時つたへ奏さすること侍りけるにかきそへて侍りける　西行法師

あとゞめて古きをしたふ世ならなむ
今もあるべきむかしなるべし

たのもしな君きみにますときにあひて
こゝろの色をふでにそめつる

續後撰集雜中

本草をひらきみてよめる　丹波經長

數へおくそのことの葉をしるべにて
よもの草木のこゝろをぞわく

續拾遺集雜中

題しらず　平親清女

とにかくにうきは此の世の習ひぞと
おもへむ身をも怨みやはする

同　同　藤原時景

ゆく末をたのみて世をもすぐすかな
うきをばよそに思ひなしつゝ

（以下次號）

正誤第三回の目録（三）とすべきを誤りて（二）とせり。それより號を追て誤りきたれり。

主従心得草（承前）

諏訪忠元

いづれの家にも、手代子供多けれ共、主人の御用を、よく勤めて、主人の力になり、助となる、人は、至つて稀なり、皆なまけ者、わんばく者にて、主人も、甚こまり入給ふ也。麴町小西六兵衛の奉公人に善助といふ小二才あり。其の親がいふには、汝がやうなわんばく飛上り者を、御主人は、能く面倒を御覧なされる、れれは、汝にこまりはて持兼はてたといふたとの事は千萬也。誠にわんばく者に相違なし。然らば主人の所は、わんばく者の寄合、不埒者の集合、身上持事を知らぬ者の寄合損徳善悪を知らぬ者の寄合なまけ者の天氣者の寄合、利た風義理知らずの寄合、飛上り者金遣ひたがる者の寄合、無知、悪人の寄合なれど、主人も甚氣のもめる事也。少し油斷をすれど大損をして、直に、から財布、から藏となる。誠に恐ろしい物は我子、我手代共なり、若者六歌仙に

「飛上るはめ　そやさる丶利た風うまい事には遂だまさる丶」「遊びたしのらかわきたし樂したしみえ作りたし金遣ひたし」「よき事はとろふて邪魔で面倒で小六かしうていやでならない」此の三首の歌を繰還へし讀で、若共の身の上を考ふべし。少共よい事はせぬ。少共、取

所なし。主人の氣のもめるも御尤千萬ならずや。竪より見ても、横から見ても、身上を持つやうな所が少共ない、末には、主親になんぎをかけ、こもをかぶりて雨にぬれつゝの者共ばかり也、心ある、若者は、かやうな道理を、よく心得て、御主人の御力になるやうに、忠義一途に、晝夜つとめ働くべし。若者六歌仙をよく考ふべし。此の外に、また、三首あれ共、あまり若者共の鼻がひしげる事ばかりなれば。若者ひいきにて爰へ出さぬ也。此異見を聞て身を修め、家業を出精して、御主人の御安堵なさるゝやうにすべし。若、此の異見を聞ずして不忠不身持ならば、是非に及ばぬ。殘りの三首を取出して、若者共の顔の皮をむき大へこみを至さすべし。何卒上の三首も後の三首もよみそこないになるようにすべし。さすれば、主人も大安心其の身は大福徳を得る事疑ひなし。何卒御主人は、何所へ出しても少も案事はないと、安心して居給ふやうな人となるべし。是を、誠のよい人といふ。諸願成就の人なり

○評にいはく、扨、八百両貰ふはあまり、貳拾両三拾両がよいといふにはあらず、八百両と貳拾両とは、大違ひなれ共、八百両貰ふて出た人は、大店の氣風がぬけず、萬事、身分よりおごる故に、滅亡に及ぶ也。是も五百両位のつもりにて始めより其の用心にて暮すに於ては、貳拾両位は、中々、足元へもより付がたし。然れ共爰が世の中の形勢也。貳拾両の人は、いつ迄も、なんぎを忘れずに居る。八百両の人は、もふしめた氣になつて、おごるとしらずに奢る也。八百両のおとろへるも、貳拾両の繁昌するも少の心得違ひ也。唯、奢るとおごらざるとにあり。八百両貰ふて出た人は、金は、何國にも、澤山にあるやうにおもひ。あまり大切にせぬ者也。又、大家の風がどふもぬけずぞんじれも〳〵敷、手高にする故に、末はおとろへる筈也。是も、今迄の風儀を捨て、身も心も引下り、外聞もかまわず、萬事手輕に暮しなば、かやうのあやまりの有間敷に殘念千萬なり。兎角、名聞があつて、大風にやりたがる

によつて也。二十兩三十兩の元手の者と、同じやうに思ひなさ、何ぞ見世を仕舞、再び主人の御世話にならんや。無智にして、末の事が見へぬ人也。能々考へて越度なきやうにすべし。儉約質素は、君子の道也。大風をやめて、此の道を行ひ給へ少く、格子作りにして、本店へ見舞奉公する氣遣ひなし。大店向の番頭衆この道理をよく考へ置て、店持になつたる時の突かい棒にすべし。大きに御世話。

然れ共、世の中の事は、よくした物也。八百兩は、繁昌して、二十兩はおとろへると定て居ては、ちいさい所や、貧乏なる所に奉公する者は、一人もあるまじきに、左にあらずして、あしきがあしきにもあらず。よきがよきにもあらず。唯其の人の一心の覺悟による事也。世の中はまわり持とは、よくいふた者也。上下共れごりをやめて。唯、一心にかせぐべし。おごりを止て。一心にかせぐ者は、御家は繁昌子孫は長久なるべし。都て、奉公人たる者は、忠義正直を、第一とすべし。主人の損のゆかぬやうに、諸事、萬事、氣を付けて大切にすべし。天の冥加に叶ひて、行末、急度吉事なるべし。然るに主人の損徳をかまわず、己が身の安樂を好み、己が、勝手ざかりをして、主人の大恩をしらず、只、主人に働てやるやうに思ひ、くい物着物は、天からでも降たやうに思ひ、主人の大恩をしらぬ故に、後には其の罸が當て、一軒の主ともならずして、所々をさまよひあるき、後には乞小屋へはいこみ送つた送つた風の神を送つたといふやう不始末也。あわれ至極といふべし。あたらずといへ共遠からず。

○又、主人へ向ひて、うそ僞りをいふやつは、決して油斷すべからず。身に、あやまりあるか、心にわだかまりありとしるべし。又、用事にて出たる時に、あまりおそく歸るやつは、いづれ、惡事ありとさとりて、かやうなやつは、心にゆだんせず、用心して、使ふべし。ゆだんをすると、大に不覺を取事あり。心得あるべし。たとひ、少々鈍くても正直なる人を、よく敎て使

ふべし。十分によき人はなきとしるべし。○にぶくても。藝はなくてもかたわでも、唯、正直をよき人としれ。何ほど利根でも、發明でも、惡心のある不忠者は、決して使ふべからず。いつぞは災を引出すものなり。鈍くても、藝はなくても、唯、正直なる人を用ゆべし。此の人を用ゐなど、あまり大なるあやまりはなしとしるべし。兎角人は、律儀眞實のある人でなくては、役に立ぬとしるべし。且、又爰に一ッの難澁あり、物事を、麁末にしてあやまるはあたりまへなり。又、あまり丁寧過て、遲くて、用に立ぬ人あり。丁寧善徳を損するといふ。又、あまり、用心過て、あやまる事もあり。又、一ッ肝で押て見る所もあり、色々樣々の事あつて、理の當然は、中々知れがたし。日々月々工夫あつて、中道の可なる所を通るべし。前後左右を考へて、我身の徳を增、世の中を、鹽梅よく送るべし。是人間第一の心得也。

錦江遺文

成島錦江

田澤氏が蚊帳を賜れるを謝せし辭

天地の中に、あらゆる物ありて、人の爲、よきもあしきも有るものから、よからぬは、よきが妻になりて、よきも、亦あしきが媒となれゝば、北の翁が、馬を失ひし故事を辨へ、雌雄の理を知れなば、厭ふ方もなく、したふるにふる方もあらざらんかし。人の形より始めて兒手柏の二れもてなるは、一の物の上にもあれど、さはさと思ひときてむ。人々、萬のよきとあしさと、あざなべる繩となん、見つゝ過すらんかし。春秋の物は、皆、あはれになつかしきを、蚊といふ虫なんあるは、如何なる天地の御心より、なり出し給ふらん、いぶかし。夕日傾くまゝ、楢の廣葉立戰ぎ、日の程の熱さ忘るゝ、草の種とるべく、おばしまに端居して、月待つ程、岩漏る清水の音澄みて、草葉の螢見え

み、見えずみ、とび交ふいとたくひなし。晝は消えつつ、何ばかりの思わればか、くるゝ夜毎にさえ渡るらん。心なきものとも見えず。汗衫の袖につゝみけん昔語いと優なり。蟬の聲靜まる梢に、月、はなやかに出でたる、命のつかねをとなん、ながめ居るに、彼の虫のすだきて、五月蠅なす。扇子をだに放たで打拂へば、やがて、もとの儘に來つゝ、いさゝめのほど、むくつけう惱めるは、如何なる者の輪廻して、人をさいなむにか。佛の在しまさば、問ひまいらすべし。殊にうれたきは、幼きものなど臥せたらんに、所得て、つらまみの程心にまきてくはせぬ、知らで有る程、なき出たるさになくむくつけし。老いたる人には更なり。物思勝にてねもやらぬ枕頭に、聲どよみて、後よりもせめぎ來る、いとうるさしや。吳猛など聞えし人、孝行の心には、おのが身を先立て、心ゆく儘にくはせけん、老いたる親を、いとほしみぬる心ざし、有難きものにぞすなる。此の虫のなからましかば、斯る、賢き人も、埋木の人知れぬ名に朽ぬべし。されば、物をも天地の御心には、隔なくみそなはするものゝ、惡しき業する故にや、秋風吹くより、跡もなくなりゆくなるべし。よからぬ事するものも、暫時は、勢猛にするものから、やがて、其の祟をうけて、果敢なき、後の名をだにくたしぬるかし。あきの虫などは、之を食みてぞ、玉の緒はつぎね。蘆の中に巣くへる鳥ありて、よくともになくか、其の聲につぎて、集るを取り食ふとなん。かゝる物の養へる事は、惡しき業するものとて、ひたぶるに厭ひやはせん。されば提婆の惡も、施無畏大士のいつくしみかよふとなん聞けり。されど音せずと云のびたる中には、扇をだに鳴さであるを、野もせにすだく、虫の音よりもかしかましく、薄き、生絹の衣など、隔ありともせず。いぎたなき若人など、肩出したるに、紅葉の色にかはるまでさえて、いづち行くにかおらん。されば古き物語にも、蚊遣火どいひ、またかやの木は、蚊遣の木にして、かゞり火も、これを

からんとの料に備へしにや。几帳だつもの丶中に、ふしかくれてや寢ねけん、いとあつかりしなるべし。今の世は、蚊帳といふものを仕出で丶、便ある事となりぬ。品下れる者は、紙もてつくれるにと思へど、これは始なるべし。詩にも、蒲團紙帳夜の長きに任すと言へるとなん覺えし。人の國にては、をはやう冬の具にて、梅の花に寄せたり。世は花になりぬ、すゞしらなどもてせしに、錦だつ物もてさうぞきたるは、よきが際の具なるべし。我が家に、さよみにて造れるあり。親の親に當りつる人の、人の妻に出行くとて、手づから織れるなり。年は百年に近く、九十許の昔なるべし。上野の國に在りし事とぞ。親はらからも、之が中に臥しぬとをもへど、なつかしきものから、宇治の橋守年の經ぬれど、ちといふものも落ちぬ。彼方此方に築地のくづれはかりの、目とあきて、人通ふばかりなれど、さすがに昔の玄のむれぬる程に、五月待つ花橘の匂ふ頃より、綴りに綴りて、いまだあれど、とすれど、か丶る柳の絲の、よわりゆくを窺ひて、彼の虫の入りみちぬるぞいぶせき。唯、昔玄のぶのつゆ忘れぬ人香のみを身にしめて、世心つける身は、思ふ事つぎ〳〵にもあるを、幼き者の、數多出來にけれど、かひをふせたらん樣にまつろひたるを、心もなくとりつきて、長月ばかりに有る、茱萸と云ふ果の、枝もとを丶になれるけしたるまでさいなめる、いと苦し。布の十むらも得てしかな、漸に調じて、これをぞ、古き形見と秘置き、或は佛のうるしを隔となし、結縁をもなさまほしう思ひしも、心に任せでやみぬ。其の頃武藏野の、向ケ岡なる、よしあきのぬしが、來て侍りし儘に、縷に得させ給ひつる手つくりは、清らなるものにしあれば、田村の政人といふばかりに得させて侍りし。いとよくひわだの色に染めて、此の頃いできて、はらへせしいとかうかうしく侍りしを、其の類の布をもて、調じ給ひてんやといふに、家刀自に謀りて、安くせいしまゐらせなんと聞えし。又の年になりぬ。しか〳〵の事な

んど、ものゝ序に申しやりしを、やがて得も云はず、うるはしう仕出でゝ、寄せられしかど、其の名をたていれになして、謝し侍るとなん、

今ぞかの枕にすたく音さかでふすゐの床もいほ安くねん。

松懸吉川子に贈れる言葉　成島錦江

備後の國に住侍りしは、三十許の昔になん。いそのかみ古里と思へど、よし吹く風もなつかしくなんある。されど重る山には、八重汐路をさへ隔て、白雲に羽打かはす雁の翼も、ゆきかふ事稀なりけり。こゝに吉川のぬしなりけるがいますかりけり。その國知れるが、殊につかへまつりしが、もとは、鳥が鳴く吾妻にものして、敷島の唐の和の筵を共にせし程に、月の夕花の晨、ながめおける言の葉、折々に聞ゑかはすも、げに啻ならぬ過世なるべし。その相知れるわたりに、わつらへつけて、かみさねといふものを遣しける序に、

故郷に立歸るともいつかみきぬるよの夢の錦ならでは

と聞ゆるも、蟬の羽の薄き心ざしなるべし。又、其の友にすみ侍る人の、いたつきありて、先つ頃、湯あみにとて出立つ序に、玉鉾の道行振の言の葉、わたつ海の底の玉も、至らぬ隈なう書あつめたる、筆すさみを、遙に傳へみし事侍り。若紫の硯の海に、清き河原の千鳥の跡をつき、土佐のにきにも、程遠からぬ境まで、思ほはれ、すゞろにめでまどひにきや。折しも和歌の浦より、蘆を得て侍りしを、筆につくりて進らせけるまゝ、

言の葉の玉藻をまたもかきつめて蘆邊に寄せよ和歌の浦浪

とけいして給へといふも、中々片男浪かたはらいたしやとて、筆をさしおき侍ることしかなり。

木枯らしの笛の辭　成島錦江

神山長廣、木がらしといふ古き笛を傳へ得たり。これがやまと文作り出でよと、高市朝臣より請はれまゐら

せぬ。しかはあれど、やつがれ物の音の事は、つゆわくかたなく、まいて、其の人をも、亦知らねば、如何にか書いつくべき言の葉もなし。されど彼の器のてたいなる、持傳へたるなど、懇につゝりなして、一卷とせしを見せ給ひぬれど、其の始終、たしかに、さながら、手に取る計りなる、哀なるふしさへ添ひて、實にも、其の道に耽る人の心には、二なきものし見侍るらんとぞ覺えける。いでや唐の文にも、琴は禁の文字にかよひ、邪の心を塞ぎ、蒸は、條の韵として、心のあかをそゝぐとかや。殊更横笛の事は、袖に携へ懐にものするも、行所に隨ふ便あれど、古より、翫ぶ人も、堪能の譽、こゝらに聞え、ませの中なる白菊はとしらべて、ふるされたる女の心をかくし、月の夜に吹すさびて、袴垂などいふ者の窺へりしをだに、みさみさと懾服せしめたるたぐひ、唐の和のためし尠からずとや。樂の傳はりしは、高麗唐よりせしかば、彼の國には今も亦かわらんものゝ、さはわらずして、代替り時移り、

彼の國にしては、古の聲を皆失ひけることそ本意なけれ。此の日の本は、神の御末ながく傳り、鳥の跡に玄るし文も、昔の儘にありて、古の聲を、引物吹物にも殘しけることそたゞならぬ。されど、神樂催馬樂朗詠今樣のたぐひも、かげろふあるが如く、水の月、捉ること無きに似て傳ふる人のあくらはなることそ恨なれ。ないて樂府の詞など、何事に合してにや、毛詩の絃歌あるが如く、只聲のみを傳へて、其の詞の殘りなきぞはかなき。花散りたりと吹く笛のみぞ、殊に聲のをかしかりける。折柳落梅關月の諸調唐には詞のみを剩しぬ。いづれうらみ均しからずや。千々に餘れる樂の中には、古の聖の證歌ども、などか無からん。正しく五常樂など、其の、かたはしなるとぞ聞えし。さても此の笛の由りて來れる筋、くまも落ちず玄るし付けられしかど、今、はた之をかいもてゆかんは、いとくだくだしく、蛇の足を添へ、哀家の梨をむすに似たれば、さてやみぬ。おもふに、此の笛、濱ひさし久しく、世に埋

れたるが、今、斯く顯れぬる事よ。これや、其の人を得てと、下待せしなるべし。彼の干將鏌鎁の昔の劍、神物時ありて合ふと言へりし言の葉も、思合せられて侍りしかむ。

木からしの聲吹絶えし笛竹も
　今あらはれて世々に聲えむ

○夏の園生

赤松景福

小柑子の花のさゝやかなる、朝風にいみじうかをり渡るなをかし、遣水のわたりに、夕顏の白う笑きかゝれる、又そともの山田に、靑やかなる稻葉の風にそよくも、いと涼しげなり。一歳京に在りし夏は、かゝる涼しげなるに之逢ひきやは、夾竹桃のうつくしうて、久しう咲き續けるは、花の中にたぐひ稀らにて、百日紅にひとしかンめり、葉は竹のやうにて、花は桃に似たるもをかし、花赤きもあり、白きもあり、夏は白き花ぞ淸げにてよき、月草百合の花むらむらさける、百合にも眞白なる花あれど、そは見劣りせられて、姬百合のにむに映あるにはしかず。鬼百合、むかし淸少納言が書きし文の、名のおそろしきものに、漏たるもをかし、撫子の垣根にさけることしは、淚の露をもかけつべう悲し、さるはいにし年二人のをさな子を無く成たれむ、かの紫の物語に、山がつの垣穗あるとも、といはれたるなど、思出られてなむ、ことごとしき名付たれど、鳳仙は品れとれり、かへりて鷄頭ぞまさりたる、名の勝れて人ぎゝいみじきものゝ、眞はさあらぬも、世には多しとや、



○大阪の阿彌陀池の事を記す

赤松景福

大阪の阿彌陀池といふは、世にいみじく聞えつれど、いかむかりなる池ならむと思ひしにいと思ひの外なりけり、其廻いと狹くて小し、その水はいつより流れかはらふ事なからむ。いはむ方なく濁て穢なし。眞中に小き堂たてり。そこに佛をまつりなどして、阿彌陀といふは、むかし善光寺の彌陀をこゝより、取出しゆかりによるとか。あはれ彼佛よ、師木島の金刺宮の御世に、物部の尾輿たち、賢こく雄しき心振起して、天皇に申して、佛像どもを取捨むとして、其時大方の佛像は火にやけ水に沈みて失つるを、只此佛ぞかり、惡業ふかくて、火神も受賜ず、水にも沈みは、てずて、遂に禍津日神に助けられて、再堀江よりいでゝ、世に交らひけるに、ふとえせ幸に逢て、信濃國善光寺に齋きかしづかれて、遂に天の下の民どもを惑せるは、いといとあさましき事になむ、己先つ年博物の書を覽しに、その中に白金といふ事を記せるやう、此金世にわりがたき物にて、あまた有る金屬の中に、最堅く重し、其重さなべての金の十一倍ありとか、これを鑠すには、いといたく熱き火ならではとろけず、昔佛書にいへる閻浮檀金は此金なるを、世降てそを知らで、善光寺の佛などは、火にやきても、燒ざれどとて、ひたぶるに、佛のいきほひ貴く勝たる樣に、こちたきまで言ひはやしもて行は、いたくひが心得なるよし、彼博物の書にはいへり、げにさるべき事ならむかし、

○門跡の御湯

赤松景福

いにし年某門跡とかきこゆる、うせたまひし折、その御屍を洗たる湯をぞ、參集へる人とも、乞取て酒などを

入るやうに、皆器に入て、果は手毎に竹の筒を捧出ことごとくそれに入て、露もらさでもてかへれりとぞ。怪しうそは何にせしにかといへど、生佛を洗まつれる御湯なれど、有がたしとて、皆のめるなりとなむ。かかる愚なる心には、釋迦のまりおけるなりといはゞ、糞をもあり難うたうときものとして、食ふ人あらむかし、

桂園雜話

加藤雄吉

我がもたる香川翁の書束の中に、山田一郎左衛門（薩摩藩士、清安）に與へし一通あり。書体もいたくみだれ、文意もたど〳〵しき處あり。こは、病中に筆をとられしが故なり。其の文に曰く、

三原氏御供にて御下向に付き云々の御儀承知仕候愚老此頃吐血の氣味御座候て平臥中に候社中にも大概は對顏相斷候仕合に御座候さて又々御上京は可レ程遠愚拙辭世は可レ程レ近左候へど現世にて拜話無レ覺束甚遺憾此事に候へど失敬御赦面被下度云々

さて、香川長門介と署し、日附は二月六日なり。長門介とあるに徵すれど、翁が致命の病に罹られし折にはあらずして、天保十二年十月、肥後守に遷られし前なること明なり。されど、愚拙辭世は可程近とあるによりて察すれど、このをりも亦輕からざるいたづきに罹り給ひしを知るに足るべし。

又、今を距ること十年ばかり以前に、村山松根の息資澤氏より得たりし景樹が、まだ若かりしをりの短冊の中に、左の一首あり。佐々木氏が、景樹全集に出だされし井上氏藏の若書とも書体異り。

暮秋

長月の有明の月ものこりなく
なりぬる夜半にしぐれふるなり

桂園一枝に、秋時雨と題して、

　長月の有明の月のくまもなく
　　てる夜と思へどしぐれふるなり

とあるは、蓋、前のをひき直して出せるなるべし。

又『椎乃實筆』巻之十三に、景樹が京の圓山妓樓にての詠歌と題して、左の一篇あり。未、ものに見えざめれど、左に鈔出す。この書は寫本なれど、誤脱の文字も多かるべし、

　圓山丸山君が長崎なるを愛にうつしてみんや、此九重なるをかしこにうつさんや、此高殿のおもしまに時うたげてうたげわげなん、
　　　　　　　　長門介平景樹

　ひさかたの雲井にはふまゆずみは
　　二日の月のふたつなきかげ

又、我がもたる景恒の短冊の中に、

　あまたある薄紅の花の中に、
　　ひとり秀たる撫子のはな

といふがあり。歌の姿は秀でたるとしもなけれど、家集にもれたれど序にこゝにものしつ。

又、飯野厚比の懐紙（厚比は景樹の門人）さきごろ、ゆくりなく得たり。左の如し。

　松崎ぬし、ことし嘉永四といふ春二月ばかり、始めて歌のまど居る結び花むしろ敷きつらねたるは、げにいとたのもしう、末ながくしかからんには、敷島のやまとしまね行わたりて、愛たき道のしをりともなるらん基にこそと、打よろこべる老が心の、ひたぶるにえしもたゆたひ敢ず謡ひ出たる、

　春の野に鳴くもゝ千鳥百年を
　　かさねて花の道しるべせよ

松崎ぬしとは、いかなる人にか、吾寡聞にして、未、知るによしなし。

畫工のほまれ

篤齋隨筆

今より五百年餘の昔なりき。蒙古と云ふ、いと開けぬ國に生れ、アジアの國々を討從へ、エウロッパまで攻入りて武き名を後の世に殘しゝ、帖木兒可汗と云へる人あり。かく雄々しき人なりけれど、その性極めてはげしく、心にかなはぬ事あらむには、いかなる人なりとも、そを斬殺すこと、草木の枝を折るよりも、たやすげに振舞ひしかば、人々虎狼の如く畏怖れて、その命に反く者あらざりけり。

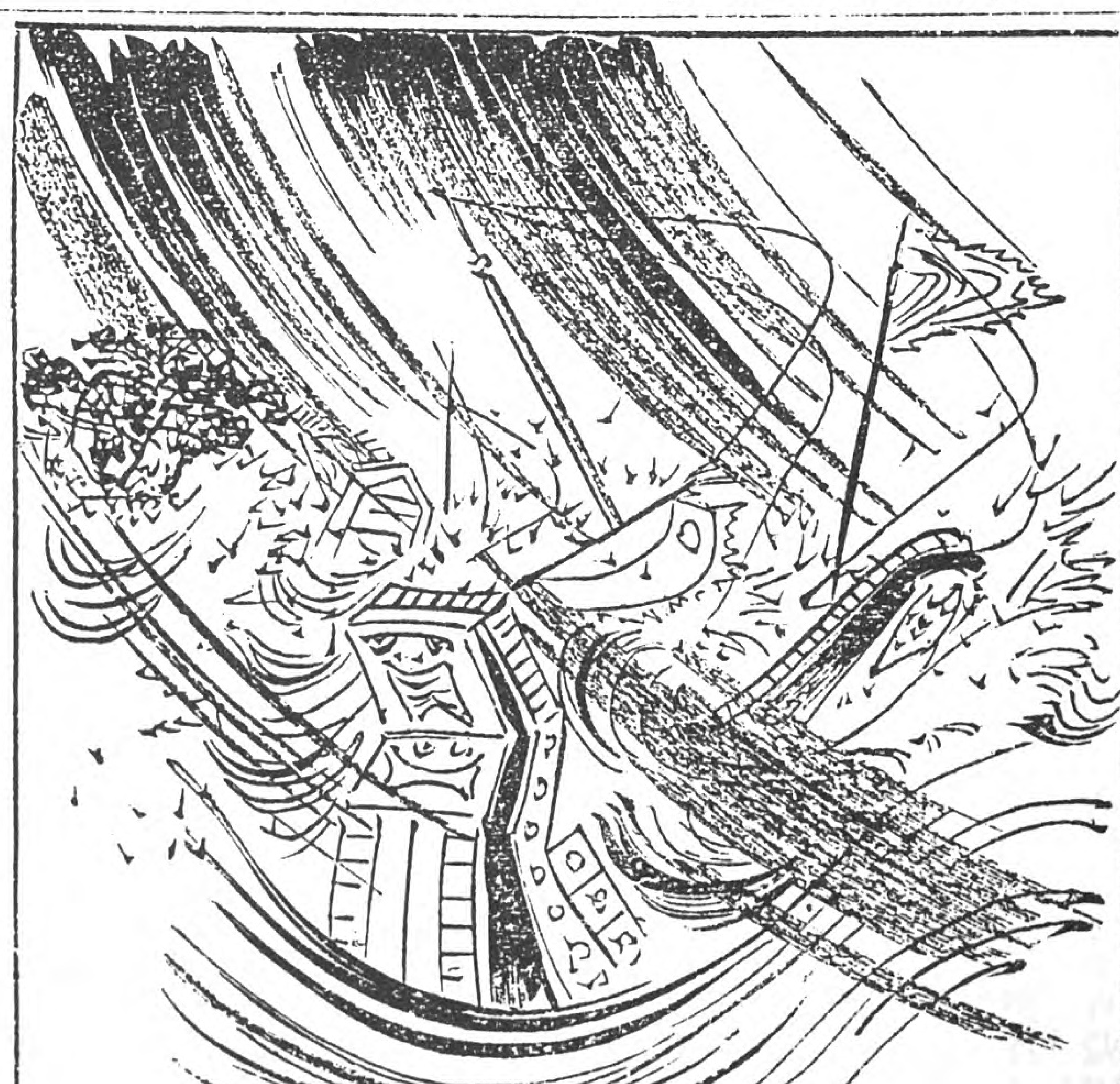
可汗は、心の勝れて烈しきさまや、其の面にあらはれたりけむ。いと見惡しき人にして、殊に片目は眇なりき、或時名ある繪師を召して、己が像を寫せよと命じけり。かの繪師思ひつるやう、可汗の像をありのまゝに寫さむは、いと〳〵たやすけれど、その見惡きさまを見給はゞ、いかなる罪をかうけなまし。また可汗にも似ざる像を物ゑなど、拙しとて、中々に御怒や強からまし。さりとて、こを辭ど、重き咎をや蒙りなむ、いかにせむと困じはてゝ、ゑどしは筆をも取らざりけり。

かくて、とざまかうざま思ひ謀りて、やがて、心に悟れる所やありけむ。俄に心を興して寫出せる繪のさまは、可汗が、眞弓の直中を握り、眇なる方の眼を閉ぢ、月の輪の如く、弓弦ひきしぼりつゝ、狙ひすまして射立てむとする所にして、射向ふ仇を今か一矢の下に射斃してむずる勢のたけ〴〵しさぞ、喩ふべくもあらざりける。可汗これを見て、こよなくうち喜び、若干の引出物取らせてあつく賞めはやせりとなむ。あはれこの繪師よ、その枝に至ふかく、その心さとからざらましかば、いかでかく虎狼の牙にかゝらむ禍を、こよなき福となし得ましや。見惡しき所を隱寫して、眞の狀をありのまゝにかき、現しゝこそ、かへす〴〵もめでたき思慮なりけれ。

大和ばなし

蓬生屋女史

文永七年、龜山天皇の御世に、元と云ふゑびす、支那、そのころ宋國と稱せるを滅ぼし、勢ひさながら猛虎の如かりしに、隣國みなおそれて、之に降服せり。元は天下に敵なき勢ひ、はては、我が國をも從はせんものとて、元主忽必烈韓人をして書を我が國にもたらしたり。もし我れに服さずば兵を尋ねんと、書辭いたく無禮なるに、時の執權北條時宗、之を見、之れ日本を輕視するなり、おのれ、日本は神國、ゑみしなどの尻に服すべき、無禮の使者直ちに逐ひかへしけり。元主は之を聞き、趙良弼をも使として又來らしたり。時宗大宰府をして固く拒ぎて、之を逐はしめぬ。元の使、する〳〵と六度來りたれど、六度ながら拒みて納れざるに、さてこそ兵を以ておどさんものとて、十一年十月、元兵一萬を率ゐ對馬に押しよせたり。地頭宗の助國之れと戰ひてみまかりぬ。元兵は轉じて、壹岐に至りぬ。守護代平の景隆又戰死せり。事六波羅に報げしかば、時宗、鎭西の諸將をして赴き拒がしめたり。し



きしまの山櫻、今こそ君につくすべき時なれとて、小貳の景資、力戰、ふる矢をいとはず、矢をつがへ、弓ひきしぼり〳〵、よつびきひやうと、ひきはなち、ひきはなち、遂に虜將劉復亨を射おとしたり。ゑみじの兵は大にみだれて、我れ先にと倚り逃かくれぬ、元主はなほ初の志を遂げんものとて、後宇多天皇の建治元年に、杜世忠、何文著等の輩を使者として長門に來り留まりて去らず、必ず我が報を得んとあるに、時宗、之を鎌倉に引かしめて、龍の口に斬り、上總の介北條實政を鎭西探題として京師を衞らしめ、西兵の衞者は、悉く實政に從はしめ、太宰府の水城を益しきづき、冗費をはぶきて、兵備に充てぬ、元はなほ、如何にもして日の本をして服さしめんものとて、弘安二年又もや使を擇びて太宰府に來らしめたり、太宰府又之を斬りたり。元主之を聞き、大に憤り、己たゞやはおくべき、軍馬にかけて、必服さしめんとて、漢胡韓の兵、凡そ十余萬人を合し、州師を發し、范文虎を以て、之に將とし來りおかしぬ。我が軍兵艦二艘を以て志賀島に徼擊し、虜の首を斬る二十余級、虜どもは、大艦を列ね、鐵鎖にて之を聯ね、弩を其の上に設らしめたれも我が兵近く事能はず、河野通有獨ひ前み、虜のうち出る矢左の股に中れども、通有くつせずすゝみて、檣を仆し、虜の艦に架けて之れに登り、虜將玉冠せるものを擒にしたり。安達次郎、大友藏人等の勇士つゞきてすゝみしかも、虜兵、遂に岸に上ぼる事能はずして、鷹島に據りたり。時宗、宇都宮貞綱をして、兵に將たらしめ、實政を援けしめぬ。未だ到らざるに、大風吹きおこり、雷なりひゞきて、虜艦敗壞す、機に乘じて、小貳等邀擊之をみなごろしになし、屍海を蔽ひ、海歩みて行くばかりなり。殘る三人を生かして歸らしめぬ。さしも勇にほこりし虜兵も、之に恐れて又我が邊を窺はず、かやうに日の本は他におとらぬ國なるを、いつまで草のいつまでもれとしめ給ふなかれ、恥かしめ給なかれ

張合（七）

白魚女史

よろこぞせんものとて云ひし人の言の葉をも反古とし、側隠の愛をも、うれしき情と聞かざる少女心ながら、文代は忍び難く、まして、戀しき人と、又、ちぎる能はざる言、思ひきりても〳〵、みれんの涙わきかへり、わきかへりて、つゞけん言葉はなく、よゝと泣きしづみぬ。叔父は、その背をぞ、和らかく、撫でつゝ、そのやうな事、それは、近きどちの結婚はわろしとは云へど、わろきもよきも人にこそよれ。そちと浪男との如きかしこきどちは、又、格別。とかく、女子は、神經のつよきもの、さやうの事は思はで、いざ仕度せよ、今日は、皆と花見につれだたんと、何處までもやさしき言の葉、辭むは、よく〳〵忍びがたく、殊に、その言の葉に從はまほしきは山々なれど、一旦思ひたちし事、かへすはみれん、みれんと思へぞ、文代は重ねて辭みぬ。とにかく花見にと云はるゝも亦、辭みぬ。さらぞ、そこらを散歩せんとなほ慰めらるゝも從はず。あはれ、思へぞ、生みしにも、つくられしにもなきみづから、殊に姪とは云へど、父が、生前ちかしくゆきかひせしにもなく、尋ねられずぞ、叔父とも知らであるべきを、義理にあらず。利にあらず。信の信の情より、かくまで、いたはり云ふ叔父が、深きいつくしみ、叔母があつきなさけ、言葉には云はざれど、心にも身にもしみ〳〵おぼゆるを、我にもあらず、仇にてかへす心地、叔父も叔母も嘸や、此の家をいとふ恩しらず。義理しらず。情しらず。心はこりたるものと、今こそは、あひそも、こそもつきはておはしけめと思へぞ、自から顔合はするもものうく、けしからねぞ〳〵、はりのむしろ、敵の陣にある心地とはかゝるを云ふならんなどなほさま〳〵の思ひに閉ぢられて、絶えて、外に出でねばものも食はず、今は玉の緒もをしからじ、一層、此のまゝに絶えはてね。死ね。なが

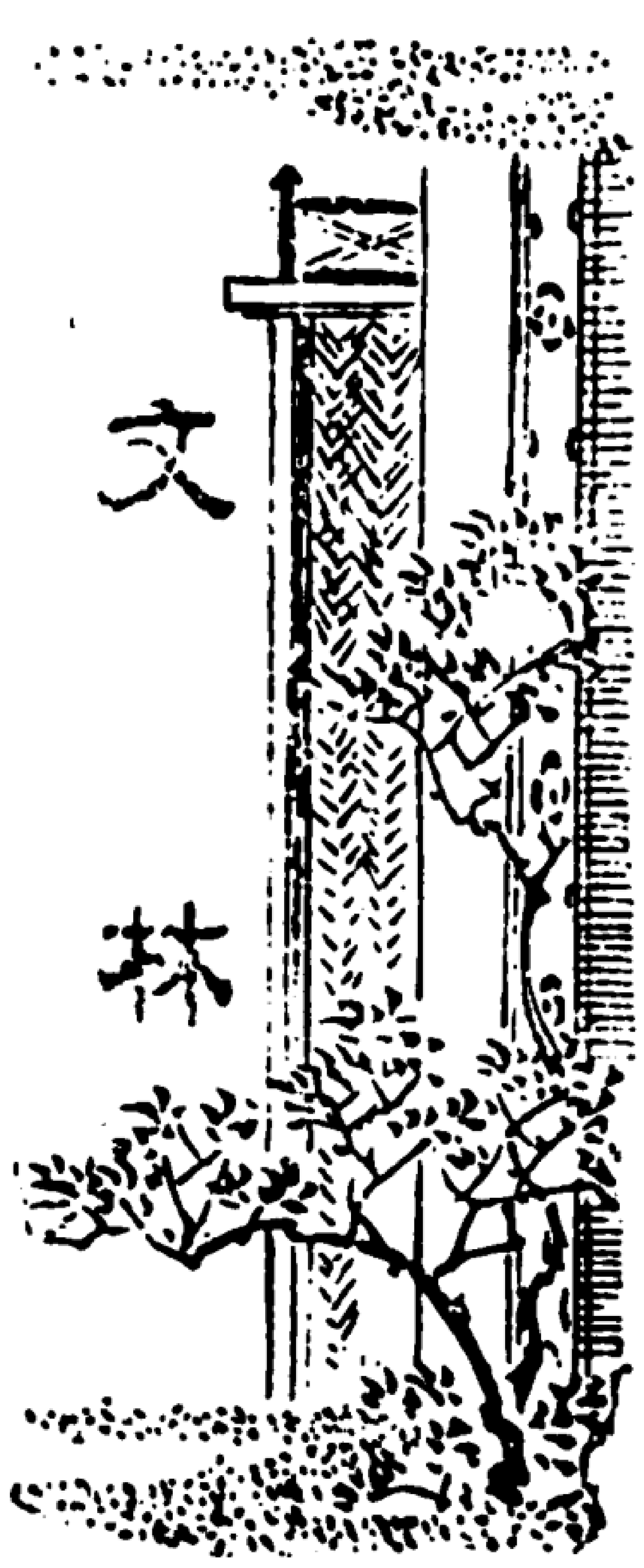
らへしとてまつ事もなし。死ね。死ね。死ねと沈み入れど、身も、いとゞほそり行くを、叔父叔母は、一方ならぬ心づかひ、しひて醫師をすゝむれど、病根は文代みづから知る所、心さへはれなど、他に變る所はあらずとの事に、叔父も、散歩をうながせば、叔母もつれ出さんとす、さては白銀にかへて、聲よき鳥をあがなひ、文代が窓にかけもしつ、黄金にかへて、色よき花をもとめて、文代が、机にすゑつすれど、なさけ、いよいよこまやかなれど、ますます くるしく、草木の色を見てもたゞ袖をぬらし、鳥の音をきゝても、ともに泣く、とてもかくても文代が心なぐさむる事叶はず、もしは、故郷にゆかば、花の友垣に誘はれて、しばしは、心なぐさむる事もやとて、叔父の思ひ立てど、文代も、之のみは辭まず、すゝみて旅荷をつくりぬ。

故郷のなつかしさに、しばらくを此處にとのぞめば、叔父も氣遣ひながら、元の傅女によくよく心づくべきよし、くれぐれ聞えて、身は、都の用に迎へられたり。

此處にも、思ひはすまず、傅女もなぐさむれど、友もさつれど、たゞ、うるさく、ひとり佛の間に入りて、日をかきくらし、くらしては出で、墓前をとひ、かへりては、また、夜を佛の前になく、食も絶えだえ、八千八聲泣きつくして身は、糸の如し。都には、文代の事案じわづらひて日に二度も、かりのたよりあり、なほ案じて婢をさへおこしぬ。追つかけて叔母も來りぬ。文代、よくよく思ひかへす時や來りけん、あはれ、あやまちたり。あやまちたり。父がいまはに、たとへ、しばしくるしき事あるとも、死ぬなどの心をおこすなと仰せられしを、いくちなくも、我は、死のやすきを取らんとはなしたり。父樣の子にはづかし、浪男樣、君は一に思ふ人を、はやく迎へ給へ、なれど、妾は父のゆるせし夫、君故にならひし戀、一生心に思ひ、一生心にあこがれ侍りぬ。父樣、もう、死ぬなどのひきやうの心はおこし侍らじ、くるしき時も、父樣は呼び侍らじ、今より、偏に世の中の一の人とならん事をのぞ



まんのみ、父様、父様の子、望み叶へて、必、拙き身が耻そ丶ぎまつらん。御らんあれとばかりきつと涙を拂ひ、食もす丶めど、たはぶれもなす、叔母も、はじめて安心すれど、叔父もよろこび、ひまを盗みて須磨に來り、一夜を月にたのしみ、さては、己れの戀ひ女房、何處までも、白川家の嫁とする、のう文代、西洋の文明國にすら、從弟どちの婚禮めづらしくはなく、其の子又、あしきはまれなり。何も云はで、己の心にまかせよとあるを、流石に此の事云はれては、流石にはづかしく、くるしきを、忍びて、何處までも辭めば、さらぞ是非なし、叔父が、親となりて、他へとづがせんとて、彼處此處とよきを撰びて語れど、文代は、浪男をおきて、他へとつぐ心は更になく、一生獨身、獨身と心にとなへて、口には出さず。よきほどに云ひはづし、はては須磨にかへりて、少く習ふものあり。ゆるさせ給へとあるに、さらぞ、とつがするにも、まだ早ければ、修業するもよけれど、何ぞ、美術ぞと、さらぞ、都こそ、よき師も多けれ。此の家にてせよとあるを、須磨は月もよく、浪もよし、心もすみ、身もすみ、殊に知りたる師もあり、二三年は故郷にてせまほしと强ひて乞ふに、叔父も之をゆるし、須磨へかへれば叔父は家財の半を文代が修業料に、又、結婚料にとて月毎のあつき手當、婢女までをつきそはしむるに、叔父の財、つかふは、くるしく、父の心にも背くべしと思へど、業は貧しからでは、上達せぬものと聞く、願はくぞ、心遣を感じ、給へとて、叔父より送る財寶は手をつけず、婢女さへも歸へして、たゞ一心。



梅雨　　東久世通禧

池の面のはすのうきはも波こえて
にごりぞ増るさみだれのころ

古宅梅雨　佐々木高行

やねもりて露けかりけり賤がすむ
山のふるやのさみだれのころ

戸外水鷄　竹屋光昭

短夜もまだ志らまねとかどたゝく
くひなの聲に戸をわけにけり

海邊梅雨　西三條實義

もしほやく烟もたえぬさみだれに
あまのとまやも朽やしぬらん

芍藥　宮地嚴夫

色も香もいとなつかしきこの花を
えびす草とはなど名づけけん

藤原藤房卿　北郷久政

雲の上に匂ひのこしてちりにけり
いはくら山のふちなみのはな

遠時鳥　阪正臣

靜かなる我やどなればほとゝぎす
とふ音も聞はもらさゞりけり

雨後新樹　植松有經

雨はれて空もみどりになりにけり
わか葉の色のまさるのみかは

船納涼　鎌田正夫

行まゝに舟をながしてすみ田がは
さすかたもなくすゞむけふ哉

行路梅雨　岩崎勝從

志げりあふ森の下みちひとたえて
晝なほくらしさみだれのころ

螢の飛ぶをみて　大畑弘國

澤水にきえぬ螢のかげみれど
いかにくるしき思ひなるらむ

大磯にてよめる中に　仝

こよろぎの磯菜つむ子に立ましり
われもひろはんうさわすれがひ

花菖蒲　諏訪忠元

梅雨のふるつれ〲をなぐさめて
　みたびまでさく花あやめ哉

内地雑居　足立正枝

あだし草よし茂るとも蘆原の
　わが蹈むみちは忘れざらなん

道　島宮太郎

蟹かゆく横にはしらで人はたゞ
　直なる道をふむべかりけり

名所花　赤松景福

吉野川花の木下ゆく舟は
　雪にさをさす心ちこそすれ

琴　近衛貞子

たゞひとり月見てわかす折しもあれ
　妙なることの音もきこゆなり

深夜梅雨　前田朗子

更る夜の夢おどろかしさわがしく
　また降しきるさみだれのあめ

橋梅雨　柳原愛子

さみだれに門の板はしながされて
　世のなか遠しかはつらのさと

孟母　小池道子

をしへ草つまんところを定めけり
　書のはやしをとなりにはして

深山瀧　岩崎寧子

山をこえ谷をわたりているまゝに
　なもしら瀧のもとにきに鳬

牧梅雨　大谷章子

梅雨にぬるゝをうしのいとふらん
　まき場に通ふあしもすゝまず

以利沙泊　大谷籌子

たぐひなき香にこそ匂へ西の海の
　島ねにさけるひめゆりのはな

藤原百川公　原田蒼生子

百川のみつのちからのなかりせば

やまへの花はにほはざらまし

螢入疎簾　　小川直子

文机のうへをてらしてまぢらなる　をすの間くゝりとふほたる哉

朝梅雨　　河村重子

あさ鏡むかふこゝろもくもるかと　思はむかりのさみだれのあめ

夜郭公　　長澤いゑ子

夕つくよをぐらの山にほとゝぎす　おほつがなくもなきわたるかな

曉山　　土岐幾子

すむ月は枕のやまにきえゆきて　ひかりをのこすわかばしの影

蟬　　東玉子

夕立のはれゆくまつのしたのはに　なく音もすゞし蟬のもろ聲

雜報



秋景山水の圖　　東京　藤島耕山

●東宮殿下の行啓　東宮殿下には、豫ねて仰出だされし如く、去にし六月廿日午前九時四十分御出門せさせ給ひ、黒田武官長の陪乘、中山大夫高辻侍從長以下の供奉には、新橋停車場に着御せさせ給ひ、同所にて、有栖川、小松各宮殿下、及び、各大臣、樞密顧問官等に、拜謁を賜ひ、十時十分の列車にて御出發、沼津御用邸に行啓遊ばされたり。新橋まで奉送せしは、凡百餘名の人々なり。そのをり、殿下には、陸軍少佐の御略服を召させられ、菊花大綬章を佩用せさせ給へりき。

●宮内省御買上品　上野公園に開かれたる日本畫會第二回展覽會に、宮内省より、岡澤侍從武官長を差遣され、左の出品を買上られたり。

此等は、やがて、かしこきわたりの御目にも觸るゝなるべし。出品者の名譽、此の上の事やはある。

●孝行車　いとむさくろしき破車に如何はしげなる幌を掛けて、路大路を挽歩く十四五歳の少年あり。車の上には、八十路許りの翁の、痩耄ぼひ、顋の周圍に白金の如き髯を蓄へたるが、しとねの上にすわりて、輓かるゝ儘にゆられつゝ眠りたり。そのさま、さまで賤しき者とも見えず、不仕合にて、家産を失ひ、親族に離れ只、此一人の少年を、杖柱と頼みて、老の命を繋ぐものとは、誰が推量にも知られけり。さて、この少年は、みすぼらしげなる姿をこそしたれ。門に立ちて、物乞ふ事もせず、又、人の袂に縋りもせず、只、町々の賑ぎはひを、車の内なる老人に見せ、其の喜べる顔を見て己も共に打喜び、次の町へ挽去るを例とせり。かくて、久しく、市中を徘徊し居たりしに、頃日は、江戸橋際なる郵船會社倉庫の傍にのみありて、其邊の露店の用を足し、又は、問屋の店前の掃除などせり。さて、金錢食物等の惠を受くる時は、先づ、車の内なる老人に渡し、其の惠み主の名所を語り、金錢は、一文も私せず、食物は、老人の食し終るを待ちて、己は、殘れるを食し孝養至らぬ隈もなければ、其近邊の人々は、孝行車と唱へ、心をつけて、憐をかくるもの

も多しとか。此の老人は、越前國三國町字眞砂町に生れたる阪井正之助といふ者にて、少年は、同人の孫元之助といふものなり。正之助は、若かりし時大阪に出で、醬油問屋の手代となり、八年勤續の後、主人の助力を得て、家をかまへ、妻をむかへて、子を設け、遂に、男女二人の孫をも持つに至れり。さるに、其の子の妻の身持わしかりしより、不幸なること出できて、子にもわかれ、妻さへ病死しけれど、年老いたる身に、さて、二人の孫を抱へて、路頭に迷ふ境界に落ち果てぬ。詮方もなければ、孫女をば、他家に、養女に遣し、當時七歳なりしを引連れて、去にし廿四年の秋の末、心細くも、大阪を離れて、此の東京へ出できたり。斯くて、安宿の一間を借受け、壯年の頃覺えたる生花、茶の湯の指南をし、其の間には、辻賣卜に出で、幽に、其の日を送り居りしに、程なく、中風症に罹りて、腰立たずなり、生計の道を立る事叶はねど、僅に、門弟等の惠によりて、右の車を調じ、この有様とはなり果てしなりけり。さて、かゝる中にも、老人は、孫を、人らしく育てんものをと、指先をもて、文字を敎へ、又、經書など説聞かする事もありといふ。左れば、警官も、此の老人の不運を憐み、また、少年の孝養に感じ、毎夜、橋際に、車を置きて、二人の、此の内に眠れるを、强には咎めずとぞ聞く。

●獨逸皇弟殿下前度の來遊　今回、來遊せられたる獨逸皇弟ハインリヒ親王殿下は、我が國へは、今回にて二度目なり、初めのは、今を去ること十六年前、殿下二十二歳の御時にて、血氣盛に在らせられ、暫も無事に、時を過し玉ふ事なかりき。大阪に滯留せられける頃、處々の遊覽にも倦み玉ひて、徒然の餘、一二の士官を隨へ、近郊の遊獵に出でられけるに、其の場所には、不幸にして、銃獵禁止の制札あり。但し、我が國の文字にて記したるのみなれど、殿下も、隨員も、氣つかずして、思のまゝに、遊獵せられしを、偶々、警察官通り懸りて、遠慮もなく、大阪警察署に引致しま

ゐらせたり。警察署は、當時の大阪府知事渡邉昇氏に、其の處分法を稟議せしに、知事も、親王殿下なるを知らざりければ、直に拘留すべき旨を命令せり。さて、後に至り、初めて、外國貴賓なるを知り、拘留を宥免したりけり。其の後、我が國文武官の、獨逸國に遊び、殿下に拜謁するもの有る毎に、殿下は、笑ひて、此の事を談され、予は、日本の監獄に經驗あり。君等は、日本人なれども、此の經驗はなかるべし。此の點にては、予は、反りて、君等に勝れりなど戯れさせらるとぞ。

●ナイチンゲールの生誕日(赤十字社創立者)　世界に於ける赤十字事業の仁慈無邊なるを想ふ者、誰かはナイチンゲールの名を記せざるべき。今世紀に於ける女傑の偉功を偲ぶもの、誰かは、ナイチンゲールに、指を屈せざるべき、而して、此の偉勳ある婦人が、尚存在して、强健なりと聞きては、誰かは、之を祝賀せざるべき。去にし五月十五日は、其の七十九回の生誕日に當りければ、英國の士女は、盛に、之を祝したりと云ふ。今、其の略歴と、現狀とを、左に録せん。

フローレンス、ナイチンゲールは、千八百廿一年五月十五日に生まれ、英國女皇より少きこと、二年なり。父は、ウヰーリヤム、ショアー、ナイチンゲールと呼び、ハムプシアヤーのエムブレイ公園、或はテルビーシアヤーのリーハーストに住みけり。伊太利に旅行せる中、一女を擧げたれど、其の都府の名を取りて、フローレンスと名けたり。ナイチンゲール嬢、即是なり。嬢の兩親は、素より、富有の身なりければ、嬢には、十分に、敎育を授けぬ。嬢も、天性、學問好なれど發達も、極めて良好にて、秀名は、各種の學校に在りて、嘖々たりき。或時、嬢は、家の小作人中に、貧困に迫れる病人あるを見て、地主娘たるにもかゝはらず、義心を以て看護し、是より、看病學の必要なるを自認し、忽、醫學に、身を委ぬることに決心せり。乃先カイゼルスウエルスの醫學校に入り、後、巴里に赴きて、實地に習練し、業成りて、英國に還り、看護婦の業を開きたり。是れ、實に、千八百五十一年の事にして、嬢が三十一歳の時なりき。

其の時、クリミヤ戰爭、將に開けんとして、歐洲の風雲、最も凄じく、忽にして、英國は、軍艦を派し、軍兵を送り、何時しか、戰端は開かれぬ。かくて、

戰塲に臨める兵士の海遇虐待は、端なく、歐洲人士の耳朶をうち、心ある者をして、憂慮措くこと能はざらしめたり。即、クリミヤに赴ける兵士は、輸送船中に在りて、敵陣と相望める時は、既に、飢渇の苦を嘗め、上陸するときは、軍服も着くること能はず、靴も穿つこと能はずして進軍し、戰爭開けて後、英兵の慘死を遂ぐる者、總兵九萬七千八百六十名中に、戰死者二千七百五十五人、病死、餓死、合せて、一萬七千五百八十八人にて、總死亡は、全軍の二割二分に達し、此の外、英國との同盟軍土耳其佛蘭西兩軍の死亡兵は、遙に、此の上に出でたり。英國人士は、此の慘狀を耳にして、徒に酸鼻悲痛する間に、ナイチンゲールは、奮然として、身を挺し、時の陸軍大臣ハーバートシドニーに乞ひて、戰役に隨ひ、不幸の戰士を救護せんとしたるに、陸軍大臣も、容易く、其の乞を容れたれど、孃は、直に、クリミヤに向ひて進發し、之に後るゝこと六日にして、三十四隊の義勇看護婦隊は、君士垣丁堡に向け、倫敦を出發したり。孃の率うる三十四隊の女軍が、東歐の戰塲たるクリミヤの野戰病院に在りて、病苦に惱める幾萬の兵士を救護したることは、今更說くを須ゐざるべし。クリミヤ役終り英國に還り、名譽を、双肩に荷へども、敢て矜らず、直に、看護婦隊を解きて、一私人に復したり。千八百六十年の亞米利加南北戰爭にも、千八百七十年の普佛戰爭にも、野戰病院は、孃の意見を叩き、孃は、夫々注意したり。クリミヤ役後、孃は、赤十字の母と稱せられ、赤十字社といふ者組織せられ、野戰病院看護婦學等に關する著書も、多く出で、須臾にして、赤十字事業は、世界各地に擴張せられたり。其の後、ナイチンゲール孃は、富有に、其の日を送り、倫敦に、廣大なる家を構ふれども、常には、田舍を喜びて、其の妹なるヴアリー夫人と共に、バッキングハムシアヤーのクレイドンに住せり。其の齡、將に、八十に垂んとすれども、尙、筆を捨てずして、雜誌新聞に通信し、各國より、意見を叩き來るものには、返翰するを怠らず。軀幹、亦、壯健にして、壯年者も尙及ばざる程なりといふ。

●勿來の關の碑　此の程、奥の方に遊びたる人、其のかへさの土產にとて、勿來の關なる碑文のすりものを贈られたり。世には、知る人も多かめれど、尙、そのかみの事思ひ忍ばんくさはえにもとて、たもてなるは、こゝに揭ぐることゝはしつ。

吹風をなこその關と思へども

みちもせにつる山櫻かな

千載集に撰入られし此義家朝臣の金玉を石ふみに殘すついてに我蜂腰をも一首とねもころに乞をいなひかたくてなむ

文政五年三月十一日にしるす

正四位　下賀茂縣主季鷹

千萬の仇にむかへる武士も
花さそふ風はすべなかり鳧

とありて、うらなるは、

物族人而著人依物以名常奥境關稱勿來
山巡櫻
華弄春晴將軍義家討叛賊千里領兵兮東
征途過
此關暮春日落花飄風舞縱横將軍按轡詠
囫歌爾
來騷客訪迹多星霜臻今殆八百名存物換
少人過
素英洞月慨蹟泯俱謀錄石樹山陂事未及
成蚤卽
世季孫繼志更無佗建碑遂雕季鷹書但憾
錄詞記
事蹟需余背面誌顛末風流篤考耐嘉譽陳
迹從今
靡湮沒此石傳世詎有除正是人物相須著
永照無
窮不虛

嘉永辛亥歲仲春七十四翁筒井憲書

とあり。今、左に、うらなることばを、假名交り体にあらためて示すべし。

物は、人を俟ちて著れ、人は、物に依りて、以て、名あり。常與の境關を勿來と稱す。山逕の櫻華は春晴を弄す。將軍義家、叛賊を討じ、千里に、兵を領して、東征し、途に、此の關を過ぐ暮春の日。落花は、風に飄りて、縱橫に舞ふ。將軍、轡を按して、國歌を詠ず、爾來、騷客、迹を訪ふもの多し。星霜、今に臻りて、殆、八百。名は存し、物は換りて、人の過ぐること少し。泰英と洞月と、蹟の泯んことを慨き、倶に、石に錄して、山陂に樹てんことを謀り。事、未、成るに及ぐずして、蚤く、世に即く。李孫、志を繼きて、更に他なし。碑を建て、遂に、季鷹の書を雕る。但憾むらくは、詞を錄せる記事の跡なるを。余に、背面に、顚末を誌さんことを需む、風流、篤孝、嘉譽するに耐へたり。陳迹、今より湮沒することなく、此の石、世に傳りて、詎ぞ、除かるゝことと有らむ。正に、是、人と物と相須ちて著れ、永く、無窮に貽し、名處しからざらん。

嘉永辛亥歲仲春、七十四翁筒井憲 幷 書

●女子敎育講話　此の一篇は、去る五月廿八日、神田斯文學會にて、令德會の爲に、下田義天類主が、女子敎育といふことを稱せられたる折の手扣なり。その說、本誌が執る所の趣とかよへれど、今回、請ひ得て、こゝに載することゝしたり。

令德會は、本年本月の本日、地久節の佳節に際して、始めて、茲に、生れ出でたり。其の主趣と仕事とは、載せて、會則中に明なれど、今、更めて申し述ぶる必要もなかるべし。余は、其の主趣と仕事とを、賛成して、爰に參同したる一人なり。然るに、主唱者、及び、顧問の諸君より、何か一言、申述べよとの强ひての、御申し込を受けたり。これによりて、余が、此の會を賛成したる主趣を、聊、申述べむとして、參同、諸君の御煩ひをも顧みず、此の席へ登壇したり。抑、我が國にて、女子の敎育と云ふ事を、今日の如く、八釜敷く云ひ立つるやうになりたるは、皆々の知らるゝ通り、最、近年の出來事なり。歐米の文明と云ふことが、今日の如く、未、東漸せざりし時代には、餘り世人の口頭には登らざりし言語なりき。然らど、女子敎育と云ふ事は、歐米の文明輸入せざりし以前には、絕えてなかりし事にてありしかと云ふ

に、決して、然にはあらざるべし。御承知の通り、我が國ありてより以來、賢母、良妻とも云ふべき女傑の代々に輩出したる事實は、慥に、歴史の證明する所なり。此の數多き賢母良妻はいづれも教育を受けざりし人々なるべきか。決して左樣には云はれざるべし。また、學問技藝と云ふ事に就きても、醍醐村上の御時より、圓融花山の御代あたりまでに、世上にあらはれたる女流の事は、皆、諸君の熟知せらるる所なるべし。彼の紫式部の如き、赤染右衛門の如き、清少納言の如き、泉和式部の如き、これ等は、孰も教育を受けざりし人物なるべきか。決して、さうは云はれざるべし。然れど、女子教育といふ名目こそ、近世に唱導したれ。女子教育といふ事の事實は、ズツト古くより、慥かにありし事柄に相違あらざるべし。さて、古くより有りし事とすれど、その女子教育の事實といふものは如何なる況勢にてありしかと云ふ事は、我人の能く研究して置き度き事項ならずや。此の事に付きては、余は昨年來、女子教育の史料として、「乳母の文の衍譯といふものを書綴り、既に、之を公にしつゝあり。女子の友を御覽になる諸君は、定めて御覽せられし事なるべし。未、完結には到らざれ共、本年中にはおら〳〵書き盡す見込みなり。今日は、これを御話しする準備もなく、且時間もあらざれど、遺憾ながら、申し殘すべし。併、その大体を云はゞ、その女子教育の行はれる區域にこそ、廣狹はありたれ。その教育の程度といふ側より云ふ時は、蓋、今日より、遙に高尚に、且、其の社會にも、適切なる仕方なりきと云ふ事は、爰に斷言して誤らざる所なるべし。女子教育と云ふ名目こそ、近世の唱導なれ。その事實の上より云ふ時は、所謂、女子教育といふものは、今日より遙に高尚にて、且、實際に適切なるものがありしに相違なき事と思はれぬ。さて、今日云ふ所の女子教育は、此の事實より、發達し來りたるものなるべきか。諸君は夫如何に思意せらるゝか。凡そ物には秩序あり、段階ありて、而して后に、始めて成立といふ事實を見る事を得べし。此の秩序なく、段階なき出來事は之を偶然の出來事と云ふべし。此の偶然の出來事は、決して確實のものにはあらざるなり。萬世不變に持續せらるべきものにはあらざるなり。今日、世上に謂ふ所の女子教育には、口惜いかな、不幸にも、此の秩序を有せず。此の段階と云ふものを有せざるなり。如何となれば、從來の女子教育が發達したるものにあらざればなり。即、從來の女子教育を土臺楷梯として起りたる教育にあらざればなり。

近來、唱導する女子教育と云ふ事は、歐米の學理と

共に輸入したる所のものである。即、歐米の文明と云ふものが伴ひ來つる迹ッねである。故に、動もすると國家の組織と牴觸し、風俗を毀ち、慣習を破り、平地に風波を立てむとするが如き傾を呈するに至る。皆々も、定めて記臆せらるゝ事なるべし。一時、男女同權と云ふことの云ひはやされたる時代を、其の當時は、如何なる風にてありしか。同權に伴ひて、女子の獨立といふ事が、大に世上に歡迎せられしにあらずや。男女合體して、世に立つべき事か、天然の道理に叶ふか叶はさるかと云ふ議論は、先さし置きても、我か國の如き、風俗の國柄にて、女は、女で獨立し、男は、男で獨立して能一家和合と云ふ事が謀られ得べきか。男子の鴻業は、女子の内助を待ちて始めて、立つことを得べく。女子の働は、男子の手によりて、后に顯はるゝものなり。女子も、男子の手を放れては、其の働きを顯はす事が少く、男子も、女子の助を放れては、その功を立つることの少きは、皆さんの、平生經驗せらるゝ所なり。之を、今一般立入りて、吟味すれば、男女合體の働を營むと云ふことは、男女の性質、及、男女の身體が、天然に享け得たる所の自然の特性なり。女子獨立と云ふ事は、其の根底が、既に間違つたる事柄なり。この間違つたる理窟か、世上に歡迎せられたるによりて、女子の騎馬も流行し、女子の政論も流行し、あるひは、束髪腕まくりの流行し、あるひは、舞踏夜會か流行したりしなり。あの姿にて、今日まで進行せしならむ、今頃は、女子の壯士も勃興してありしなるべし。女子の鉄炮擔も組織せられてありしなるべし。女子の擊劍家、女子の相撲取、女子の車力、女子の爲の者等も、世上に整列せられてありしなるべし。

併、幸に、此の女子教育に秩序がなく、段階かなかりし故に、忽に瓦解土崩して、世間に見捨てらるゝに至りぬ。是、誠に、我か國、將來の女子社會に取りて、一大幸福なりしなり。かくの如き、女子教育は、最早、過去の夢と過去りぬ。再び世上に顧るものも有らざるべし。然りと雖とも、近頃、彼の女大學と云ふものを評して、女子の三從と云ふことに、大層なる理屈を付け、『氣に喰はぬ』とか『肝癪に障る』とか云ひ散らされたる大先生が有ると傳聞したる事あり。例の小股をすくひ、言葉尻をとらむには、或は、左樣なる理屈も有ることとなるべし。併、我か國、往古よりの仕來りは、家長權を尊むと云ふ事が、生計の重なる組立となりて居ると云ふことに御氣が付かれさりしより、かゝる事をも取違へるに至りしなるべし。國にありては、皇室か、權利の源となり、

家にありては、家長、權利の本原となる。これ、わが帝國の國体なり。此の國体より立てたる一家を齊ふる教にて、決して、男女の輕重を論したる、三從にはあらざるなり。此の會に臨まるゝ諸君は、能く、此等の分別を承知の方々なるべしと、信ずれども、廣き世間には、また、倘様の根底なき議論に瞞着せらるゝ者も、必、なしとは申し難し。かゝる時節に、此の令德會の起りし故に、余は、兩手を擧げて、此の會を贊成したりとは、また如何なる譯ぞといふに、此の會は、その名によりて、余か、希望する主義を執らるゝこと明なればなり。聞く、此の令德の字は、平田篤胤翁の童蒙入學門に、『和睦の色恒欲レ看レ之。故余常祈二宮比神之令德一、汝等從レ之歟。溫良恭儉讓之風亦可レ樂レ之也と云ふ本文あり、此の宮比の神の令德より起りし名義の由に聞きたれは、即、我が國從來の女子教育の發達したるもの、所謂秩序あり、段階ある所の女子教育と云ふことを目當目的として起りたる會なる事、明なればなり。但、其の足らさる所を、廣く海外に求めて、此の道の、完全なる發達を謀るべきは、勿論の事なれども、先、その根底を、茲に取りし所、是、余か最贊同する所以なり。余か、此の令德會を贊成したる主意は、大方、かくの如し。否、余か、平生、女子教育と云ふ事に對する意見は、此のごとし。若諸君の御意見と牴觸する所もあらば、謹みて、其の教を乞ふべし。

● 女子服裝　此度、近藤玄默主より、風俗改良の内女子服裝と題して、色々論はれたる一編を寄せられたり。世には、諸の意見もある事なれば、此にかゝげて、人々の參考にすべし。

文化、日々進み、交際、月に密なるの時に當りては、百事を改良して、交通扞格なからしむるは、今日の急務なり。我日本は、歐米各國と、肩を並ふる程度に至らんとする、固、未開の夷蠻と、類を同ふする國に非らざるは、誰も許す所なり。然とも、文化の未だ、普及せざるや、時ありて夷蠻の態に近ふして、自ら知らざる者あり。此の如きは、相互に、注意研究し、彌進て、文明の域内に入るを謀らさるべからず。余、曩に、男子斷袖の説を述て、之を、世に公にしたり、今回は、女子服裝の改良を述んと欲す。是に先達て、各國女子の風俗を述べざるを得す。先、歐米の女子は、誰も知る如く、上衣は窄り、窄袖にして、下裳は、袴を着たり。各國、聊、裁制の異ありと雖。之を歐米、普通の服裝と爲す。亞細亞洲の内、先、接近せる支那朝鮮を擧て、之を徴せしに、支那

の女子は、上衣は、稍、廣き窄袖にして、下裳は、袴を着たり。朝鮮の女子は、上衣は、窄袖にして、下裳は、襞を施したる大幅棉布を、前後より掩ひ、兩側にて、之を重ね、是を『ツルマキ』と稱す。全く、袴と異なることなし。此等に就て、參考する時は、女子は袴を穿つは、自然、其の天性に適ひたる、止むべからざるの姿裝にして、何れの國にも、同軌に出る者の如し。(熱帶裸體の夷蠻國は加はらず)我國にも、袴は神代より用ひらるゝ者にして、男女共、之を用ひたり。其本は、褌より出てゝ、腐はかまの謂なり。伊弉諾神の棄て給ふ褌を、大またの神、又、袴をひきりの神と云事など、古書に見へたり。今は女官の外、人民、一般袴を着る者なし。近來學校女生徒か、袴を着ることあれども、之は一時禮式的に過ぎず。我國、今日の風習、男子は、其足を結束せすして、返て、女子が着くへき袴を穿ち、而して、女子は、濶裾散漫として、更に裳を用ひず、是、男女、反對の姿裝とも謂つべきか、而して、女子たる者、此、散漫放縱なる服を被り。行歩の際、其脛を露はし、疾風に遇へど、其股を露はすも、恬として、恥るを知らず、外國人は、是を見て、猶、蠻風を脱せずと爲すも、更に改良の念を生ぜず。是、他の故に非らず。習慣の致す所なり。總て習慣は、人の第二の性と爲る者なれど、之に安じて、毫も恥る所なく、改る事を知らざるは、古今の通弊にして、識者の歎ずる所なり。我日本人も、今日迄は、先、此姿にて、不完全のまゝ過ぎ來りたるも、已に文化の域に達し、歐米人も、亞細亞人も、比隣混居の秋に至りては、斷然、其風習を改良して、時勢に適するの態度を執らざるを得ず。(袴の料は、棉布絹帛、各、其度に適し、色も、各、其年齡に從ひ、穩なる者にして可なり)而して、其次に改正すべきは帶なり。女子の大幅帶は、世界萬國、其比を見ざる所なれども、年を追て增長し、今は、其極點に達したり。素より、かゝる大幅帶は、古昔は、絕て無き所なり。此も、大に反省して、改良を加へざるべからず。且、前に陳する如く、一般に女子が、袴を着くるの日に當ては、帶は、袴に蔽はれて、錦襴緞子も、更に、其美を呈する所なし。無用の長物に歸せんのみ。故に、帶幅は男帶の如く、三四寸にして足れり。近世、女子が、帶に美麗を競ふや、其弊實に甚し、帶の價、衣服の三倍、或は五倍に至る者あり。若し、袴を着くるの日に於ては、帶は美麗を要せず、衣服は、長きを要せず、而して、返て優美にして、高尚なる所あり。凡、女子は裝飾を以て成立所以の者なれど、其流弊も、亦少なからず。今回は、袴及び帶の事に止り、餘は第三回に論述せ

んとす。

●矯風勤儉　左に載せたるは、宮城縣高岡亘理郡長の首唱にて、郡内各町村に於ける舊來の弊習を矯め、勤儉の風を勵まさんとての申合にて、郡内有志者を會同して勸誘せしに、頗、好果を奏しつゝありと云ふ。まことに、よき企といふべし。

一年始は最寄の學校又は神社等大字毎に便宜の場所に會合し各自互に祝意を表するに止め各家の回禮を廢すること

但親戚恩人師匠等に對する祝賀は此限りに非ず

一年始年蔵暮及ひ盂蘭盆に際し相互の間に於て物品贈答等其虚禮に屬するものは力めて之を廢すること

一村社の例祭を毎年一回とし神靈に對して應分の神饌を供へ以て尊崇の實を盡し自家の飯食を節すること

一佛事弔祭等には務めて虚禮を避け質素誠實を旨とし來客には一切酒を饗せざること

一婚儀は力めて嚴正質素を旨とし虚飾を避け祝宴は連日に及はざること

一葬儀は力めて虚飾を避けて誠意追悼を旨とし死者をして恨みなからしめ會葬者に酒食を饗する等は一切之を廢止すること

一葬送途中にて金錢などを撒き散す等の事柄は之を廢すること

一從來觀音講又は青麻講天神講等と唱ふる婦人の集會には酒食を用ゐざること

一家屋其他普請等の節依頼なき者は參集せざること

但雇入夫に飯を給するは隨意とす

一各家日用の物品にして節略し得べきものは凡左の如し

(絹布)(毛織物)(古書畫)(古器物)(玩弄物)(装飾)(下駄傘)

(帽子)(酒肴)(砂糖)(烟草)(菓子の類)

一毎町村毎區の契約會は成べく質素儉約を旨とし其開會度數は一ヶ年二回以下とすること

一共有の山林原野等は漸次開墾又は植林等の方法を設くること

一從來物見遊山の風習を改め春秋二回共同遊樂の方法を設くること

一前諸項の外毎町村毎區の慣行にして實益なき會合を廢し無益の出費を省き專ら勤儉儲蓄の美風を涵養すること

一前諸項に違背するものあるときは監督者の會議に於て其違約を責るの制裁を設くること

一陰暦正月十四日の夜少女兒集ひて人の戸口に立ち貰ひ歩く舊慣あり甚た宜しからざれは之を廢止すること

一同夜鳥追とて大聲にて騒しく夜を徹し安眠を妨くる舊慣あり是も亦宜しき習はしにあらされば之を廢止すること

一同正月十五日墨祝なるものは今の世に於て頗る醜き事なれは是れに類する水祝泥祝などゝ共に之を禁止すること

一新婚者の往來の途中にて双方より出會ふときは互に酒などを饗する舊慣あり自今は之を廢止すること

一他人を稱呼するに野卑なる言にあらされは無殿のまゝなるもの往

々之れあり自今は互に相當の敬語を用ゐること

一路傍の門戸障壁等に樂書をなすの習慣尚未た止まざれは家族相互の躾方に於ても自今一層注意すること

一子守歌は稚兒の感應上一般の風儀上大に留意すべきものこれは父母兄姉たるもの自今注意すべき事

一兒童が常に賭博に類する遊戯をなせるは往々見る所なり是れは將來不良の習慣を養ふの根元ともなるものなれば家庭に於ても警戒禁止すへきこと

一夏季に於て半備袖の短衣と腰卷のみにて大道を緩歩せる女子あり實に醜き習風なれは自今は着衣に注意せしむること

●救急療法　本社に寄送せられたる愛姫教育雜誌中に、醫學得業士某氏が、ある學校の爲にものせる救急療法をのせたり。適切の事と思はるれば、左に掲げつ。

○外傷

擦過創　石炭酸、濕布にて拭ひ、絆創膏を貼用す。切創　不潔物にて切りし際は、口にて吸収し、石炭酸水にて洗滌繃帶す。但し、小切創は、擦過創に同じ。大切創にて、出血甚しきは、先づ、止血法を施すべし。

打撲　直に、石炭酸濕布を施し置くべし。打撲甚しき爲めに卒倒することあり。其所置、失神の條下にあり。

墜落　顛倒にて骨折を生ずることあり。故に、其摸樣にて、下肢なれば決して直立せしむべからず。其局部に、屈撓せざる木片等を當て、繃帶にて卷くべし。上肢なれば、使用、其他動かす事を禁じ前法を施す。

關節の脱臼あるときは、異常の位置を呈する故に、舊位に、無理(暴力的)に復す可からず

關節捻挫　此時も、其局部を動すを禁じ、石炭酸濕布を施すべし。

咬創　狂犬、蛇等に咬まれし創は、直に、口にて吸ひ、其創の上部を、至急に、繃帶、又は、手拭にて結搾すべし。蜂ぶと等ざゝれたる時ば口にて吸ひ、あんもにあ水にて拭ふべし。

○異物

耳鼻　に異物あるときは、可及的、觸れずして、醫に送るべし。(設例へ容易に取り得る樣なりとも)

目　砂粒、塵埃、煙煤の入るとき、目を擦るを禁じ、眼瞼を開き、硼酸水にて洗滌すべし。又は、自ら瞬きをなさしむれば、涙液泌を生じ、内背部に排泄せらる。

眼に、石灰の入るときは、油を入るべし。

眼の火傷は、直に、醫に送るべし。

食道胃　誤て、貨幣、其他、硬固、不溶解物質を嚥下せしときは、直に、餅を、二三ヶ頓服せしむべし。誤て、流動性物質設令ばいんき、石炭酸水、不潔水、尿、等を嚥下せしときは、直に、多くの水を、無理に飲ましめ、咽頭に、指を入れ、嘔吐せしめ、二三回反復すべし。

指　に、とげ、又は針を刺入せしときは、毛抜にて、試み、さて、能はざれば、石炭酸濕布を施し、醫に送るべし。

○火傷

其部を清潔にし、石炭酸、おれしふ油を塗り、醫に送るべし。第二度の

火傷にて、水泡あれば、決して破る可らず、醫に送るべし。

○卒倒　失神

墜落、驚駭、貧血者の發作等にて、氣絶したるときは、頭部を下方に低くし、新鮮の空氣に觸れしめ、場合によりて、酒類を與ふべし。

頭痛發作の爲に生ずる、失神は、近傍、有害物を除き、仰臥せしめ、毛布にて覆ふときは、放置して、舊に復す。

○衂　血

此は、脫脂綿にて栓塞すべし。

○咯　血

呼吸器病ありて、急に、咯血せるものは、胸部を冷却し、安靜にし動す可らず。

○日　射

炎天の際、暴露され、又は、甚しき運動のとき。卒倒を起すことあり。其ときには、冷處に臥せしめ、頭部を冷すべし。失神の狀に陷れば、酒類を與ふべし。又、日射のときは、渴、甚しければ、水を與ふべし。

○人工呼吸法

一人にて、假死態にあるものを仰臥せしめ、背部に衣服を巻きて、枕とし、上肢を、頭上に舉上し、凡そ、二秒時停止し、後兩上肢を胸部に搦へ、肱を屈して、胸部に壓迫し、二秒時間停止し、斯く反覆す。

又、一法には、仰臥せる假死体に相對して、騎馬狀をなし、假死体の上肢は、背部に置き、口より提出せる舌は、右口角の部に、牛秋の類にて固定し、又は、一人、下顎の隅角部を、手にて支へ、下顎を前方に挺出せしめ、胸廓を壓迫し、斯く反覆す。

○止　血

噴出するとき、其創の部位により異るも、其上部を手拭等にて堅く絞擠すべし。上肢、下肢、頭部等の血管行路を知り、其根部を壓迫すべし。

小出血は、局部壓迫して、暫時を經れば、大底止血す。且つ、其部を擡舉し高すべし、（上肢下肢の末端出血の時）

○齒痛　頭痛

局部を温め、痛減少する後、醫の治療を乞ふべし。

頭痛長きは、新鮮の空氣に觸れしむべし。

嘔氣を催すものも、亦、新鮮の空氣に當て、深呼吸をなさしむべし。

○器　械

一いろりがしころ（甲）又は水銃（乙）　一箇

一護謨、硝子のもの　耳洗用圓錐狀のもの　各一箇

一鉢（平鉢）　一箇

一石炭油明燈　一箇

一鋏、毛拔　耳搔き　各一箇

一ぴんせつと（解剖用）　一箇

繃帶材料

一英製絆帶　一卷

一晒木綿巾四乃至五裂き長半反　巾八ツ裂き長四分一反三角巾　二反程

一脱脂がしぜ五寸乃至一尺の長に切り二%の石炭酸水に貯へ置く　一二反
一晒綿花　一二包
亜麻仁油紙　五六枚
一針糸がしせ　一反
一太き護謨管　三四尺

〇薬　品

一二%乃至五%石炭酸水又は五千倍昇汞水
一三%硼酸水
一生石灰
一百倍石炭酸おれしふ油
一安母尼亜水
一葡萄酒(甲斐産)

其他薬品を入るゝ壜七八個を要す。又、めーさーぐらす百瓦容積のもの一個を要す。

●牛乳飲用の注意　近時、牛乳販賣取締法の勵行は、牛乳販賣業者に、一大刺激を與へて、品質の精選を努めしむるに至りたり。これ、衛生上喜ぶべき現象なり。而して、需用者も、亦、飲用に際し、充分に、牛乳の精擇を要すべきは勿論なり、元來牛乳の精分は、乳牛の種類により、格段の相違あるものにて、例へば、乳牛の性分中、脂肪の、最多きは、日本種の牛乳にして、次を、せルシイ種とす。而して、其の最も少なきは、彼のホルスタイン種、(東宮殿下の御用乳にして、岩崎家も、亦、専、此の種を飼養せり。)にて、脂肪層は、百分中、最多きものにて、僅二、九を越ゆるものなし。斯の如き次第なれど、飲用者は、第一に、如何なる性分の多量なるものが、自身の營養に適するかを研究し、然る後、其の適合の種類を需むべきなり。既に其の適合の如何を知れる上は、次に、乳質の精良なりや否なを研究すべし。抑も、搾取たる乳汁は、搾取後、直に、冷却器に容れて、之を冷却し、其の後、冷水に浸し置けば、昨今の如き、氣候不順にして、飲食物の、最も腐敗し易き際にも、二十四時間は、強酸性の反應を起すことなく、能く、精良を保持すべきなり。然るに、配達後、忽に、腐敗の徴を呈するものあるは、是販賣者が、適當の豫防方法、即、彼等の責務を全うせざるに因るなり。尤も、之は、飲用

者の注意如何にも關するものなり。販賣者が、適當の豫防方法を、盡したるものを、更に、バチルスの危險を恐れて沸騰するは、最も善良なる豫防方法なれど、沸騰後、短時間内に飲用せず、更に、之を放冷せば、却りて、腐敗を速ならしむべし。ちかごろ牛乳取締の攻撃高きに際し、供給者が、能く注意をすると共に、需用者も、一層の注意を加へて、衛生上の効果を收むべきなりといふものあり。時節柄、必要のことゝ思はるゝまゝに、こゝには掲げつるになん。

●貧民救濟會　彼の錦織剛淸氏は、全國の貧民を救濟せんとの希望を以て、今回貧民救濟會を興したり。卒先して、之に賛同したるは、柳派、三遊派、松林派其の他の重なる藝人にて、來月より、時々、慈善演藝會を催し、其の收入を、確實なる銀行に貯蓄し、相當官衙の監督を受けて、無告の貧民に、業を授くる目的なりとぞ。

●上野動物館の鷺　五月雨の空、けさは、なごりなく晴れわたりて、心地いはんかたなし。日頃のうさをなぐさめむやと、魂あへるどちうちつれて、上野公園わたりに、漫歩したり。青葉しげれる夏木立の中をゆくに、をりからなれど、時鳥の、なつかのしう思ひ出でられけるまゝに、動物園に入りたちぬ。狹き口を、せばかり入れど、先、目にふれたるは、二羽の鶴。やや行けど、大象あり、らくだあり。鹿、熊、猪、狐、などおくりてはむかへ、むかへてはおくりつゝ、遂に眞中なる水鳥のさやく柵の回りに出たり。柵の内には、あまたのつる、かも、をし鳥など、水鳥數しれぬばかりなり。其が中に、長きものを口に玄て、とびあがるものあるに、ふと見上ぐれど、巣にもやあらん小松が板の上に、そこはかとなく、竹片など取り集めたるものあり。かたへには、雪かとまがふばかりにましろなる鳥の、あからめもせで、守る樣にてゐたり。今飛びあがりしも、同じ姿の鳥にて、徐に、枝うつりしつゝより來るが、ものいはましげにて、かの

長きものを、口より渡せど、片一方は、また、口にて受けつ。いかにするぞと見れど、かの巣めきたるものを、と見かうみして、さしいれて、心くばりて組みあはすめり。より來たるは、此の樣をつくゞゝと見てありけるに、やがて、またとび下りて、前の如くすることあまたゝびになりぬ。これ、鶯の、雌雄、心を合せて、その巣を營むにぞありける。とび上り、とび下りつゝ、巣にすべきものをもとむるは、雄なるべし。巣を守りて、その來るを、待てるは、雌としられたり。あまりの面白さに、しばしは、目かれもせで見居けるに、時鳥の事など、とくうち忘られぬ。あはれ、男女の間に、職掌のことなるは、人間の上の事とのみ思ひ居けるに、心なき鳥にすら、このけぢめなり。男はむねと、外の事をつかさどり、女は、もはら、內の事を治むるは、げに、天地のおのづからなることわりなりけり。此のことわりを知らで、女とうまれながら、そのつとむべきをばつとめずして、さしでがましく、外の事にのみかゝづらはんは、鳥にもしかぬものと謂ひつべくや。

●祝歌懇望　特旨を以て、靖國神社に合祀せられたる、舊熊本藩士、仁保達三郎が妻の其子は、妾等が、はらからなり。本年耳順の齡を、かさねけれど、いさゝか、老意を、なぐさめんと欲し、四方の風雅の友たちに、寄鳥祝の玉詠御投與を、伏て、懇願いたし候

明治卅二年六月

肥後國熊本市寺原町

妹　中島傳子

妹　宗　廣子

妹　猿木際子

妹　守永賑子

姉　佐々小琴子

●小女の血淚　と題して、讀賣新聞に載せられたるあはれなる話あり。今、その大略を、左に掲げん。西曆一千八百九十九年、日本某港を出帆せる鯨船は、ジ

ヤワ島附近に於て、怖るべき颶風にあひ、流れ〳〵て、東北に進む事十有餘日。某島の最寄を彷徨して、巨鯨一頭を捕へ、之を解剖したるに、其の腹中より、長一尺ばかりの柳行李一つ現れたり。麻繩にて、十重廿重に卷きからげたるを、切り解きて開けば、中には桑港新聞二枚と、他の横字新聞の切拔きたるもの數十枚とを入れ、別に、双子縞前垂程の切に包める一物あり。開きて見れば、洋紙に記したる一通の文にて表に只、「熱田大明神、在外少女(姓名)本跡」と、日本文字にて記したり。開封するに、文字正格、意義分明にして、正しく、明治の教育をうけたるものゝ手跡と覺し、讀み去り讀み來れば、悲憤やるかたなし。其の章の略に曰く、

日本は、尾張出生にて、某といひ、今年二十五歲に及べり。過ぎし二十六年の冬十月、某縣の生れの人にて何々といふ二人、我が故鄉に來りて、妾はじめ六人の少女を欺き、遠き米國に導き行けり。海上、二十日餘り、恙なく、ウヰクトリヤに着船して、いと怪しげなる一室に閉込められたり云々とありて、

心もとなく、茲に、二三日を過し、さすがに、身の行末を案じ初むれど、此の時は、はや、六日の苦痛。泣々、寢るゝばかりなりしに、或日の事、鬼とも見ゆる何がしは、妾等の室に入來りて、入口の鎖、固く鎖し、腰なる短銃取るよと見にしが、ズドンと一發、背後の壁に打込みたり。キャッと驚立て叫けども、外には洩れずや。誰ありて、駈附くる者もなし。此の時、何がしは、怖ろしき見幕にて、妾等を睨み、……先き立つは、淚のみにて、蛭立て、泣くものすらもあらず。いと恥かしきわざに、本國をも汚す事かと心づき、蠻彼等の銃丸に死なばやと思ひ定めて、顏を擧ぐれば、彼等は、いつか、表に去りて、戶は、又、固く鎖されたり。夫よりは、一同に、食事も咽喉へ通らず、泣き暮し、泣き明して、夢路をさまよひて、詮からぬ身を存へしに、偶々、正義の人のありて、桑港新聞は、此の鬼共の仕打を攻擊し、妾等も程なく救はるべきかと喜びし甲斐はなくて、一同はまし〳〵うきめをみたり。いつか、一度、情ある人に縋りて、本國へ訴へ、妾のみかは、多くの哀なる姉妹をも救はんと、堪へ〳〵て存へたれど、今は、はや、せん方もなければ、恨を呑んで、只今入水致す。最後の一と筆認さゞれ共、日本尾張熱田大明神願はくは、此の慘狀を………

桑港にて
(姓　名)

千八百九十九年三月

嗚呼、此の少女の赤誠を、神も憐み給ひけん。此の書は、はしなくも、我國に達して、今は、然るべき士の手に歸したりとぞ。

教の庭



七月五日雜題　團扇

天　山口縣都濃郡末武下村　村上みさを子

蚊をやるもほたるをおふも二つなき
なつのたからはうちはなりけり

地　三河國寶飯郡下地町　永井さい子

月かけのまどにさしいるこゝちして
わふくうちはのかぜのすゞしさ

人　栃木縣足利郡足利町　青木たま子

いつかたに秋をやとしてかくばかり
うちはのかぜのすゞしかるらむ

秀逸（十六首）

手ならせばやかても風の通ひきて
うれしきものはうちはなりけり　伊賀　服部　務子

これなくは何に暑さをしのがまし
なつのたのみはうちはなりけり　日本橋　諸井久良子

風さへもねふるあつさのこの頃は
うちはぞたゞにいのちなりける　肥後　黒田　明子

身に堪へぬ熱さに涯てしばしたも
はなしかたきはうちはなりけり　石見　中山とみ子

堪へがたき夏のあつさも忘るゝは
ならすうちはのあればなりけり　越前　尾倉　鉦子

こゝのみはまだきに秋は通ふらん
うちはのかぜはなつとしもなし　四谷　牧瀬かう子

うつくしきうちはのかぜの涼しさに
なつをわするゝこゝちこそすれ　大谷友子

熱さをはしのゝうちはのまとゐこそ
よその見る目もすゞしかりけれ　竹村竹里子

けふもまたつよきあつさに端ゐして
うちはのほかに友もなきかな　本庄志雅子

なにごともおこたりがちの夏なれど
あふぐうちはのいとまなきかな　山田稻子

手になるゝ團扇のつまのしばしだに
わられがたきなつのれやかな　溝口貞子

もちつきのかたちににたる團扇かな
わが手にされはあきかぜぞふく　森川儀子

我が身にもいつかむかへん秋かぜを
おくるもきみがなさけなりけり　岸崎豊子

しばしたに打もおかれずきのふけふ
うちはのほかにかぜのなければは　橋本こ代子

打おかて手にまかすればあつき日も
かぜのすゞしきうちはなりけり　中村嵩枝子

たへかれし暑さをはらふすゞしさは
うちはのかみのめぐみなりけり　淵木家壽子

夏の日のもゆるあつさをわすれつゝ
あふぐうちはの風のすゞしさ　木村こう子

たへがたきあつさをしのぐ團扇こそ
こよなきなつのたからなりけれ　羽宮象子

秋かぜもかよふうちはのありてこそ
なつのあつさもわすられにけれ　福原菫子

手にならすうちはゝ夏のさもならん
なさけつきせぬかぜもかよひて　磯よし子

もち月を手にさりてみるこゝちして
まづすゞしきうちはなりけり　友永章子

はしゐしてあつさをはらふ手弱女は
手なれの團扇手すさびにして　那須昌子

涼しさを手にまかせぬるうちはこそ
ちかづくあきのやどりなるらむ　虎口貴子

もち月のすがたににたるうちはより
おこるかぜこそすゞしかりけれ　佐々小琴子

こほりうる聲もひまなき夏の日は
うちはのかぜぞいのちなりける　佐々有鄰子

なくせみのこゑさへ暑きなつのひは
うちはのかぜぞたからなりける　安田清子

むかしたか團ふのたけかあつきひに
手をもはなさでつかふうちはゝ　羽田三綾子

脊もはらも見は透く斗り薄き身の
いつこにかぜのかくこもるらむ　山田靜子

少女子にかたみにあふくならうちは
こさの薬くさもこもりぬるかな　山田婦美子

しばしだに團扇のなくばいかにして
あつきなつをばすぐしはてまし　立神富子

うちあふくうちはのかぜの涼しさに
あつさゝいつかわすられにけり　駒澤まつ子

夜ひろさかぜのこひしきなつのひに
柄もなれやすくなるうちはかな　田坂芳子

海しづか小なみだになきなつの夜に
うちはにたちしびんのなみかな　荒井きく子

わがおもふまゝに小風をうませつ
あつさわするゝうちはたのしき　荒井あさ子

さゝの葉のそよさせぬひも夏の團扇
柄もさたしかにかぜぞかよへる　青木治子

富士のねの雪さへけへるあつけさに
うちはのかぜのたのもしきかな　志田久子

夏のひのあつさをいかにしのがまし
たのむうちはのかぜなかりせば　井上まさ子

堪へかれし熱さもやがてわするゝは
おきふしならすうちはなりけり　早川信惠子

くさも木もなびかぬ夏のあつき日も
うちはばかりのかぜはあり鬼　軒庄子

山みづをゑがけるうちはてにされは
あつさもしはしわすられにけり　武田榮子

蚊のゆふべひろのあつさも淺きにて
うれしきものはうちはなりけり　柳島ゆき子

なか〳〵に夏はこよなきたからなり
あふくあひだのしばしなれども　錦野りき子

そのかみのひさのたくみに夏の日の
あつさもいつかうちはすれつゝ　澁江榮子

團扇をばならしつゝなほこのゆふべ
つきのかけをさおもひけるかな　馬場みか子

たへがたき熱もいつかわすれけり
　うちはのかぜをたよりにはして　藤井みゑ子

ならすてふわづかばかりの風なれど
　とほくも夏つをおひてけるかな　大久保令子

涼しさにながむるつきもなつのよば
　あふくうちはのひまなかりけり　菅原松子

こゝろばへまろらかならぬ人にても
　なつはうちはをたのみこそすれ　池澤天興子

ひとひらのうつはなれとも水無月の
　てる日のともはうちはなりけり　敷島花子

ふたつなき夏のともとしあふがるゝ
　うちははあきをおもはざるらん　笹子茂子

かねすらもとくる斗りの暑き日も
　わするゝものはうちはなりけり　山田璋子

つちもさけ草木しをるゝなつの日は
　うちはのかぜをたのみなりける　吾妻ちか子

たへかたき暑さもこれにしのぎきぬ
　うちはよりこそあきは立つけめ　戸塚てつ子

いとせはきれやのうちはに大空の
　かぜすゝしくもかよふうれしさ　館脇ます子

うちはとりあふぐしばしは世の中の
　なつをわすれしこゝ地こそすれ　都しづ子

手にならすうちはの風にたへがたき
　あつさもしばしわすれけるかな　徳永萬壽子

たへがたきあつさもいまは夕まぐれ
　ならすうちはのかぜぞすゞしき　徳永蔚子

夏のよのつきまつほどのすゞしさは
　ならすうちはのかぜにこそあれ　小森田輝子

たへかぬるあつさをしのぐ閨のうち
　あふぐうちはのかぜぞすゞしき　澤田重子

風おこすうちはのいまにこれなくは
　あつさをよそになすよしぞなき　澤田菘子

時のまもおかれざりけり手にならす
　うちはの風になつしなければ　横山柳子

ひるねするまくらの元のあつけさも
　うちはのかせにうちはすれつゝ　横山すが子

月かげのまどよりさすとおもひしは
　おきはすれたるうちはなりけり　重松たか子

なか〳〵に涼しかりけりもちつきの
　まろきあふきにかせはかよひて　名取よし子

たか手にもまねけばかよふ秋かぜの
　やとをしむるはうちはなりけり　坂田きみ子

月かけにたくふあふきのすゝしさは
　またきにあきのこゝちこそすれ　名取正代子

ゆふまぐれならす團扇のかせにこそ
　なつをわするゝすべはありけれ　森こと子

手にならすうちはの風になつの日の
　あせのひろまもすゝしかりけり　杉本千歳子

夏の日のあつさもしばし手にならす
　うちはのかぜにうちわすれけり　夏野瑞枝子

手にとれば夏のあつさもわすれけり
　うちはゝ給さへふしのしらゆき　野中あさ子

人ことのうちはのかせにかよひはや
　しなとのかみはいとなかるらん　山崎ちよ子

手にとれはまたき秋かせさそひ來て
　うちはそなつのいのちなりける　中村きよ子

夕されはうちはの風を手ならして
　つきまつほとそたのしかりける　佐伯まぬ子

あらかれの土もさくてふなつの日は
うちはのかぜぞいのちなりける　白石梅子

あふきてはおなしうちはの風なから
ゑによりてこそ涼しかりけれ　濱さみ〃

もちけのまろきあふきのかけ〻りそ
またきにあきのかせはたちける　宇高まつ子

風なきに風をおこして夏のむれを
はらふうちはのちからたかしも　瀨野靜子

さきのまもはなしかたきは夏の日の
ちからさたのむうちはなりけり　深谷清子

手にされば夏さしもなしあきかぜは
やさりたろらんこれのうちはに　陸奥ます子

さきき〻て日出かりけり去年のなつ
ふりすてられしあたしうつはも　仝よし子

さたまらぬみよの毀人ににたろかな
こもろ時おりあをふかろ〻おり　陸奥きよ子

あふけさもつきせぬ風をうちも外も
みにぬうちはにいかてこめけん　永井さい子

あふけさもつきせぬ風をいかにして
かはかりうすきかみにこめけん　竹谷貞子

あつさには明しかれたろみしかよに
ねやのうちはそ手くさなりける　片山あや子

草も木もなびかであつきみなつきも
ならすうちはのかぜそすゝしき　伊賀直子

手ならせは涼しかりけりまたきより
うちはにあきの風こもろらん　新海わか子

夏の日のかたへはなさてむつましき
手なれ草こそ團扇なりけれ　松浦糸子

たへかたき夏のあつさをわするゝは　荻原章子

いのちのかせの團扇なりけり
くろかれもさくろはかりの夏の日は
あふくうちはそ友にはありける　長澤ひて子

あふげども あふげどあかぬもち月の
まろきあふぎのかぜぞすゞしき　尾崎嘉子

そよ風も何時しかたへてひさもさの
うちはの見ゆろいほぞゆかしき　下田みさ子

夏の日のあつきめくみさうちあふく
うちはのかせそすゝしかりける　三輪みさを子

夏の日のあつきさかりもふくかせを
まれくうちはゝすゞしかりけり　賀茂笹子

風なまれきほたろをまれき夜ひろさ
うちもおかぬはうちはなりけり　加藤數子

夏のよのねやのあつさをしのふろは
まろきあつさのなさけなりけり　服部萬子

あて人のもてろうちはゝいふせかろ
かひのけふりもかゝらさろらむ　河合縫子

あすしさてならすうちはに打さけし
をたのまさゐかさまもみにけり　伊東千代子

ゑみなの手にならされてゆふくれの
かおふうちはやひまなかろらん　伊東いさ子

なつの夜の月まつほさの手すさひに
わすれかれたろこのうちはかな　石原くら子

秋かせのたつまてなれさなか〱に
したしまろゝはうちはなりけり　日高やす子

なつかしき風こそたてれ奈良うちは
たか手になれしかたみなろらん　日高かず子

うちはゑやきよきなかれにきよき月
あふかずさてもすゞかせのふく　川崎ゆき子

あふきつゝ涼しきものはつきかげの　かたちににたるうちはなけり　齋藤よし子

うちはこそ暑わするゝ物なれは　涼しきあきのすみかならめ　横手孝子

風はこふなつのうつわのたからなり　なかきあつさのしのくうちはは　今井蕗子

白たへの富士のたか根のみゆきより　しろきうちはになつをわすれつ　内海順子

夜もすがらあふぐうちはの風にこそ　はぎのしたばもそよぎそめけれ　小川初野子

手にさりしうちはの風のすゞしさに　なつをわするゝこゝろこそすれ　粟田口のぶ子

君かよをあふくもうれし忘うちはの　ふじのたかねのゆきもすゞしき　須藤はな子

はしゐしてうちはの風はなつなから　またきあさきもおもほゆるかな　宇佐美秀子

手にされはつきせぬ風もうちかよふ　うちはそかせのやさりなるらん　黒子うめ子

日かけ見ぬ背棨かくれにゐなからも　うちはのかぜそうれしかりける　奥村英子

夏しらぬうちはのかせのすゞしさに　またきあきをもおもはするかな　飯島いま子

長き日のあつさをいかでしのばなん　あふぐうちはのかぜなかりせば　内山そう子

いつさなくてなれし夏のうちはより　あきをもさそふかせはいつらん　田中登美子

時のまもうちもおかれぬうちはかな　あふくにさそふかせのすしさ　由井浪子

てにならすうちはの風ぞいのちなる　清河照

あき風やならすうちはにかよふらん　そよふくかぜもいらぬふせやは　椎野ぬき子

手にさりてならすうちはの風ゆ忘に　すゝしくもるゝれやのつきかけ　新泉茂子

うちならす團扇はなつのものなから　いふせきやさもなつなかりけり　新泉翠子

七夕にしらせてしかな手にならす　なさあきかせのふきおこるらん　畠山ゆき子

忘らるゝゆふべもあるをあきかぜの　うちはのかぜはあきになりぬさ　せく子

手にされはすゞしくなりぬ暑き日も　ふかぬうちはさたのみけるかな　畠山百合子

いかにして涼しき風のやさるらん　かぜはうちはにすめるなりけり　千代子

背棨さへそよかぬものをうちはには　内外のほさも見ぬぬ團扇に　北島功子

堪かたき暑もしばしわすられて　かぜの御かみやひそみますらむ　北島松子

もちの夜の月を手にさる心ちして　すゞしきものはうちはなりけり　高砂菊代子

手にされはなつなかりけりもち月の　すゞしさあかぬひめうちはかな　高砂きよ子

手にならす團扇のかぜのやさりこそ　まろきうちはにあきこもるらん　北原季子

たれもみなうちはを友さなしてこそ　こめあきかさもおもはれにけれ　都水春子

なよ竹にむかしそよきしすゝかぜの　たへぬあつさもしのき得てけれ　武田環子

いまもうちはにやさりぬるかな

手にならす團扇のかぜになつの日の
あつさもしばしわすられにけり　山代綾子

花園にみつそゝきたるゆふくれは
うちはのかぜのいさゞすゞしき　清水貞子

いと暑くくるしきときはうちはこそ
ふみよむひまのともにそありけれ　徳永そう子

七月五日兼題　待雨

天

千葉縣安房郡豊田村脊見　三幣みさを子

五日の風や十日の雨、ふれども土をそこなはず、吹けども枝を鳴らさずと、うたひし世もありけむを、今年いかなる禍神の荒びにや、六月の始より、一日だに雨ふらむけはひだになく、日影てりはたゝぎ、たま〳〵山の端にかゝれる白雲は、ねたきまで動きもやらで、天つ空は、さながら紺青をぬりたらむが如くにて、三十日あまりなりぬれど、畑つ物田なつ物は、いふも更なり、道のべの芝草さへ、打萎れて赤みわたれるさま、目もあてられず。されば、常は團扇うちつかひつゝ、青みわたれる田の面に、夕露のしたゝるを眺め、あるは親はらからうち集ひて、夕顔棚の下涼み、いかに樂しからむを、今年は逢ふ人毎に眉をひそめ、うち語ふ話さへ、うたてき事のみにて、夕つ方に至れど、こゝの山かしこの峯に、里の老若男女うち集ひて、鐘うちならし、ほら貝吹き立てなどして、雨乞するさま、凄しなンどいふばかりなし。されど、庭の梢よりちりくる朝露を見ては、雨かとおもふて山の端をながめ、軒端のわたり、さと吹く風の音をきゝては、村雨の過ぐるかと疑はる。深く窓の内にとぢこもりて、文筆を友とする身だに、かく心細き心地するを、まして雨の朝風の夕、野山にいたづきけむ、農民の心の内やいかならむ。天もし心あらむ、一しきり惠の雨を下したまひて、あまたの人の愁の眉を開かせたまへや。此の比は一昨年も昨年も、豐かならざりしを、あはれ、人を殺す爲にはへる天にはあらざるべきを。

地

岩手縣盛岡市大澤河原小路八番戸　石原くら子

昨日もけふもおとゝひも、一しきりの風だになくて、ひたゝふるにてりはたゝく、此の頃の暑さには、さながら爐の中に埋まれたらんがこと、生ける心地もなし。田畠のものはいふもさらなり、路の邊の醜草さへ、打しほれたるぞいみじきや、幾度か雲あつまり、電光さへきらめきて、夕立は今に降りくると見えしも、忽ちに雲は散り、鳴神はよそにのみなりゆきて、いつしか降らんけしきもなし、さきにいとひしまでにふりつゝきし雨の、いかて今はつれなきぞ、蒼生は心つくしの田なつものに、いかばかりか骨をやくだくらん、あはれかゝる時にしも、一村雨のあれかしと、むかし三十一文

字に天地を動かし丶御車の上なと思ひ出でられて、おのれもいかでとおもへど、拙き身にはまねぶべくもあらず、いとも口惜しく、たゞ心のみ打ちあふかれてなむ、

人

松山市一番町　宇高まい子

水無月とはいへ、などかうも降らぬにや、かしこの池の水は早やかれ、この川の流れもとく絶えぬといひさわぎて、今はたゞ山かげの泉を民草の命と頼めど、これも千町田には引きもたらず、日々水の論はたえず、かくて四日五日も打續かば、秋のたのみはればつかなしなど打なげきつゝ、産土の宮につどひ、高き山にのぼりなどして、ひたふるに神の力を頼むも、げにいとも哀れに心くるしき限りになん、

（以下原稿到着順）

稲原菫子

今年は、わきて暑さもいみじう、雨の音もたえて久しくなりぬる此頃、そよとの風もなき苦しさ、富士の根の雪も消ゆべく、こがれも溶くべく、庭の、小川の、はては、賤がなは代の水さへ、枯れん計りなるさま、實にあつしとも、あはれとも言はん方なし。されど、天には、油然たる雲も起らず、沛然たる雨も降らず、しをれたる苗をいかゞすらん。あゝ。いかで一夕立もがなと思ふ折柄、忽ち黑雲ふたがりて、雷の音のひゞき渡れば、うれし白雨のふり來らんと、待ち居りしかど、そもかひなく、つれなき只一聲の雷のみにて、又もや元の如く、空晴れゆきて、こたびは、一入、てりはたゝくぞ、うらめしきや。

白岩艶子

吹き來る風も、吹き出たす暑さのいきかとはかりぬるく心地惡しきを、況て照る日盛は、其れさへ全くあらで、木も、草も、將た人も、しをれ果てたるさま、あはれ此を救ふべきものはそも何ぞ、日陰なす雲かあらず、涼しき風か、左にもあらず、墨を流したらん如き雲を起して、雷の聲おごろおごろしく、車軸をも流すべき勢もて降り來る夕立の雨なるべし、實に日陰なす雲にも將た涼しき風にもまして、ひたぶるに待ち渡らるゝぞかし、せき入るべき里川の流れも、一日一日と少なくなりぬ、今二日もかくてあらんには、田の面の水もかれ果てなん。田子のなげきは、やがて世のなげきなり、あはれ此の苦みを、心地よく降り流す如き一雨もがなと空打あふぎ呼び立つるは、あながち田の面の蛙のみにはあらじかし、

軒葉

今日は、朝の程より、何となくむしあつかりしに、午後より、いよゝ暑さの増り、實に御佛の生れたまひし國もかくやとおもふはかり堪へかたくいかで一村雨のふれよかし、立ちよらむ木陰もあらばと庭面をながむれば、我のみか、草も木も皆しほたれて、今こそ露のひろまといはまほしけなるも、いとあはれなり。妾は、おほねすも、理や日本なれはをくりかへし、皆々に笑はれぬ、されど、雨は猶ふらず、暑さ恐るゝ友もがなとおもへど、又來らず、一日をくるしみつゝ暮しゝに、日も西の山の端にかくるゝ頃よりは、さすがに風もいてゝ涼しうなりしに、雲のゐまひさへ常ならず、遠方は白雨するにや、いかつちの聲さへ聞ゆるに、そなたかまち〳〵し雨は、やがて此所にも來るならむなといはるゝに

玉たすきかけしれかひな天にます　岩戸の神もあはれとや見し

なとくちすさみしも、あれなりや。

河原芳子

夕立ちや田をめぐりの神ならばと詠みけん昔はしらず、ことしは近頃になき旱にて、田畠のものゝすさまじきさまはいふも更なり、其の日其日の飲水さへ乏しうなりもて行くに、あはれあまたの民草は枯れは

てなん、惠みの雨を下したまへかしさ、諸の神にこひねぎまつりて、立ちさはげど、此の甲斐なくて、空行く雲の壓ほども降るやうなきに、いよゝ民草は萎れにしをれて、今はたゞこがれ〳〵つゝ、雨ふるなりを待つ外なし、あゝわれもしみめぐりの神ならましかば、

綿野りき子

今日いくか、てりはたゝく夏の日に、やりみづの音かれはてゝ、はつかにたのみたりし木の下さへ、今は露はかりのかぜもなくなりぬ、あはれ此のうへは、何をかたのまむ、雨こそ人の命なれ、あらはしろ一あめもがな、如何で〳〵されかふ折しも、たゞならぬ雲の動きそめたるは、おのか心の空にかよひてか、今やさ待つ間も、いさ久しき心地してなむ、

山田きよ子

見渡せば、野山の綠あざやかに、すべて若葉の艶々しき景色も、日々打つゞくひでりに、凉しき色は更になく、軒の梢にそよ吹く風の音づれもなく、蟬の聲のみ耳さわがしく、ましていぶせき我やどは、とりわけ暑さの強く、しのぎかぬればさやせんかくせんさ思へども、はや打水の氣根も盡き果て池水はほこりによごれ、蕣顏もつゆほしげに咲き出でゝ、いづれも暑き有様なり、されば農家には雨乞をするもあり、我田に水のあらそひもありて、あはれにも又氣の毒なり、これを見つる毎よ、しばしだに御めぐみの雨もあらば、草木の葉もさこにかへり、野山の色も、其の景色もさの如くなるになん、天つ神よ、御なさけもあらば、暫しの雨を降らしてよ、暫しの雨を給ひてよ、

佐々有鄰子

風雨の枝をならさぬ御代にしあれば、四方の青人草は、おのがまに〳〵大君の惠の露に潤ひて、しげりさかね行きぬ、此の時をり〳〵にさだめなき大空のけしきこそ、いさ心ほそきものなれ、三日の、雨五日のひでりは、季候の順なるに此ごろは、雨ふらずして日影のみてりわたり、植ゑわたしたる早苗も、蒔きつる粟も、日照のためには、已に枯れはてんさす、神の御力を祈り、甘雨をふらしめて、青人草も病みこやせるばかりのあつさをあらひなかし。五のたなつ物もよく榮へゆかんよな、あめを待つ身のねがひになん、たれもかくおもふなるべし、あなまちさほや、

橫山鄉子

土もさくるばかりなるこのごろ、まいて、今日は、朝よりたへがたくて、きぬぬきちらしたるまゝ、はしゐのみすれど、前栽の草木皆しをれはてゝ、梢にすだく蟬のこゑさへも、暑さいやます心地せられて、扇さる手のいさまなきもわりなしや、あはれ、一村雨もがなさ、打みやる折しも、村雲のまよひたゝならす、山風さゝふきいてたるは、ゆうたちもやさ、いさもうれしうて、

名取正代子

思ふにまかせぬが、世の習なりさはいへど、さても、さき比のをやみなき、五月雨の空に引きかへて、けふ此頃の、てりはたゝく、水無月のあつさよ、こかれもさくろさいひけんも、さるものにて、あらがねの土もさくるばかり、かわきはて、草木は枯れなん程にしをれ、はた庭の池水は沸きかへりて、ほさ〳〵かれなんずるさま、實にあはれさも、いみじさも、いはん方なきに、まして賤やかなる田畑のさま、いかにかあるらんなど、思ひやるも、なか〳〵なりや、されば、いかで一雨もがなさ、あるは天に向ひ、或は神に祈りなどして、我も人も、けふ幾日か、雨をのみ、請ひ渡りつるに、今ははや、聲さへかれ〳〵になりぬれど、露だにうるほはんそらも見ねず、さては、からうじて、けしきばかり催しぬるよさ見るほどに、やがてふらでやみぬるなど、なか〳〵に、くるしさやるかたなくなん、

坂田きみ子

あさな夕な、雨よぶ蛙のこゑは、をやみなく門田のおもに聞ゆれど、なかなかにふり出でんけしきゝ見ねず、あらがねの土もさくさいふ夏の日ながら、こささらにあつさ堪へがたく、なべての草木も、日に照りやかれて、葉もしぼみ、根もかれなんほどに見ゆる、折しも、はるかなる高嶺の上に、むら〳〵さ雲立ちおこりたれは、けふこそ夕立すらめなど、うれしくまち設けし甲斐もなく、又もや空だのめにきねはてぬ、かくおもひつゞけしこさも、かぞなへば、はや廿日あまりになり

にけり、さるほど、をちこちに、鐘太鼓などうちならしつゝ、雨乞すなる音のきこゆるにつけても、ひたぶるに、一ふりもがなとおもふは、只我のみならで、皆人の心にやあらんかし、

中村さく子

一夕あつさ、たへやらず、涼みがてら、庭の景色を、ながめんと、椽はた近う出でたれど、五旬あまりも、雨を受けぬ、庭の景色、松のみは、いつもかはられど、他の千草は、いきほひわろく、風さへ、ぬるう、心もあつさにて怠りがちなり、嗚呼今、一雨ふりたらんには、心もいさみ、千草もみどりを増し、地もやはらぎ、田畑のためにも、よからんにと、思へば思ふ程、いみじう、待たれし、一時千秋の思ひになむ、

木戸みつ子

大空はほがらに晴れ渡り、木々の梢にそよ風もなく、あはれ、今日の暑さのたへがたきよ、年々の暑さのいみじき頃には、此方の瀧水、彼方の瀧に、暑さを凌ぐ人あれど、女のみなれば、得行かでいぶせき室に、籠りて凌ぐ我なれば、一雨ふれと、天つ水を仰ぎ待つのみ、

前櫻のぶ子

よもの山青くなり、岡邊の松に鳴く蟬の聲も、一層高くなり、岩が根傳ふ谷川の。流も、今は干がりで、暑さを避けて樹蔭に。清水を掬ぶ水も無し、朝な夕なに待たるゝは、雨にこそ、

野中朝子

夏のあつさはならひとは知りながら、今年はまたことさらにて、げにあらかねの土もさくといふあつさになむ、わけて昨日けふは、わが身一つのおき處さへなく、折柄またるゝもの、たゞ一しきりの夕立のみ、されど、空には少しの雨雲もみえず、いやてりにてりて、田の面は。龜のせの如くにひゞきわれ、農夫のいたつき植ゑし早苗も、今は穗なる色にかはり、こなたかなたにきこゆるは、雨乞のこゑはかりにて、けにみるもきくもあはれなることゞもなり、この廿四日五日とてりはたたきなは如何ならん、返す／＼もまたるゝものは雨になむ、

杉木千歳子

富士の嶺の雪さへきゆといふ水無月の空に、かてゝ加へてこの日ごろは、久しう雨ふらぬ日のみうちかさなれば、あつさのたへがたきことはさらなり、百姓らが植ゑし田も、まきし畠も、あしたにはしぼみ、ゆふへには枯れなんとすれど、さりとてなさんすべもなければ、たゞに仰ぎてまつ天津水を、天地の神もあはれと諾ひたまひて、このゆふへにも雨雲四方に立ちひろごり、神おどろ／＼しくなり出でゝ、雨一しきりふらしめたまはむには、如何計り嬉しからんと、むかし某といひけん法師の伊豫の國に下りけるに、その頃久しう雨ふらず、民憂ひさまよひたりしを、この法師、三島の宮に詣でゝ、「天の河苗代水にせき降せ、天降ります神ならば神」と、うたよみて奉りしに忽ち大なる雨ふりたりといふことのおもひ出でられて、今は一向神の力の賴まれてなん、

中村きよ子

水無月の頃は、暑さとこころせきほどなるを、まいて朝よりちりばかりの雲もなくてりわたり、瓦よりはほのほあがり、土よりは煙立ちて、せばき庭はあたかも。釜の中にあるごとく、いよすがゝけて、せんざい見渡せば、庭の面にそよける風もなく、水枝さす若葉も打しをれたらんやうにて、まさのうちは文机なゝめになして、何事もおこたりがちなれど、扇とるはいそがはしくて、はては、ほど／＼帶なども、ときちらしぬべく、今は只何事もおもはで、ひたすらに、夕立の一しきりふり出でてんをのみ。たのむになん、

米櫚宮子

筭の音もたえにしより、今は二十日あまりになりぬ、暑さはひぐらしの聲ともろ共にそへまさり、ひざかりはいふもさらにて、夕になれどなほたへがたきまゝ、よみもてゆきし書も、今はやめんとて閉ぢつゝ、やならで立ちいでゝ、庭の面に、井水すこしまきちらしなどすれど、たゞやけ石に水ぞかし、せめてはと賴む扇も、たゞぬるき風を送るのみ、あはれ今一さめ降らましかば、いきのぶる心地やすらんとぞ思はる、前

秋の草木の、雨まつ顔に、打ちしなるゝもあはれに、池の汀の蛙どもが、うたふ聲々も同じ心に聞きなされて、いと心苦しきものから、己れも空打ち仰ぐに、東の方よりこなたをさして来る、あやしき雲のありければ、あなうれし、二十日あまりのながの日をまちくらしたる甲斐はありけり、あはれ草木の心はいかに、あはれ蛙が思ひはいかに、など打ちよろこぶは、たゞ假初のゆめの如く、雲は西南をさして走るにぞ、あなつれなの空かな、こゝにも雨をまちわぶるにと、かこてど、更に知らぬ顔に、打ちすぐること、いとゞ心にくうてなん、

大谷美子

空には粟ばかりの雲もなく、たゞ照りにてりはたきて、いとくるしき日に、雨をおきてまたなにをかまつべき、所々の梢は凋みはてゝあはれなるを、よろけたる風だになく、ひるのもなかさもなりぬれば、土塊やけ、路ゆく人はたゆたてなし、けふのあつさをいかにしてかはしのぐべき、きのふたに納涼へかたかりつるをと、あせかきなかしつゝ、しばしいほどは、扇の力をかりて、文のひもときよみゆくまゝに、心うみ躰亂れて、着る衣もうるさきまでに、あつさはいやまして、忍はむ心もあつきにはけをさるゝにぞ、いまはつれなく慾の玉すだれかゝげつゝ見渡せば、村住のことゝて、田にはおのこども、のたかやさんどもせで、たゞ染ひて、なにやらんかたらひ、遠き山には人のかみに雨のめぐみをこふも、げにあはれにて、へなりけり、われも、あはれすこしの雨もがなと、目だてんずれば、打凋みたる梢も、こゝろづからに雨まちかほに思ひなされてなむ、

川崎ゆき子

人も獸も山も木も草も、天下にあらゆるもの、水ありて生あるなり、其水流るれば緑色を増し、吾人の目を樂ましむ、天に昇りて下れば草木の色をます、げにも水のまはりと經のまはりの宜しき程よきはなし、新くあるものを、何たるさそ、今日此頃は永の日照に、雨一粒だになければ、井の水も減り、小川は涸れ、大河の水も絶々になりけり、草木の葉はほこりによごれ、早や色を失ひ、人の顔も、今や色を失なはんさするばかりなり、乞ふ、天は我等を助くるなさけのあめを降らしてよと、人も草木も天を仰いでなげくのみ、

由井涙子

てりつゞく此頃の暑さに、草木はなほふし道り水はかれ、琵琶の池もさけんばかり、そよこのかぜの音つれもなし、いかでか雨の足遠くなりつる、などが夕立のなきと思へども、さるけはひもなし、たゞ折り折り、遠の山に、鳴神のおとして、稲妻のたゞかりそめに光り行くのみ、あな暑し、あな堪へがたしと、人每に云ふめるを、時の間にても車軸を流す程の雨に、草木を濕し、涼しき風に暑さを拂ふ事を得ば、いかにうれしからましをと、ひたすらにあめのまたれてなん、

大谷淋峰子

此十日あまりは、あらがねの、土も、さけなんばかりに、てりはたゝきて、あつさ、いみしうつよく、少しの風だに、あらず、み民等は、雨ほしさ祈らぬ・者ぞなき。まして。あまさかる。鄙の夫等は、田面にうゑし苗の、枯れ果てん事を、歎き、高山に、のぼりてまします神に、ひるよる、分かず、雨乞すとかや、姿もかずならぬ、身ながら、今宵も、み空を、仰ぎて、祈らんものとはし近う、出で立つ折しも、かなたに月の、あらはれしぞ、いとうらめしき、それ水あらば草木も、生を得て、又一入のながめ、添ふべきにと、再、み空を打仰ぎつゝいかこつも甲斐なし、いかで、いやたかき、神の御めぐみもて、一日も、早く、雨得て、しがなと、もろ人と、共に、いのり、侍るなり。

初學子

いといたうたへかたき暑さ故、昨日けふは泉の水も流れ細りて、吹きくる風もなまぬるく、雜ざる手もゆるみはてぬ、いかで夕立の一降もがなと、花にいとひし事も打わすれて、ひたすら恵のつゆを願ぎまつるになむ、神もし人ごゝろあらばいかに怒り給はん、さるにても、神業こそありがたけれ、しばしがほどに、かなたの山、こなたの沖に、あやしき雲立起りて、みる〳〵大空かきくもり、なる神もおどろ〳〵しく、いさましうふりいでたり、うれしさたとへんかたぞなき、げに神業こそ

尋くもいみじけれ、とてほそかりし泉も川をなし、しぼみし草木もいき返りたらん如く、青葉したたる白玉うるはしく、あやしきまでに心地すがすがしうなりぬ、折から空もちりばかりの雲なくはれ渡りて、雨後月またなきながめにて、ちりのよのものとも、おぼえずなん、

日黒佐喜子

あらかねの土も、熱くてふ夏の日は、折々の雨こそいと力なりけれ、さるを、照り續く日の重りて、はや幾日にかなりぬらむ、大路は、乾きにかわきて、燃ゆるばかりなるに、路行く人の汗拭ふ手も忙はしげなり、庭の草木は甚くもしをれ、しば〱撒けども軒の打水、忽ち跡消ゆる暑けさに、吹き入る風も涼しからず、透り放さぬ團扇の風をわづかに便りにはして、日々暑してふ同じ詞を、いくそ度繰り返すらむ、近き村里にては、皆田畑の上に心置きて、うれたみなげかぬ宿もなく、打集ひ水くまりの神に祈らむとす、あはれ一村雨のあらば、くるほしき暑さも失せて、いと涼しくもなりなまし、はた村人の喜びも如何ならむと思ひやられて、昨日今日は、只雨のみ待ち渡られてなむ、

北原季子

いぶせかりし、五月雨の、晴れわたりては、また更に、いとなつかしう、わきて昨日けふのあつさは、かの、あらがねの地も、さけなん、ばかり、ともいひつべきか、みどり深くも生ひ繁りし、庭の木々は、みな葉をまきて、今にも、枯れなんばかりなるに、いとかしましう鳴くせみのこゑは、林ともなりまさり、そがもとを、をり〱かよふ風さへいとあつけく、あはれ雨もがな、少しは涼しうもなりなんに、などてかくは照り續くらんなど、今は口ずさむやうになりて、文を見るにも團扇かた手にわづかの風をよすがとして、くるほしき暑さを、さけぬるものから、かのしづの男の田畑のうれひや、いかならんと、千々にものを思ひみれば、片時もはやう降れよかしと、池にひそめる蛙さゞに、さけぶがごと只雨をのみ待つのみなり、

野邊菊
うるはしき菊に千代の香をとめて
さかり久しき野ぢの白ぎく　淺井靜子

社頭落葉
こがらしに木の葉はちりて辻社
あけの鳥居も見えそめにけり　淺井靜子

仙人
さし月もしらで世をふる仙人は
花ものちにや時を知らるん　淺井靜子

首夏山
つゆふかきうの花がきのたそがれに
見ゆる螢のめづらしきかな　三輪義方

郭公
郭公たゞ一聲をなごりにて
雲井はるかに月ぞのこれる　内海順子

池蓮
はちす葉のにごりにしまぬ心もて
ちりの浮世を渡りこそすれ　内海順子

杜新樹
夏木立しげりてかげも見えなくに
たが月よみのもりといふらん　山田璋子

花橘
我宿のはなたちばなも咲きにけり
昔ながらの香ににほひつゝ　内海順子

聖上　横濱へ行幸あらせられしをり居留地之民無上の幸榮と感涙にむせひしを見はべりて
外國の民もみゆきををろがみて
めぐみの露にむせぶ今日かな　筵子茂子

仝日　桜岸の競馬を天覧あらせられければ　仝

大君のみそなはす日さうち競ふ
駒のあしなみたちいさみけり
山田璋子

浦梅雨

あまかきる衣のうらもこのころは
かわくひまなしさみたれの空
佐々豊水

山吹の少女

武士の心なだめて山吹の
いはぬすかたぞゆかしかりける
仝

田邊將軍の妻

おくつきのおくゆかしきはめをさもに
あだむくいけんやまさ雄心

いしの水門みづのかゝみのまさやかに
あたむくいけんみたまをゝしも

明治卅二年五月九日。肥後國菊池郡城北村の開道式につき
仝

朝もよし木野のやまみちふみひらき
力くるまのかげやまさらん

今日よりは馬にくるまにおるかごさ
ひきつらなれる道さなるらん
內藤順子

螢

五月雨のはれし小川の夕まくれ
身をこがしつゝ螢さふなり
三輪義方

海湖郭公

磯やまのしげみをいでゝほさゝぎす
こゑはれやかにうみづらになく
柴田靜榮

池上螢

池みづにすゞしきかぜやわたるらん
うきもはなれてほたるさぶなり
山田露美子

夜五月雨

小やみなく落る五月雨に打しめる
枕に夢も亂れぬるかな

五月雨の軒うつ音に獨り寐の
夢もむすはて明る空かな

池菖蒲

風渡る池の汀のあやめくさ
行くて女子の袖匂ふかな

浦夏月

たえまなくよする磯邊のしらなみに
さそはれていづるなつのよの月

湖あみのひきをまねびて月かげの
たゆすなみまをくゞりてぞゆく
清河照子

正誤　前號即ち第百八十三號口繪は島津日新公の母にはあらず佐々木照元なりしなり



「日本の家庭」改題

家庭教育

第壹卷第參號
六月十日發行

本誌は家庭教育に盡悴する唯一の雜誌にして、我邦女子の品性を高尙ならしめ、世界に於ける日本として進取氣象を涵養し、固有の婦德を發揮し是を補ふに泰西の婦人の長を以てし、極めて平易に、極めて愉快に、一家團欒の裡に、軟弱なる婦女子の腦力に應じ、不知不識、感化を及ぼさんとするは、本誌が最も苦心する所にして、又本誌の特色なり、今や世運と共に益其改良を施さんとし、**來る七月十日發行の第四號よりは、新たに數名の大家諸氏の贊助を得て、大に其面目を更めんとす、詳細は六月十日發行第三號の社告にあり、就て一覽あれ、**左に既刊第三號の目次を掲ぐ、婦女諸子及家庭教育と合せて本邦女子教育に志ある諸仁は是非購讀あらんことを望む

一冊　定價金八錢　郵稅壹錢　六冊　前金五拾錢　十二冊　金壹圓

(口繪)牛島村の巨藤○(社說)島國根性を除去すべし○(家庭教育)女童喩○(史傳)堀直太郎直堯の內室○ヴヰクトル、ユーゴーの逸事○(家庭)獨逸皇帝陛下の御宮庭○育兒に拙なる妻○(學問)幕景集考概略○小兒の發育○陰陽二氣の調和に就て○(技藝)厨房化學○藤の花○烟草につきて○(たのしみ)御伽草紙理屈物語○わかぼし○(詞林)朧月夜(新體詩)六代御前(仝)和歌數首○(雜報)萬國婦人平和會議○小學生徒の喫煙○葡萄酒試驗の成績○天理教會の金米糖○女學生の化粧服裝○綠陰愛すべし○(社告)第四號より改良の要旨を告白す

發行所　東京牛込區神樂町二丁目十一番地

「日本の家庭社」改め
家庭教育社

夏季女子講習會開設廣告

今般本會ニ於テ教員タルニ必須ノ學力ヲ補充シ兼テ一般女子ノ爲メ適實ナル科目ヲ講習セシムルノ目的ヲ以テ本年七月二十七日ヨリ仝八月十六日マテ夏季女子講習會ヲ開ク講習志望者ハ科目及族籍、住所、氏名、生年月ヲ記シタル書面(用紙半紙)ヲ本年七月十四日マテニ東京市神田區一ツ橋通町二十一番地東京府教育會事務所ヘ差出サルベシ

講習科目及講師

一音樂　附遊戯法　講師　東京音樂學校教授　小山作之助君

一作法　講師　女子高等師範學校教諭　後閑菊野君

一裁縫教授法　講師　女子高等師範學校囑託教師　谷田部じゆん君

(注意)裁縫教授法ハ今年新ニ聽講スルモノニモ昨年既ニ聽講セシモノニモ適當ナラシムル見込ナリ

一數學　講師　東京府高等女學校教諭　原田長松君

講習料(本會々員ハ一割ヲ減ス)一科目金壹圓　二科目金壹圓五拾錢　三科目以上金貳圓

証明書　講習結了後証明書ヲ授與ス

科外講演　時々大家ヲ聘シ女子ノ心得ニ關スル科外講演ヲ開ク

明治卅二年七月

東京府教育會

文學博士井上哲次郎君序文　織田得能師編纂

國文中の佛教文學

和裝　全一冊

定價金四十錢　郵稅金四錢

目次

天地開闢●須彌山●釋尊出現●八相成道●五時八教●法華の功德●法華八講●法華三十講●法華轉讀●天台の血脈●顯密の諸教●禪●淨土の教●天王寺●誓願寺●梵天宮●高野山●比叡山●熊野●大日如來●彌陀如來●藥師と觀音●五大尊●八幡大菩薩●生身の尊賞●佛陀の三身●神明の內證●勸進帳●表白●消息●穢土を厭ひ淨土を欣ふ●迷語一心●三界一心●無常●因果の理●心の鬼●心の暗●初夜の念佛●後夜の懺法●中陰の法事●最後の佛名●佛堂の供養●賀壽の法事●御修法●道場●修學●獸は是れ多羅尼●綺語●方便の殺生●煩惱即菩提●諸法實相●行脚僧●山伏●行者●出家●菩提心●あはれ●山門の法滅●奈良の刧火●の、かたみ●末法の功德●忠孝●惡逆●誡●法王の灌頂●中將の出家●臨終の懺悔●臨終の覺悟●臨終の引導●死後の引導●菩提の種●菩提の花●淨土の樂●淨土の悟

拔萃書目

●神皇正統記●水鏡●太平記●源平盛衰記●平家物語●榮花物語●秋夜長物語●保元物語●源氏物語●唐物語●鴉鷺合戰物語●十訓抄●徒然草●方丈記●海道記●謠曲●其他馬琴近松等の著書

佛教東漸以來千三百餘年間我國思想界の大半を支配せしより歷代の文學が其影響を蒙れるは各種の韻文散文の上に徵して明なりされど苟くも我國文學の眞意を知らんと欲する者は勢佛語佛理の研究に涉らざるべからず茲に於て本所は今回佛教文學講習會を開設したるにより一はその教科書と爲さん爲め一は世上有志者の便に供せん爲め斯道の學者織田得能師に乞ひ前記の國書中より拔萃して目次の如く順序を整へ本書を編纂したるなり代金到着順に依り送本すべし

●爲替振込は麴町區飯田町支局の事

國文中の佛教文學講義

織田得能師擔當

佛教の渡來一千三百余年附來漸く海內に弘通し國人の崇信甚厚し遂に吾國思想界の大半を支配せらるゝに至りしかは此間に起れる總ての文學は之か影響を蒙り就中國文學上に於て其痕蹟最多しされば苟くも國書を研究し國文學の眞意を知らんと欲せば勢ひ佛教の研究によらざるべからず然れども佛教は其義幽玄深遂にして之を通曉せん事決して容易の業にあらざるなり文運々盛の今日に於てなほ等閑に附せらるゝは實に遺憾の事といふべし本所茲に感あり所內に佛教文學講習會を開設し斯道の學者織田得能師を聘して專ら國文學と密接の關係ある佛語佛理の解釋を施すことゝなしたるか今回其講義錄を發行してあらゆる國書中の佛語佛理を解說し以て國文學研究の援助たらしめんとす有志者は續續入會あれ規則入用の向は郵券二錢送らるべし

全部十二冊合本六卷にて完結○六月廿七日初卷を發行し毎月同日を定期として合本一卷（二百五十頁內外）宛發行し六ヶ月にて終る○講義は本所發行國文中の佛教文學書の目次の順に從ひ天地開闢より淨土の悟迄とし又廿一代集釋教歌題の說明及ひ時々文學上必要なる大家の論說を掲ぐ○會員には國書中の質問を許し答辯をなす○入會金三拾錢月謝金卅錢○學校教員には入會金を免ず爲替振込は飯田町支局○受取人宛名は本所會計係○郵券代用は必二割增

東京市神田區三崎町一丁目三番地

國語傳習所

西村茂樹翁序
三輪田眞佐子女史著

第五版

女子處世論 全

菊判美本

定價二十錢　郵税四錢

本書は女子教育に有名なる三輪田女史が日常實踐躬行に徴し女子たるもの丶世に處するの道を詳述せしものにして字々皆着實に句々悉く誠意に出で一も虚構の文字なし世の令孃達此に依りて益々女德を養ひ以て神州國民の慈母たらんことに資せられんことを

發行所　東京京橋區築地二丁目廿一番地　國光社

男爵高崎正風先生序 ◎ 本居豐頴先生序

故富士谷御杖先生述

土佐日記燈

大和綴優美 自一卷至八卷 紙數壹千百頁 上中下 合三册

全三册 正價壹圓五拾錢 遞送料 四種郵便卅錢 小包〇十里迄七錢〇百里迄十二錢〇百里以外二十四錢

富士谷御杖の翁斯の學に至り深かりしは今更にいはず其ものせられし著書れはかゝるが中に燈といふもの古事記燈、萬葉集燈は翁か在世の頃にゐり卷となりて、世に廣こりしも、この土佐日記燈は早く文化の末つかたになれるものなるかさるよしありて時の栗田の宮の請はせらるゝに稿本のまゝ奉られしを、後いくはくも、なくて翁はみまかれしかは、さなからに埋もりて流布せすなりにき、世の學者見まほしふすれとも、さるよしもなくて空しく年經ぬることを茲に數十年、さるを翁の男元廣ぬしかさるへき筋より辛うして寫し傳へたるを、いとうれしくて、こたひ我社にて、摺り卷にものして廣く世に流布せしめんとす抑々此の燈は世にありふれたる註釋書の類とはことにして、貫之朝臣のこの日記を書かれしはかりそめのすさひにあらす、土佐の守に任されしを深く憤る由ありて、あらはには女のものせしさまになし深き心はその言葉のうちに、ふくめたりといふを、本として言詞は更なり文意をもいと委しく解なしなからいと廣く考證をも引き出でられたり凡國史國文に志ある士は座右一日も欠く可からざる最良書なり

發行所 東京京橋區築地二丁目廿一番地 國光社 (電話新橋八八)

○代價は通貨又郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送の事○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書郵送料送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月五日廿日發行

定價			廣告料
一冊	六冊前金(三ヶ月分)	十二冊前金(半年分)	五號活字廿三字詰一行金二十錢
拾錢	五十五錢	壹圓	
全國無遞送料			

明治三十二年七月四日印刷
明治三十二年七月五日發行

編輯兼發行人 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 川崎直衛

印刷人 東京市京橋區南八丁堀二丁目十一番地 並木良雄

發行所 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 (電話番號新橋八八) 國光社

新刊

家庭の鑑

菊版美本　全一冊

定價金拾八錢　郵税金四錢

本書は章を親子、兄弟、夫婦、繼母、嫂、養子、師弟、主從、朋友、寡婦、の十章に分ち明治の現代に於ける忠孝節義友愛貞操等の事實を詳叙せるものにして句々血を吐き言々人の肺腑を貫き讀むものをして感奮興起感極つて殆泣かしめむとするものあり書中收むる所のもの或は勅定の綠綬褒賞を賜り或は地方の美事として旌表せられたるものなれば皆是人の子弟婦妻の摸範に供すべき事實なり之に加ふるに婉麗哀痛の筆を以て事實を精密に寫したれば其情味の津々たる實に小説を讀むが如く身恰其地にありて其境に臨める感あり今や刻成りて出版す世の教育家父兄及子弟婦妻の坐右には一日も此可憐の書册無かる可らず家庭及學校にも亦必此種の册子を備へざる可らず、

發行所　東京市京橋區築地二丁目廿一番地（電話新橋八八）　國光社

【明治二十四年八月四日内務省許可　明治二十五年三月十二日遞信省認可】

（印刷所　國光社印刷部）